

32. 餅なし正月

別称：無

伝承地：四国中央市土居町北野・上野等

実施時期：正月

指定：無

テーマ：18

1. 地区の概要

四国中央市土居町の北野・上野地区は市の最西部に位置し、それぞれ土居町を横断する関川の北域・南域に分布する。古く藩政時代は北野村（天領・松山藩領、西条藩）、上野村（天領・松山藩領）となっていたが、明治期以降は関川村として合併、現在も同じ関川小学校校区として一つの地域を形成している。土居町北野・上野地域の人口は2,584人（令和5年時点）。

2. 実施場所

四国中央市土居町北野・上野地区を中心とした各家庭。北野には眞鍋姓が多く、眞鍋家一族に多く見られる風習とされる。

3. 伝承組織

明確な継承団体などはなく、家々の風習として伝承されている。

4. 由来伝承

正月に餅を食さない、用いないということを共通事項としながらも、その事由や年代は明確に言い難い。

5. 実施内容

一般的な認識では、正月行事に餅はつきものであるが、正月に食される雑煮や祀り物について、餅を用いない（食さない）文化が、市内西部の北野・上野地区の家々に伝わっている。中でも当地方では北野の眞鍋家一族について言及されることが多い。全国的にも餅を用いない文化自体は珍しいものではないようだが、愛媛県はその事例が多いと言われており、市内においては新宮地域にも認められる。



写真1 正月の餅なし雑煮

正月三が日には、一家の男性が神仏への供物や雑煮を準備する。毎朝雑煮を炊き、供物も新しくして、祀った後は家族で食するのが一般的とされる。供物や雑煮には餅が入っておらず、各家庭で多少の差異はあるが、メインは里芋（市内では「タイム」と呼ばれることが多い）や豆腐である（写真では葉物野菜が添えられている）。餅を用いないので、餅つきなどの行事も行われない。

餅なしについては、市内土居町の西部域に分布しており、東部域ではあまり見聞きされないものの、多くの家々で里芋が用いられるのは同様である。12個の里芋に12個の豆腐（餅を用いる地域は12個の餅。12の数字はおそらく1年間の意）が付き、炊いたご飯などと共に祀られることが多い。

その伝承は一樣ではなく、家毎の風習の違いの他、変遷もあるようである。聞き取りにおいては、以前は餅を食べなかったが40～50年前より雑煮に餅を入れるようになった家庭もある。また、雑煮に餅を入れるが、正月に雑煮を食べてはいけないとする家庭もあるようである。餅をもらうのは可であるとか、もらっても隠していたなど違いはあるが、餅つきの禁止も含め、餅なしに関連する多くの風習を残している地域である。

「平家の落人伝説」、「昔病気をしたから」、「貧しかったから」などの言い伝えはあるようだが、風習を守る家々もそのイワレについては判然としないようである。北野地区では、餅なしの風習だけでなく、門松やしめ縄、こいのぼり、キュウリの栽培を禁ずるなど、禁止的伝承が多い。餅なしの風習は、今も各家庭の年中行事として確かに伝承されている。と同時に里芋正月の文化圏と言い換えることもできるだろう。里芋はやまじ風との関係も深く、地域の在り様も伝えている。

6. 参考文献

愛媛県史編さん委員会 1984 『愛媛県史・民俗（下）』

7. 調査日

令和4年1月1日

（近藤 弘樹）

33. ひうら かわせがき 日浦の川施餓鬼

別称：川念仏

伝承地：松山市日浦地区

実施時期：8月15日

指定：無

テーマ：19・23

1. 地区の概要

松山市北東部の山間部に当たる日浦地区は石手川ダム上流の国道317号沿線に位置する。人口213人、103世帯。松山市青波町、大井野町、河中町、川の郷町、米野町、玉谷町、東川町、福見川町、藤野町、水口町からなる。松山市内でも高齢化、後継者不足や子どもの減少等が進んでおり、小中学校では少子化のため、市内中心部からの校区外通学の児童・生徒を受け入れている。

2. 実施場所

河中地区の石手川

3. 伝承組織

日浦公民館による主催となっている。公民館役員、各公民館分館長、各役員、PTA役員、公民館主事が中心となり、準備、運営を行っている。

4. 由来伝承

日浦地区と隣の湯山地区との境界に位置する宿野町には戦国時代、「奥之城」という城があった。天正13年(1585)、豊臣秀吉による四国平定の際に、伊予国に攻め入った豊臣軍に敗れて「奥之城」は落城し、城を守っていた7人の武将が亡くなった。その武将の霊を慰めるために始まったとされ、川施餓鬼だけではなく、福見川町の提婆踊り(愛媛県指定無形民俗文化財、現在、継承者不足で中断)や各地で行われる「川念仏」でも7人の武将の霊を慰める目的で行われている。

川施餓鬼はもともと日浦地区の中でも、藤野町、水口町、河中町、東川町で盛んに行われていたが、明治天皇の崩御を機に開催を自粛し、長い間、中断していた。明治時代には、藤野町の円福寺、高福寺、水口町のお堂に大幟を立てて法会を行い、終了後に東川町の大幟を先頭に練り歩いた。大幟を6人程度で支え持って、竿頭に綱をかけて四方から幟が転倒しないように引っ張って支えたりした。大正2年(1913)の川施餓鬼を中断する際の記録(区長文書)が残り、『松山市史 第四巻』に所収されている。それによると「古来より旧七月十五日幟立、大正式年度迄ハ、右幟ヲ川筋

四ヶ村ノ者ガ十五日ニハ東川ヲ始メトシテ、次ニ川(河)中、次ハ藤野、水口、右ノ四ヶ村者ガ藤野円福寺、水口村堂、藤野高福寺三ヶ所ニ立テ、祭仏申、其ヨリ川中ノ学校前ヨリ四方江手繩ヲ引、東川崎(先)立ニテ、東川下迄上リタル事アリシガ、大正式年ヨリ四ヶ村熟議上此年廃止ス」とある。石手川の中に入りながらの勇壮な行列であったが、中断後は、各町で念仏行事を行うようになった。

平成4年(1992)に日浦公民館の主催行事として、地域おこしのために、途絶えていた川施餓鬼を復活させた。

5. 実施内容

川施餓鬼は、武者の絵を描いた大幟を立て、鉦や太鼓を鳴らして念仏を唱えながら川沿いを練り歩く盆行事である。大幟のことを「ヤスマクサン」と呼んでいる。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、令和3・4年は中止となり、令和5年は台風接近での悪天候と河川の増水が予想されたため、「川施餓鬼」自体が急遽中止となった。例年、川施餓鬼に付随するイベントとして様々な出店や魚のつかみどり大会、抽選会、太鼓の演奏などもあり、多くの観客で賑わう。

令和5年は、8月15日には、8時30分から日浦公民館の関係者が集合し、会場の準備を行い、12時30分には、各町から1名以上が参加して、大幟(ヤスマクサンと呼ばれる)を担いで、石手川の中を練り歩く予定であった。

大幟は、水口町、藤野町、河中町、東川町の4町



写真1 川施餓鬼のヤスマクサン

立て、それを会場の河中町の石手川に持って行って担ぐ。令和5年には悪天候により、藤野町、河中町、東川町では前日の14日に大幟を町内に立てたものの、夕方には撤収した。水口町では14日7時に水口集会所前に武者絵の大幟を立て、天候が悪くなった15日8時に撤収した。水口町の幟には「昭和六十一年 寅年龍集 七月吉辰日 為奥之城主七人神霊菩提 大願主 水口町中」と記され、七人の武将の菩提を目的とした行事であることがわかる。平成4年に公民館主催行事として「川施餓鬼」が復活して、15日には幟を河中町の石手川に持って行って担ぐようになったが、それ以前にも、お盆に幟自体は立てていた。かつては8月14日に念仏を唱えていたが、現在では行われていない。

青波町では現在、大幟は立てないが、かつては立てていた。15日8時から青波公会堂の前に奥之城の武将七人の供養塔を祀った祠があり、その前で、住民6名が鉦に合わせて念仏を唱える。供養塔には団子をお供えする。念仏は8月6日夜、7日夜、15日朝に唱えることになっている。かつては、ここに幕を張ったり、高灯籠や提灯を飾ったりして祭壇を設け、多くの住民が参集した。住民が裸足で、東西の二列に分かれて右手に笹を持ち、鉦、太鼓に合わせて笹を振った。



写真2 青波町の念仏

東川町では、集会所前にヤスマクサンを立て、かつては住民が手に南天を持って鉦、太鼓に合わせて念仏を唱え、10の題目を唱えていた。その中には「奥之城さん」（武将）、「阿弥陀さん」、「お大師さん」（弘法大師）、「新念仏（あらねんぶつ）」（新仏）、「村の乞い念仏」（地区の無病息災）があり、それぞれの供養や利益を目的としていた。

川の郷町では大幟は立てないが、8月14日夕方に、向川橋の上で法会（これをかつては「奥之城施餓鬼念仏」や単に「川念仏」という）が行われて、奥之城の武将の霊を慰め、2人の先達が川に降り立ち、祈念して手にした笹枝を川の水で清めて、念仏を始める。住

民は手にした笹の葉を念仏のたびに一枚ずつちぎって、橋の上から川に流していたが、現在では行われていない。

以上のように、勇壮な川施餓鬼は明治時代までは実施されていたが、明治天皇崩御で自粛、中断後、公民館のイベントとして復活したが、日浦地区の各町では「奥之城」の武将を供養する念仏等は縮小しながら継承されている。7人の武将の霊ということで、非業の死を遂げた者や祀り手のいない無縁仏などが四国地方などに色濃く見られる「七人みさき」の信仰にも関係する事例であり、口頭伝承だけではなく、念仏供養の盆行事として儀礼化して「七人みさき」関連伝承が受け継がれている点は興味深い。

6. 参考文献

- 松山市日浦公民館 1991 『日浦の里』
- 松山市史編集委員会 1995 『松山市史 第四巻』松山市役所
- 松山市教育委員会編 2000 『松山の民俗—無形民俗文化財調査報告書—』

7. 調査日

令和5年8月15日

(大本 敬久)

34. 山鳥坂の施餓鬼念仏

別称：施餓鬼・おせがき・踊り念仏
実施時期：8月8日

伝承地：大洲市肱川町
指定：無

テーマ：19

1. 地区の概要

施餓鬼念仏が行なわれる本願寺（高野山真言宗／大洲市肱川町山鳥坂4288番地）は、肱川の支流である河辺川が大きく蛇行する独立した丘陵地の中腹にあり、寺の上方には春日神社があり、一部堀城跡として市の指定史跡となっている（写真1）。山鳥坂の人口は147世帯369人（令和2年国勢調査）。

2. 実施場所

本願寺は河辺町との境に近く、現在建設中の山鳥坂ダム工事区間の最奥部に位置する。歴史的な経緯から、檀家は河辺町を含む一帯に多く、現在、本願寺での施餓鬼念仏に参加している3地区のうち、大成・植松は河辺町、上嵯峨谷が肱川町に属している。

3. 伝承組織

行事の担い手 行事は鉦と太鼓で行われ、周辺の地区から数名が参加する。多い時には、10地区から太鼓10以上、鉦も20以上が参加したが、高齢化・過疎化などで、近年は3地区で運用され、鉦・太鼓それぞれ4、5名程度で実施されている。

役 鉦・太鼓ともに頭が1名ずつで、鉦は「頭鉦（カシラガネ）」、太鼓は「胴取り（ドウトリ）」と呼ばれ、3地区の輪番制になっている。

装束 鉦は袴を着け、編み笠を被る。太鼓は袴に編み笠を着用。鉦の袴・編み笠は40年ほど前から着用するようになり、それまでは鉦・太鼓ともに袴のみの着用であった。

4. 由来伝承

毎年8月8日に行われる施餓鬼念仏は、大野直之（行）公（堀城・松窪城主）、本願寺の本尊、末寺本尊、そして前年7月1日から翌年6月30日までに亡くなった「新亡」などの霊に供えるものである。

大野直之公は地蔵ヶ嶽城（現大洲城）の城主だったが、小早川隆景軍との戦いに敗れて堀城に落ち延び、最終的にこの地で討たれたと伝わる。

行事が始まったのは戦国時代末か江戸時代初期と云われ、およそ400年の歴史があるとされる。戦国時代に非業の死を遂げた人を用い、すさみきった世の中において念仏に救いを求めようとしたのが由来と考えられている。

この施餓鬼念仏は、立って動きが入る「立念仏」が特徴で、立念仏になったのは江戸時代中期とされる。

5. 実施内容

400年のあいだ絶えることなく本願寺で実施されてきた施餓鬼念仏だが、コロナ禍の影響により、令和2年（2020）は

読経のみとし、念仏は中止。また、令和3年（2021）は午後から「新亡供養念仏」のみ実施した。

こうした経緯を経て実施された令和4年（2022）の施餓鬼念仏は、大幅な変更のうえ実施された。

写真2は平成9年（1997）に改定された『當山施餓鬼念仏順序』だが、従来、この行事は午前9時から午後4時頃まで一日を通して行われた。「拝銅鑼念仏（ハイドロー）」から「各本尊念仏」までが午前中の行事で、午後1時から遺族を迎えて「新亡供養念仏」が営まれる。念仏は「イレハ（入れ庭／入れ念仏）」「ヒキハ（引き庭）」で構成され、従来、午前に1回、午後1回ずつイレハ、ヒキハを行ってきた。

しかし、コロナ禍が収まる気配がなく、また、近年は猛暑が続いていることから、本年は午前中で行事を終わらせることになり、イレハ、ヒキハを従来の2回から1回に変更した。また、例年は、大野直之公の子孫である和氣家が所蔵する、直之公ゆかりの大小の刀2振り（脇差は直之公所有と伝わる）を当日持参して本尊前にお供える。なお、調査年（2022）は和氣家が参加を見合わせたため、刀の奉納は行われていない。

鉦・太鼓ともにベテラン揃いだが、本願寺での行事は一年ぶりの開催となること、また地区も異なることから、呼吸を合わせるため、事前に6回ほど練習を行った。

8月8日当日、関係者は7時頃から本願寺に集まり、念仏の舞台となる本堂前の境内に日除けのための鋼管を組み、その上に簾をかけ、奥に4台の太鼓が据えられた。太鼓頭である胴取りが打つ右端の太鼓は、直之公が使用したと伝わる陣太鼓である。（写真3）

今年は午前中に新亡供養を行うため、喪服姿の遺族が本堂に参集した。（写真4）

ニワカリ／ハイドロー（写真5）

當山施餓鬼念仏順序では、ハイドローから始まることになっている。この作法は、三久保組が専任していたが、三久保組の参加がなくなったため、最初に「ニワカリ（庭借り／浄地招霊念仏）」を行い、次にハイドローが行われる。

午前9時、施餓鬼念仏はニワカリから始まった。これは念仏を行う場を浄めるとともに、「これから念仏を始めますので庭をお借ります」の意味があり、鉦がリードをとる。

掛け声とともに鉦・太鼓が一斉に打ち鳴らされ、「モーミナム モーホーミドホオオナム モーホミド」を7回繰り返

したのち、「モーリョウ（亡霊）」、「クズシ（打ち上げ）」、「モーリョウ、クズシと進んだ。（モーリョウ、クズシは図2を参照）

続いて、直之公に捧げるハイドーラ（拝銅鑼）が行なわれた。ここでは、太鼓が頭をとり、鉦が従う。

太鼓の「ナムホーミードーホイ」に続いて鉦が「ナムホーミードーホイ」と掛け合い、その後は太鼓のリズムに鉦が合わせ、1セットを21回繰り返す。（太鼓のリズムは図2を参照）

本来は88回繰り返したが、44回、33回と次第に回数は変化し、現在は21回で打ち止めとなる。88回の時は1時間ほどかかるため、リズムを崩さぬようにしながら、途中で太鼓・鉦ともに次々と人が交代して続いていた。

口上（写真6）

ハイドーラが終わると、胴取りが和気家（本年は住職）に対して、次のような口上を述べる。

胴取り「ただ今の念仏は大野直之公にお供えいたします」

住職「頭鉦さん、胴取りさん、分けては申しませんが、ただ今は大野直行公に対して念仏をいただきまして誠にありがとうございます」

鉦・太鼓は休憩に入り、総代、住職の挨拶ののち、施餓鬼供養と新亡供養の法要となる。住職の読経に続き、講員による御詠歌が奉じられたのち、遺族による焼香となる。

イレハ（写真7）

焼香が続くなか、午前10時30分から、ニワカリに続いてイレハ（入れ庭）が始まった。先述のように、本尊、末寺本尊、新亡供養のための念仏で「入れ念仏」とも呼ばれる。このイレハに対し、念仏を締めくくることがヒキハ（引き庭）で、ヒキハでは四方八方をお祓いするため、九字を切る動作が入る。

ニワカリは、前回同様「モーミナム～」を繰り返すが、7回目の時、鉦を大きく上に挙げる「見せ鉦をして切る」動作をする。これは、7回を一区切りとするもので、これを3回繰り返す。

次にモーリョウに入るが、最初は本尊供養のため、「モン返し」といって、モーリョウの鉦・太鼓の掛け合いの文言を二度繰り返す。その後クズシ（打ち上げ）となる。

次に末寺本尊および新亡供養の念仏として、モーリョウ（ここではモン返しはしない）からクズシ（打ち上げ）を行い、イレハは終了。

ヒキハ（写真8・9）

10分ほど休憩後、締めヒキハに入った。

最初に太鼓が入る（リズムは図2ヒキハ参照）。次に、ニワカリとして、モーリョウ、クズシ（打ち上げ）を2回繰り返す。これが最後のニワカリであり、ここで借りていた庭を返すことになる。

リズムが変わり、頭鉦が九字を切るヒキハの動作に入った。ヒキハには、「角引き（カクビキ）」「八方引き（ハッポウビキ）」「六方引き（ロッポウビキ）」と、三通りの方法がある（図1）。現在、角引きは1名が継承するが、六方引きを継承する人はいないようだ。

今回は八方引きで行われた。中央を起点に鉦・太鼓に合わせて、8方向に動く。①から④までは3往復、⑤⑥は2往復する。④の胴ムカイではお辞儀をするのが作法とのこと。

八方引き後、掛け声で「打ち上げ」に移り終了。

口上（写真10）

終了後、頭鉦と胴取りの二人が揃って、本堂の縁に並ぶ遺族代表、各寺の代表に対し口上を述べる。

頭鉦「ただ今の念仏は、ご本尊様、新亡様にお供えいたします」

遺族代表「遺族を代表いたしまして一言ご挨拶を申し上げます。念仏の頭鉦さん、胴取りさん、分けては申しませんが、ただ今は私たち新亡者のために丁重なる念仏をいただきまして、誠にありがとうございます。（後略）」

以上をもって、施餓鬼念仏はすべて終了となる。午前9時に始まった行事は、11時過ぎに幕を閉じた。

なお、『肱川町誌』（昭和52年版）の「施餓鬼念仏」の解説には、「楽 六つ頭 もん返しを組合せて行なわれる」とあるが、地元の方に確認したところ、「楽」「六つ頭」については聞いた覚えがないとのこと。

また、図1「角引き」での「ケリ」は、本尊に向かった時のみ「ケリをいれる」とのこと。

※「組施餓鬼」と「寺施餓鬼」

本願寺での施餓鬼念仏に先立ち、参加した3地区においても、地区のお堂に納められた本尊と新亡等供養のため、念仏が行われている。植松・大成地区は例年8月7日に実施するが、大成地区はコロナ禍のため3年間中断している。上嵯峨谷地区では例年8月6日に実施している。集落のお堂で行うものを「組施餓鬼」、寺で行われるものを「寺施餓鬼」としている。

また、住職によれば、施餓鬼念仏は肱川町大谷地区、西予市城川町でも行われているが、鉦・太鼓の叩き方が異なるという。

6. 参考文献

肱川町誌編纂会 1977『肱川町誌』

河辺村誌編纂運営委員会 1978『河辺村誌』

肱川町誌編纂会 2003『新編 肱川町誌』

田中孝子 2017『大洲・内子とその周辺の民間信仰と大師信仰』

7. 調査日

令和4年6月13日、同8月8日、同8月26日

（太田 由美子）

写真撮影（大西 朋子）



写真1



写真6

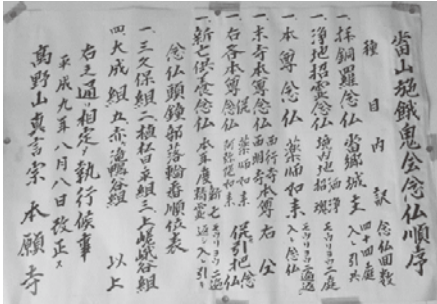


写真2



写真7



写真3



写真8



写真4



写真9



写真5



写真10

みついつくしまじんじゃあきまつ
35. 三津巖島神社秋祭り

別称：秋祭り

伝承地：松山市三津・古三津地区

実施時期：10月5・6・7日

指定：無

テーマ：16

1. 地区の概要

三津地区と古三津地区のそれぞれに、神輿の担ぎ手組織（取締会）が2つずつ、計4つ存在する。

三津地区は、松山市西部の港町で、江戸時代より物流・交通の結節点として栄えた。古三津地区は、三津地区の東側に宮前川を挟んで隣接しており、戦前からの集落を除けば、高度成長期以降に田畑を転用することで形成された新興住宅地的色彩を有している。なお、前者は三津浜小校区に、後者は宮前小学校区に一定程度重なる（ただし宮前小学校区内に神域の異なる地区も存在するという）。参考までに三津浜小校区の人口は4,571人、世帯数は2,178世帯、宮前小校区の人口は14,057人、世帯数は6,233世帯である（令和2年10月1日現在）。

2. 実施場所

鉢合わせ・宮出し・宮入りなどの祭礼は三津巖島神社、神輿の巡町は三津・古三津の各町内において実施される。

3. 伝承組織

三津北、三津南、古三津北、古三津南の4地区にそれぞれ、担ぎ手組織である取締会が配置されている。また、巖島神社はもちろん、それぞれの地区の氏子の代表である氏子総代や、住民の代表である代議員も、取締会をサポートする。なお、元々、古三津は地区全体で1つの取締会を構成していたが、高度成長期以降の宅地化によって人口・世帯数が増加し、南北に分かれることになったという。

取締会の内部には階層性を有する多数の役職が用意されている（南北総取締、総取締、総取締補佐、副総取締など）。構成員は、参加してからの累積年数や、他の構成員をまとめあげる能力などを勘案されうえで、階層上位に引き上げられていく。誰を引き上げるかについては、選挙の類ではなく、上位の役職者からの指名で決まるという。なお、取締会の構成員は、基本的には地区内在住の男性である。

4. 由来伝承

五穀豊穡と周辺地区の繁栄を願う祭礼である。毎年、10月5日から7日にかけて実施される。

なお、三津巖島神社は、元々、古三津地区内の新屋敷にあったとされている（慶長年間に現在地へ奉還）。神社には福岡県の宗像大社由来の宗像三女神が祀られている。

5. 実施内容

祭礼の準備は7月から始まる。三津の取締会は、関係者の待機場所として使用するために公民館を予約する。また、8月末に構成員たちを集め、役付け（役職決め）を行う。古三津の取締会は、7月末に神輿の掃除のために集まり、その場で構成員の顔合わせも実施する。三津が8月末に役決めを済ませるのに対し、古三津は、役職名を記した櫛を受け渡すための会合を10月1日に実施する。

三津と古三津のいずれの取締会も、8月末から9月にかけて、必要に応じて神輿の修理作業を実施する。それまで、神輿は巖島神社境内の神輿庫（しんよこ）に安置されている。

例年、9月初頭に巖島神社で会合の場が持たれる。会合には、三津と古三津の両取締会の執行部と巖島神社の宮司のみが参加する。また、この会合に先立って、氏子総代会と宮司の間でも、祭礼の運営方針などを確認し合う場も持たれるという。

その後、9月中に、三津側および古三津側の各地区で、取締会、氏子総代会、代議員の3者による会合の場も持たれる。巡町のルートや当日の注意事項などを確認し合う。

10月に入ると、祭礼の本格的な準備が始まる。三津地区では、10月5日の朝から、公民館に荷物を搬入し、取締会構成員の待機場所とする。古三津側の取締会も、「宿」と呼ばれる待機場所を用意する。

5日夜（宵宮）に、三津北、三津南、古三津北、古三津南の各地区より、神輿が神社に集まる。その際、境内南側の馬走りで最初の鉢合わせ（喧嘩神輿）が実施される。神輿を激しくぶつけ合うことによって、祭神の力も増し、結果的に氏子たちが享受する恩恵も大きなものになる。なお、鉢合わせに用いるのは、三津

北と古三津南それぞれの神輿2基のみで、前者の神輿を三津南北の取締会構成員たちが、後者の神輿を古三津南北の取締会構成員たちが、協力して担いでいる。鉢合わせの回数が決まっているわけではないが、例年、最低でも3回、概ね4～5回ほど実施する。



写真1 厳島神社境内での鉢合わせ

鉢合わせが終わると、各地区の神輿は神社本殿に上納され、7日未明まで安置される。なお、上納の順番は固定化されており、例年、古三津南、古三津北、三津北、三津南の順に実施されている。

6日朝に神社で秋季大祭の祭礼が実施される。同日18時頃より、子ども神輿の宮出しが実施される。子ども神輿の担い手組織は各町の子ども会である。

同日20時頃、神輿の担ぎ手たちは、海に向かい、海水で身を清める(潮垢離)。21時頃、担ぎ手と氏子たちは神社本殿で御霊移しに臨む。祭神の御霊を神輿に移すための儀式である。その際、担ぎ手と氏子たちは本殿の中でうつ伏せになる。御霊は神職の手で神輿に移される。その際、神職はうつ伏せになった担ぎ手たちの上を歩く。御霊を床に付けないようにするためである。

7日0時半頃より、古三津虎舞保存会による虎舞が奉納される。虎舞は、松山城主加藤嘉明による虎狩りの様子を、舞の形で表現したものである。

虎舞が終わるといよいよ宮出しである。神社南端の大鳥居前に、担ぎ手たちが終結する。1時頃、担ぎ手たちは本殿に向かって一斉に走り出す。これを走り込みという。走り込みの順番も、上納の祭と同様、古三津南が最初、三津北が最後である。

本殿に走り込んだ担ぎ手たちは、安置してある神輿を担ぎあげると、境内を時計回りに3周したのち(喧嘩支度)、馬走りにおいて鉢合わせに臨む。

鉢合わせが終わると、神輿はそれぞれの地区に散会していく。時間帯は2時半から3時頃にかけてである。

担ぎ手たちはそれぞれの待機場所で朝食をとったのち、同日夕方まで神輿を担いで各地区を巡町する。

21時頃から宮入りと呼ばれる一連の祭礼である。まず、巡町していた神輿が神社に帰ってくる。4基の神輿はそのまま境内の馬走りに滞留し、最後の鉢合わせが始まる。鉢合わせが終わると、神輿は神社本殿に集められ、御霊移しの儀式に臨む。神輿から神社に御霊を戻したのち、神輿は境内西端の神輿庫に格納される。

例年、祭りの終了後1～2週間以内に、神輿の清掃をおこなうという。

6. 参考文献

- 池田善昭 1983 「松山市三津浜の港町としての盛衰について」『歴史地理学』第122号, pp.21-34
松山市教育委員会 2000 『松山の民俗』松山市役所

7. 調査日

祭礼の調査を令和4年10月5日～7日に、関係者への聞き取りを同年11月3日、12月11日、12月21日に実施した。

(二神弘樹・木村梨花・重見れみん・長渕嘉音・藤原光人・矢野剛成・山口信夫)

みさきはちまんじんじゃたいさい
36. 三崎八幡神社大祭

別称：無

伝承地：伊方町三崎

実施時期：10月8日～9日

指定：無

テーマ：2・22

1. 地区の概要

三崎は佐田岬半島西部、三崎湾に面する地区。

2. 実施場所

三崎八幡神社、三崎地区。

3. 伝承組織

伊方町三崎地域のうちの三崎地区（本三崎などと区別して言う場合もある）で、東組（中村・札場・上・須賀）と西組（杉山・中西・大西・赤坂）に分かれる。神社総代は東西から4人ずつ合計8人いて、そのうちの1名が総代長となる。また上記8地区が輪番でジンドングミ（神田組）として祭礼の準備等の補佐的役割を担う。青年団は三崎地区全体で組織し全体統括する青年団長もいるが、東西それぞれの祭事部長が任命され、それぞれ東西両組のネリ等の祭礼関係の諸事を取り仕切る。

4. 由来伝承

不明。

5. 実施内容

9月に入って各芸能等のネリの練習が始まる。場所は三崎中央集会所。ここはかつて昭和9年（1934）に建てられた木造瓦葺き平屋建て公会堂（のちに三崎公民館として使用）があった場所で、そのころから東西組双方の拠点となっていた。五ツ鹿は西組（中学生）、相撲甚句は東組（小学生）、唐獅子は東西合同で青年団がおこなうが、太鼓を打つ子ども3人のうち例えば東組から1名西組から2名出すと、翌年は西組から1名東組から2名出すというふう交互に出す人数を変える。また牛鬼は東組、四ツ太鼓は西組から出るが、後述するように牛鬼の組み立てなどは東西合同でおこなっている。ネリの練習はこのうち1階の広い部屋で唐獅子、五ツ鹿と相撲甚句は建物前の野外でそれぞれ練習がおこなわれる。

9月23日 タケワリ

朝7:30 三崎港の海沿いにある保健センター横の広場に東西両組の青年団や青年OBが集まり、牛鬼の胴体を形作るための竹を割ったものを作る作業をする。竹は令和5年の場合、内子の業者を通じて鬼北町から24本のマダケを卸してもらう。作業はまず機械で竹を八等分にして、その一本ずつを手分けして、節をきれいに取る（メントリという）のと、組み立てる時に刺さりやすいように先端を薄く削るなど、下ごしらえをする。11時頃ようやく作業が終わると、20～30本毎に縄で縛る（この間、手の空いている人は掃除）。縛った竹の東

を海に沈める。この時にフルダケ（昨年牛鬼に使った古い竹）も用意しておいて同様に東にして沈める。新しい竹は重いので沈んでいくが、フルダケは軽くて沈まないのでコンクリートのブロックに紐を付けたものを重石に付けて沈ませた。上げる際には重石の紐を切ると竹が浮かび上がってくる。海に沈めておく理由は竹を柔らかくすると、竹に付いている虫を殺すためだという。この日の作業はこれで終わり、弁当を食べて解散となる。26日の夕方に再び集まって海から竹を引き上げる。

9月30日～10月1日 牛鬼作り

牛鬼の胴体を作る作業で、これも東西関係なく青年団やそのOBなど30数人が集っておこなう。かつては海岸近くにあった農協の建物でおこなっていたが、現在はJAにしうわ三崎共選の選果場で作る。はじめに祭事部長の挨拶があって、全員が紙コップからお神酒をいただいてから、作業がはじめられる。後述するように牛鬼は立てた状態にして四ツ太鼓と競い合うので、担ぎ手の人数や体力も勘案しながら何mの胴体を作るか相談するといひ、コロナ明け4年ぶりの祭礼となる令和5年は8mの胴体を作ることとなった。

まず目安とするメジャーを床面に伸ばして、先頭の首の根元部分にあたる部分に使う木杵を先頭に置く。この木杵は「D」の形を左に倒したような形状で、下辺となる直線部には藁縄が巻かれている。幅140cm、高さ105cm、奥行き70cm。上部に牛鬼の首を支える柱材を挿し入れる鑿状の金具が付き、最前部の湾曲部を作る際の目安とする曲がった木材が左右にひとつずつほぞ挿しで付けられている。この木杵の後方にカンヌキと呼ぶ木材を左右方向に向けて前から適宜間隔をあけて置く。カンヌキは藁縄を隙間なく固く巻いた木材で、それを置いた間隔で牛鬼の胴体の形状を確定させる。調査時は6本置かれ、一番前のカンヌキが長さ153cm、一番後方が197cm、もっとも長いカンヌキは後ろから2番目の218cmだった。カンヌキの両端は縄を巻いておらず、ほぞ穴をあけて四角いほぞを上下に貫通させており、このほぞに割った竹をあてがいながら、胴体の縁となる下辺の輪郭部分を作っていく。竹はタケワリの時に作った割竹2本を内側どうし向かい合わせて数ヶ所紐で括ったものを使う。まずはカンヌキの下側の内側に沿うように竹をあててそれぞれほぞと竹を紐で縛って固定する（この時、竹の細くなる先端側と太くなる根元側のバランスや、湾曲させた竹の左右バランスなどに注意する）。

そうして牛鬼の体の前側と後ろ側から長い割竹を湾曲させて、ほぞに紐で縛り付けて輪郭を決めると、同じ要領で続いてほぞの内側の上、外側の下、外側の上と順番に付けていき、都合内外上下に4重の割竹の輪郭を作ることになる。

それができると次は、体の前後方向に竹を付けていく。まず一本の割竹の先を輪郭の最前部の竹に挟み紐で縛って固定して、背骨のように中央を通して末端を最後部の輪郭の竹に挟んで湾曲させる（この時使用する割竹は新しい竹を使う）。次によくしなるフルダケの割竹を左右方向に湾曲させて付けていく。先ほどと同様に先端は輪郭部に挟み紐で縛って固定しながら中央を高く湾曲させる。前後方向と左右方向の竹の交点はしっかり紐で固定する。こうして後方の腹部が大きく膨らむ牛鬼のおおよその体型を決める。形が決まれば同じように割竹の先端は輪郭部に挟んで縛って固定させつつ、竹どうしの交点も縛って固定させながら、前後左右方向の竹をそれぞれ足していく。全体に基盤状に割竹が交差しておおよその形ができると、さらにその交点を斜めに交差するように竹を重ねていく。場所によっては輪状に作った竹をそのまま内側にあてて接点をすべて紐で縛り、とにかく胴体の曲面部分を補強していく。さらに体の側面部の補強として、カンヌキの左右端の上下に割っていない丸竹を3本ずつあてがい、そのまま紐を掛けて胴体に縛り付けていく。

さらに竹を取った際に切り落とした葉が付いたままの小枝を緩衝材代わりにしっかりと胴体の縁となる輪郭部分に括り付け、胴体の縁全体を藁で編んだ菰で覆い包み、その上から藁縄で隙間なく縛ってしっかりと補強する。なお藁縄は両手を広げたくらいの長さで1ヒロ2ヒロと数え、「何ヒロ取って」という言い方がなされていた。こうして二日がかりの胴体製作がようやく完成する。この胴体は7日に拠点とする神社近くのスペースに移動させ、この上から黒い布を掛けたり、牛鬼の頭や首部分を挿し入れたりする。

10月4日 ヤグラクミ

牛鬼がその胴体を高く高く立ち上げるための足場とするヤグラと呼ばれる基盤状の衝立を作る。朝8:00から青年団が集まって、倉庫にしまっていた杉丸太（樹皮は剥いている）を海岸近くのネリがおこなわれる場所へ運んで組み立てる。まずは長めの9本の杉丸太を一列に立てていく。間隔はおおよそ130cmほどで、地面に穴を掘って埋めて立てる。次にその9本に対して水平方向に杉丸太を結び付けていく。短いので2本をつないで一段作るが、杉丸太の根元の太い方を外側に、重ねて繋ぐ方は杉材先端の細い方を使う。また木の反り具合などもみながらよい向きに回して決めれば藁縄でしっかりと結び付ける。一段できるとそこを足場にさらに上段を作るが、数人の青年団が下の丸太をまたいで座り、肩に次の丸太を担いだ高さで間隔を決めていく。さらに高くなると全体が風で

揺れないように暫定的に斜めに丸太を立てかける。さらに離れたところから全体のバランスを見て指示を出す役、下から次の杉丸太を渡す役も付いて、徐々に高くなって最後は13段めまで組み上げた。またこれらが倒れないようにつかい棒を海側に組んでおり、これらは丸太どうしを番線を巻いてつなげて強固に固定した。さらに基盤面の裏から「×」と「◇」の形に杉丸太をさらに括り付けて補強する。

10月5日 ハチマキクバリ

東組は牛鬼を担いでもらうために赤の鉢巻、西組は四ツ太鼓を担いでもらうために黄色の鉢巻をそれぞれ地区の人に配って担いでくださいとお願いに廻る

10月7日（宵祭前日）

朝9:00から西組の青年団では四ツ太鼓を組み立てる。これには東組は参加しない。四ツ太鼓の部材は御旅所の建物内に仕舞われており、それを海側の広場に運んで組み立てを始める。なお各部材は直接地面に置いたり、塗装の色の違う材を重ねたりしないように必ずリン（リン木とも言う）を下に敷く。四ツ太鼓の脚部は車輪ではなくスラと呼ぶ櫓のように滑らせる部材で接地しており、その上に朱塗りの四本柱や太鼓を立てる（皮面上下）部分や欄干を組み、最上部には唐破風屋根が載る。担き棒はひとまず通常の長さの棒を取り付けるが、それとは別に、牛鬼と競い合うネリの時にはオウボと呼ぶ9mの長さの棒に付け替える。

一方、西組のOBたちを中心に「義経様」（御所車とも呼ばれる）と呼ぶ2層の山車を組み立てられる。上段には源義経とされる甲冑姿で床几に座る武将の人形が飾られる。下段には赤字に竜の刺繍が入った幕を巻いており、後方の見返り幕には鞍馬天狗のもとで武芸の修業をする幼い頃の義経を赤地に刺繍で描き女性と思われる寄進者の名前が多く並んでいる。これらは道路端に組み立てて置かれるが、現在のところ曳いて動かしたりすることはない。

東組は牛鬼の胴体を神社下の広場に運び、黒布を被せて頭を付けて完成させた。またネリで牛鬼の胴体を立てる時の調節に使うサシマタという杉丸太2本を太紐で繋いだ棒も準備する。

フナグラから船形の山車である「住吉様」（ジンプネとも呼ばれる。取り付けられた幟・提灯には「神宮丸」とある）を出して飾る。船体の左右に張られている幕は赤地に巴紋の刺繍などシンプルながらもいずれも古く貴重だが、とくに内側に掛けている白地に花などをあしらった染色の布が古色にして鮮やかで貴重である。船先には九曜紋をあしらひ、船首には平清盛だとされる櫓を持った武官束帯姿で座す白髯の人物の人形が飾られる。人形の上の唐破風屋根にも布が掛けられ、船体には色とりどりの短冊を付けた笹が四方に立てられる。

第3章 詳細調査報告

また、神社の石段を下りて集落に入る入口や、御旅所の手前など、神輿の通る2か所に、竹で囲った背の高い門を作り、上部に提灯2つを吊るす設えが総代らによって設置され、それ以外の参道や地区内の一部に飾られる提灯はジンデングミの人たちによって設置される。ジンデングミはこのほかにも神輿やウマと呼ばれる神輿を載せる台の準備出し入れなどさまざまな準備や片付けに徹する。天狗はジンデングミから出す名誉職である。

この日の夜20時頃、中央集会所の入口には左右に「御神燈」と書かれた提灯を掲げる。唐獅子・五ツ鹿・相撲甚句が集まる（令和5年調査時は唐獅子と相撲甚句のみ）。それぞれ本番用の衣装に着替え、化粧するなど、それぞれに準備する。また「義経様」や「住吉様」の人形の前に三宝に載った鏡餅と清酒を供えておく。

10月8日 宵祭

日付変わって深夜1時過ぎ、準備が整うと、集会所で相撲甚句・五ツ鹿・唐獅子などが1回演じ、お神酒を頂いて、歩いて神社へ向かう。神社に着くと神主のお祓いを受けて相撲甚句は拝殿の中で芸を奉納、唐獅子の場合神社に着くと太鼓を打つ子どもたちが宮司に修祓を受けて、拝殿前で舞を奉納する。次に宮司宅にて舞い、さらに昔からの古い道をたどりながら家々で獅子舞を舞う。こうして夜通しから日中にかけて食事や休憩も挟んで断続的に家々を巡って唐獅子を舞っていく。

この日の夜から、八幡神社では宵祭がおこなわれる。この時の神事で準備される神饌が特殊で、近隣では珍しい熟饌（素材のまま供えるのではなく調理した神饌）が供えられる。まず本殿の3柱の祭神には、それぞれ三方5基に①瓶子2本にお神酒、②下に半紙敷いて大きな鏡餅、③皿の上に鯛2匹と鮑2つ、④器に注いだ甘酒、⑤白木の箸・小皿に細く切った海苔と昆布と干瓢（これをカイサイ（海菜）という）・皿に細く切った牛蒡と里芋と大根（これをヤサイ（野菜）という）・皿に葉蘭を敷いて円筒状に固めたご飯（これをオジンクと呼んでいる）。以上の5基の供物を供える。また末社には各社1基の三方に、白木の箸（前方）・カイサイ（左前）・ヤサイ（右前）・オジンク（中央）・平皿に鯛1匹（左後）・瓶子（お神酒）1基（右後）を並べたものを供える。これらの献饌のあと、拝殿で「稚児の舞（浦安の舞）」、さらに神楽（令和5年は内子町の立川神楽）が奉納されて、撤饌、閉扉で神事が終わる。

10月9日（本祭）

朝8時、宮出し。東組は八幡神社の石段の袂に牛鬼と神宮丸が陣取っている。西組の四ツ太鼓が道路を挟んで八幡神社参道まで担いできて太鼓の演奏をする。このあと、四ツ太鼓に乗る太鼓打ちの子どもたち（2名。原則、西組の小学1年

生。かつては4名いて、東西から2名ずつ出した。）を地面に付けないように背負って階段を登って本殿へ向かう。東西の祭事部長もいっしょに行く。本殿では子どもらが拝殿に入って宮司が祝詞を唱え修祓しお賽銭を上げてお守りをもらう。もらったお守りは帯の中に挟んでおく。東の祭事部長は牛鬼の頭に付けるお札と榊の枝をいただく。東西それぞれ戻って、牛鬼・四ツ太鼓それぞれ担いで「オーラーヤッセ」などと声を出しながら海沿いの広場へ移動する。（東組の神宮丸もそのあとに続き、広場から道路を挟んだ向かい側の路肩に据え置かれる。）

一方、神社では9時過ぎから拝殿でオチゴサン（浦安の舞）が最後の練習をおこなったあと、10時から例祭の神事が始まる。拝殿内に正面向かって左側に神職ら5人、右側は最前に三崎地区の区長・副区長、その後方に総代長を筆頭に総代ら8名（各8地区から1名）、合計10名が2列に並び、後方にオチゴサン4名が並ぶ。祭典は①修祓、②祭主一拝、③開扉、④献饌、⑤祭主祝詞奏上、⑥稚児の舞（浦安の舞）奉納、⑦祭主玉串を奉り拝礼・祭員拝礼、⑧区長玉串を奉り拝礼、⑨撤饌、⑩閉扉、⑪祭主一拝と進み、このあと直会の儀として区長・総代たちに清酒と鏡餅などが灑られ、祭主の挨拶があつて終了となる。その後、ジンデングミによって拝殿隣の神輿庫から神輿を出して準備され、12時30分からのミタマウツシでは、神輿3基を拝殿の中に入れて、周囲の幕を下ろし、中の電気も消して暗くした状態で神輿の中にみたまが移される。それが済むと、13時頃より、神輿の渡御が出發する。なお、神輿の担ぎ手は東西組を形成する各8地区から3名ずつと、灘・サザエバヤ地区から2名、中尾・川之元地区から2名の合計28名で、うち1名が天狗面を掛けた榊を持つ猿田彦の役を担う。

海沿いの広場では、そのころからネリと呼ばれる牛鬼と四ツ太鼓の争いが繰り広げられる（四ツ太鼓はこの時までにはオウボと呼ぶ特別に長い担き棒に付け替えておく）。「オーラーヤッセ」のかけ声で牛鬼・四ツ太鼓双方が互いに前進後退を繰り返して氣勢を上げたあと、まずは牛鬼が頭部を外し胴体だけの状態にして、ヤグラの足場を駆使して、尻の方を上にして胴体を立ち上げていく。その際に長短さまざまな長さのサシマタという杉材2本を紐でつないだ道具で支えながら「せーの！」のかけ声で力を合わせてだんだんせり上げていく。バランスや向きを調整ながら徐々に牛鬼の胴体が直立してくると、今度は四ツ太鼓がオウボの先端を上にして徐々に機体を立ち上げていく。両者が互いにもたれてぎりぎりのバランスで組み合ったら、牛鬼側が胴体の下部に付けた紐を大勢で一気に曳く。この時、四ツ太鼓と牛鬼どちらが上に重なって倒れるかで勝敗を決める。このネリで東組が勝てば大漁、西

組が勝てば五穀豊穡だと伝えられている。勝敗が決まると勝った方がまた「オーラーヤッセ」のかけ声で氣勢を上げる。

こうした勝負を2回（令和5年は1回）続けたところで、神社から出発した渡御の一行が、石段を下りて提灯を掲げた門をくぐって昔の道にそって海沿いの広場に到着する。牛鬼と四ツ太鼓の勝負はいったん中断して神輿3基が並んで据えられて、神輿の正面で稚児の舞・相撲甚句・五ツ鹿・唐獅子などの芸能が奉納される。

稚児の舞（浦安の舞）は、小学5年生の三崎地区の女子4名で舞うが、人手不足もあって現在は4～6年生女子で舞っている。かつては8名で8地区から一人ずつ出していたという。8月お盆過ぎ頃から神社側の指導で少しずつ練習を重ねて、宵祭り・本祭りの神社と広場で、白衣・緋袴・千早を着て、頭に花簪と下げ髪を付け、白足袋を履いた少女たちが、桧扇・垂絹の付いた鈴鈴などを持って舞う。

相撲甚句は小学生で現在は男女とも参加している。袴姿の行司役の子1名が軍配を手にも最初の口上と所作を見せると、その隣に立つ力士姿の子が1～15番までである甚句を歌う。その正面に力士姿の子5人がかけ声など言いながら輪になったり向き合ったり陣形を変えながら踊る。力士役は豆絞りの手拭いで鉢巻を締め（結び目は左）、白いシャツとズボンの上から化粧まわしと兵児帯、太鼓や兜などの絵柄が段々に入った子どもの着物を前を合わさず着流し姿といういで立ちで、このうち化粧まわしは地区で昔から使われているものがあり、それぞれ赤地に金刺繍で「猪名川」「音ノ松」「八陣」「梅ヶ谷」「黒岩」「黒雲」などの四股名が付いている。

五ツ鹿は中学生5名（令和5年時は大人）で踊るもので、うち4名は角の付いた雄鹿、1名は芒などを頂いた雌鹿役で、演じる当事者間では通常「一番」から「五番」（雌鹿は三番でやや背の低い者が演じる）と呼んでいる。演者の頭上に鹿の頭を固定し、白衣に黒い帯を締め、縮太鼓の皮面を左右に向けて腹前に括り付け、横縞模様の裁ち着け袴を穿き、足袋（雄鹿は黒・雌鹿は白）に草鞋履き姿となる。歌は1番～11番までであり、鹿役の演者が腹前の太鼓を打ちながら歌う。3～5番・8～10番辺りで一番と五番の鹿が向き合って踊ったり（これを飛ぶと形容する）、輪になったり一列に並んだりして踊る。

唐獅子は太鼓芸と獅子舞が組み合わさった芸能。太鼓打ちの子どもは小学生3人で、赤い鉢巻（結び目は左）で顔に白く化粧して、柄の着物に黒い帯を締めて襷掛け、水色の手甲に巴紋の化粧まわしを着け、足は白足袋という出で立ち。中央正面に皮面前後方向で太鼓が台に置かれ、そこに正面向きで両手に太く短いバチを持った子が一人立って踊りながら太鼓を打つ。残り2人の子どもはその左右で後方向きになって椅子に座り、コダイコと呼ぶ小さな台に乗った小さい太鼓

を両手に持った細く長いバチで打つ。獅子頭に胴体の布が付いたものを青年団の舞手2人が縦列に並んで被って一頭の獅子に扮し、太鼓に合わせて舞いながら時折り正面の子どもにも絡む。唐獅子には一番と二番の舞があって、宵祭りや本祭りの広場などでは、正面（一番）→後方（二番）→右方向（一番）→左方向（二番）の順に同じ場所で四方に順番に向きを変えながら舞った。（家々を巡って舞う時は二番を一回だけ舞う）

芸能の奉納が済むと、再び神輿の一行は出御して御旅所へ向かい、広場では四ツ太鼓と牛鬼のネリが再び繰り返されられる。神輿の一行は御旅所に入ると、御旅所の建物に3基の神輿を据えて御旅所祭をおこなう。御旅所祭は神輿向かって左側に神職、右側に総代らが並び、①修祓、②祭主一拝、③献饌、④奉幣の儀、⑤祝詞奏上、⑥玉串奉奠（祭主・祭員・区長・総代長・猿田彦・神輿代表）、⑦撤饌、⑧祭主一拝で終了する。この時の供物も一部が熟饌で、神輿1基につき7点あり、伊勢海老・銀瓶2本・鏡餅・果物（林檎・柿・バナナ・蜜柑）・乾物（干瓢・昆布・椎茸・高野豆腐）・野菜（大根・里芋・鞆隠元・ツイモ・牛蒡・茄子・人参）（以上、銀瓶以外は白木の三方に載る。調理せず素材そのまま）とともに、白木の箸・オジンク・甘酒・あわび2つが朱塗りの脚付き膳に載ったものが出る。

御旅所祭を終えると神輿はまた隊列を整えて還御となるが、まだネリで活況を呈している牛鬼・四ツ太鼓の広場も通りながら神社へ帰り、神輿を拝殿に戻して幕を下ろし電気を消してミタマウツシして祭りは終了。

神社・東西の青年団・ジンドングミそれぞれに片付けをして終了。牛鬼もばらして来年使う竹は確保して解体する。後日、集会所で東西そろって慰労会をする。

6. 参考文献

伊方町町見郷土館 2020 『佐田岬民俗ノート1』

7. 調査日

令和5年10月8・9日ほか

（高嶋 賢二）



写真1 牛鬼作り

第3章 詳細調査報告

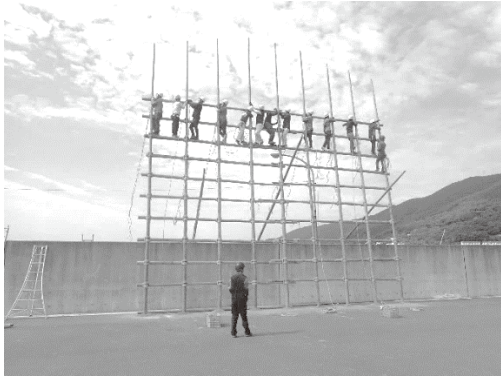


写真2 ヤグラの組み立て



写真6 稚児舞（浦安の舞）



写真3 四ツ太鼓の組み立て



写真7 相撲甚句



写真4 宵祭りでの唐獅子奉納



写真8 五ツ鹿



写真5 牛鬼と四ツ太鼓のネリ



写真9 御旅所祭の供物（オジンク・甘酒・アワビ）

37. われいたいさい 和霊大祭

別称：うわじま牛鬼まつり

伝承地：宇和島市和霊町

実施時期：7月22～24日

指定：無

テーマ：22・35

1. 地区の概要

宇和島市は人口6万9096人（令和5年6月30日現在）、愛媛県南予地方の中心都市である。宇和島藩伊達家十萬石の城下町であるという歴史を持つ。現在は海面養殖業と柑橘栽培が盛んな地域である。市街地にある和霊神社は、漁業、農業の神であり、この地方の人々の信仰を集めている。

和霊大祭は、江戸時代から続いており、昭和期には期間中20万人の人出があった時代もあった。人々ももっとも楽しみしている祭りであり、市をあげての夏祭りとなっている。令和5年（2023）は、和霊大祭と観光イベントである「うわじま牛鬼まつり」が同時開催された。

2. 実施場所

和霊神社、神社下須賀川、和霊公園を中心とし、商店街も含む。宇和島湾を横切る神輿の海上渡御、須賀川で行われる「走り込み」が有名である。

3. 伝承組織

和霊大祭の三基の神輿は、敬神和霊神幸会 敬神和霊山頼会 敬神和霊青年会の三団体が運行を担う。それぞれ60～70人ほどの輿丁（よちよう神輿を担ぐ人）で構成される。祭り全体は総代会が神社と共に運営する。

「うわじま牛鬼まつり」は、実行委員会（宇和島商工会議所内）が担当する。

4. 由来伝承

非業の死をとげた宇和島藩家老山家清兵衛を祀る神社で、生前、領民のために善政を行ったとして、宇和島地方の守護神としてあつく信仰されている。藩主伊達家も功臣として扱っている。特に漁業の神として広く知られ、かつては祭りの日の内港は大漁旗を立てた漁船で埋め尽くされた。また、昔は、和霊様の夜は蚊帳をつらないという風習があり、夜を徹して楽しむ日であった。したがって、神輿の還御も午後9時半頃となる。

江戸時代から旧暦の6月23、24日に行われてきたが、明治43年に、新暦7月23、24日と定められた。戦前、

町方からは7、8ほどの山車、鹿の子、お槍等が出され、しも下村（現和霊町）の三島神社からは、牛鬼、四ツ太鼓が出されていた。昭和20年の戦災により、山車が焼失し、町方からの練り物は少なくなった。和霊大祭は人出が多く、商店街のかきいれ時であったから、集客のための見世物など興行的イベントが伝統的にあった。また、闘牛大会は、長らく親しまれてきた。

昭和42年（1967）、「宇和島まつり」としてイベント部分を拡大し、和霊大祭と同時開催となった。牛鬼パレードもこの時に始まった。昭和45年（1970）「宇和島音頭」ができ、23日の和霊大祭の宵宮の時に、商店街で踊られることになった。平成元年（1989）「うわじまガイヤカーニバル」が始まった。

町方から出る山車は無くなったが、その代わりに市内の企業から、走り込みの山車が出るようになった。

令和4年（2022）より、闘牛大会の7月場所が廃止となり、「うわじま牛鬼まつり」として実施されていた走り込みの山車、24日の花火大会なども取りやめとなっている。

5. 実施内容

7月22日



写真1 7月22日宵宮の賑わい（2023）

御神竹3本が輿丁によって準備され、境内、須賀川に立てられる。御旅所分は、国道なので立てておけず、御旅所祭の時に人が支えて立てる。長さは須賀川が一番高く15mを超える。

第3章 詳細調査報告

午後1時より、うわじまガイヤカーニバルが開催された。まず子どもの部から始まり、午後5時頃より午後8時頃までは大人の部である。場所は、きさいやロードから、牛鬼ストリートである。ガイヤオンザロードの曲に合わせて、約500mを踊りながら歩く。入賞グループや入賞者が選出される。令和5年(2023)は、41団体、約1,600人が出場した。

7月23日

「和霊大祭」として、神社にて10時より例祭が行われる。参加者は、伊達家当主を筆頭に、市長を始め市内の政財界の主立った人々である。歴史的には漁事繁栄の祈祷が主であったことから、北は西予市明浜から南は津島町下灘までの愛媛県漁業協同組合各支所代表が参列する。例祭では、伊予神楽(国指定重要無形民俗文化財)の「式三番」が奉納された。近年まで、浦安の舞が奉納されていたが、女子高校生を集めることが難しくなり中止している。

「うわじま牛鬼まつり」として、午前10時45分より、ブラスバンド・トランペット鼓隊のパレードが6団体の参加で行われた。

和霊神社では、正午より一般の祈祷を受け付ける。現在も漁業者が大漁旗を持って祈祷を受けることがある。午後7時より宵宮祭、近隣の神主も参加する。和霊公園には露店が50以上並び、一般の参拝者が多く訪れる。

23日午後は「うわじま牛鬼まつり」として、子ども牛鬼パレードが行われ、8団体、計13体が参加した。

午後6時より、宇和島おどり大会がきさいやロード(商店街)で午後5時から約1時間程度開催された。参加団体は15団体であった。午後8時半より海上花火大会が行われた。この海上花火大会が始まったことにより、宵宮で神社に参拝する人が減っている。「うわじま牛鬼まつり」の各イベントは、慣例にこだわらず、年々、少しずつ実施形態が異なっている。

7月24日

午後1時、和霊神社より、稚児行列・子ども神輿が一行となって出御し、神輿の先触れとして巡行した。

稚児行列は、先頭が旗で、以下猿田彦、錫杖、太鼓、稚児の男女(10名)と続く。旗、傘、太鼓持ちは地元の高校生が受け継いで行っている。また、神社総代たちも列に加わり、総勢100余名の行列であった。令和5年(2023)には、初めて津島町の牛鬼(2体)が加わった。



写真2 稚児行列・子ども神輿 (2023)

巡行経路は神輿とほぼ重なっている。和霊大祭は、江戸期より神社のある下村と隣接する城下の町人町が担当するものであったので、現在もその地区を巡行する。下村の次は、町方の本町、裡町、新町、恵美須町を巡る。牛鬼ストリート付近で、親牛鬼パレードと交錯し、行列が通過するまで、牛鬼は待機した。午後3時頃に神社に還った。



写真3 牛鬼パレード (2023)

一方、「うわじま牛鬼まつり」のイベントとして、午後1時より、親牛鬼パレードが行われた。参加団体は14団体で15体の牛鬼がそろった。牛鬼は、四ツ太鼓と共に、神輿の先触れとして練り歩いたものであるが、現在はショーのようなイベントになっている。

牛鬼の頭は地元で作られていたので地域性が顕著であったが、現在は職人が作り、統一的なものとなっている。胴体は、赤布かシュロと決まっていたが、ここ20年で様々な色が登場するようになった。また、牛鬼の上に人が乗ることは無かったが、近年乗る人が見られるようになった。

パレードは出発すると、南予文化会館正面すぐ左のアーケード下で、2体または3体の牛鬼が一体となってぐるぐる周回して練りを行う。牛鬼は、商店街を上へとさかのぼり、御旅所前を通り、いったん南予文化会館に戻り、子ども神輿の通過後、商店街を下り、商

店街入り口へと出た。ここでも3体が勢い良く回る練りを行い、その後和霊神社へ向かった。御幸橋を渡り、神門に頭を突っ込み、悪霊を祓う。これは全ての牛鬼が行うわけでは無い。近年は、祭礼とイベントの区別から神社境内まで上がることは無くなったが、昔は、小さめの牛鬼は境内まで上がっていた。

牛鬼には、ブーヤレ（竹ぼらとも言う）と呼ばれる竹笛の囃子がつく。これらを担当するのは女性や子どもである。昔は男児がついていた。

「和霊大祭」として午後5時、神輿3基が神社を出御する。令和5年（2023）は、先祓いとして津島の牛鬼（2体）が初めて参加した。午後6時半過ぎ、商店街の一番上手のところから、丸之内和霊神社の御旅所まで、神輿は走り込みを行い、御幣奪いが行われた。午後7時より、御旅所神事が行われ、その後、神輿はきさいやロードを上から下まで練り歩いた。以前は新内港で松明隊が供奉し神輿を照らしていた。それから、新内港の盛運汽船乗り場付近で、御座船に乗船した。船は神輿が乗る神輿船3隻、先導船、宮司船、神職船である。宮司船、神職船は少し離れた位置から出るが、これは単に船が一同に並ぶスペースが無い理由からである。

午後9時頃、築地の岸壁に上陸したが、船が着けやすい場所を選んでいるだけで決まりはない。この神輿の海上渡御は須賀川つけかえにより昭和8年（1933）から始まったもので、それ以前は無かったものである。それまでは、旧須賀川沿いの道をそのままさかのぼり、神社下で須賀川に入り、境内まで走り込みを行っていた。



写真4 海上渡御（2023）

走り込みは、本来、神輿が駆けて神威を高める行為であるが、宇和島市民は、24日の夜、須賀川で行われる行事を走り込みとらえている。例年であれば、午後8時頃から、各団体が工夫をこらした山車を担ぎ、神輿が到着する前、須賀川に入り、御幸橋下まで練り歩くが令和5年（2023）は中止された。山車が到着す

る前には、仕掛け花火や牛鬼太鼓の演奏も行われ会場が盛り上がる。これらも省略された。戦後しばらくまで、竹箒をかついだ走り込み隊が市内をかけて最後に須賀川に入って、ほうきに火をつけて神輿の道筋を照らしたものである。

午後9時すぎに神輿が須賀橋に到着、そこから須賀川に入った。例年、神輿に付きそう松明隊は、牛鬼まつり実行委員会が募集した市職員を中心とするボランティアであったがこれも省略された。かがり火は和霊神社が用意するものである。

神輿3基は、川中に立てられた御神竹の回りを威勢良く周回し、頃合いを見て、若者が竹を登り、先端に付けられた御幣を奪う。ここが現在ではメインの見せ場となっている。令和5年（2023）は、2人目の青年が登って捕ることに成功した。これは昭和40年（1965）前後に定着した行事である。古くは笹奪いと呼ばれ、神輿が川から神社に走り込んだ後に、若者達が縁起物の笹を奪いあっていたものが、いつしか神輿が川の中にいる間に御神竹に登るようになったものである。『和霊参宮案内記』（明治45年）によると、神輿が御神竹の周りを3度周回して、境内へ駆け上がるのを走り込みとしている。

この時間帯は例年、丸山公園から次々と花火が打ち上げられて情緒を添える。この花火は、以前は走り込みが終わって観衆が引き上げる道々でも見られるようにしていたが、これも省略された。

神輿は境内に走り込むと、境内に立てられた御神竹の回りでも同様に周回し、竹を登って御幣が奪われる。こうして神輿は還御して和霊大祭は終わる。



写真5 走り込み（2023）

6. 参考文献

- 和霊神社社務所 1912 『和霊参宮案内記』
愛媛県史編さん委員会 1986 「第8節 宇和島藩」
『愛媛県史 近世上』

7. 調査日

令和5年7月22日～24日

（宮本 春樹・西澤 昌平）

ひらじょうはちまんじんじゃたいさい
38. 平城八幡神社大祭

別称：かつては「お水もらい神事」との名称もあった 伝承地：愛南町御荘平城

実施時期：11月3日 指定：無 テーマ：2・3・22

1. 地区の概要

平城は御荘湾の東北方の海岸段丘に立地する。観自在寺の門前町として発展した村。

2. 実施場所

平城八幡神社、平城地区

3. 伝承組織

各地区のことをジョウカイと呼んでおり、八幡神社の祭礼は平城地区の12ジョウカイ（常会）と呼ばれる12の地区の中で、毎年輪番で巡ってくるオオトウバン（大当番）が当たった年にさまざまな役割を担うことになる。順番は、1. 八幡野、2. 貝塚、3. 長崎、4. 馬瀬、5. 節崎、6. 上永の岡、7. 下永の岡、8. 馬場、9. 上町、10. 寺新町、11. 本町、12. 栄町。

4. 由来伝承

不明

5. 実施内容

祭りの1か月前からマツリダイコ（祭り太鼓）の練習が始まる。マツリダイコは台車に大きい鉦留め1、縮太鼓2を載せ、テビョウシ（小さいシンバルのような楽器）1、横笛2の構成で演奏されるもので、祭礼当日、神社前から神幸・御旅所・還御の間ほぼ終始断続的に囃される囃子。

祭礼前日に準備が進められ、拝殿向かって左側の境内の一面に枝葉の付いたままの青竹を一本立てて3方から御幣の付いた注連縄を張り渡す。これをオハケと呼んでいる。夜は宵宮祭がおこなわれる。



写真1 オハケ

本祭当日、朝8時より本殿祭がおこなわれる。まず境内の拝殿向かって右隣の一面に注連縄で方形に囲んだハライドと呼ばれる場所で、参列する関係者が並んで神事を済ませた後、並んで拝殿の中へ入る。社殿の中で神輿を3基並べており、その前に関係者が並んで本殿祭が始まる。参加するのは宮司

1名、巫女3名、袴姿の総代（12名。12ジョウカイから各1名ずつ）、オオトウバンの地区から白丁姿の人6名、天狗役1名、ほか法被姿の世話役2名が参加する。次第は①修祓、②献饌（袴姿の総代3名がリレーで運ぶ）、③祝詞奏上、④玉串奉奠（12ジョウカイ・オオトウバン）、⑤撤饌（献饌と同じ3名が出る）、⑥みたまうつし、⑦祭主一拝。ミタマウツシの際は拝殿の電気を消して、3基の神輿それぞれにミタマを納めていく。なお、この時に出来る供物は8つの三方に載せて、それぞれお神酒（瓶子2に塩と水）、鏡餅、米、魚（鯛）、野菜、果物、お菓子と、竹の型に入れて作る筒状に形作られた御飯が供えられる。



写真2 井戸水で炊いた御飯



写真3 豊栄の舞

筒状の御飯はかつて「お水もらい神事」と呼ばれる神事がおこなわれていた名残り、『御荘町誌』によれば、「翌二日には、「お水もらい」（ごはんたき）という特殊な神事が行われている。この神事には、大字平城の一一組の氏子が輪番制で奉仕者を選ぶのであるが、当番に当たった組は両親そろって健康な戸主二人を選んでこの神事にあたらせている。行司は祭礼のお供えを調理献上するために、神社のお山を囲んでいる三ヶ所の井戸水（八幡野二ヶ所・貝塚一ヶ所）を神

職のおはらいをうけて早朝に手おけへ汲み取り、境内に臨時に築いたくどで白米をたき、円筒型に押し抜いて、社殿とお旅所の神前に供えるのである」とあり、かつては氏子地域の3か所の井戸から取った水でご飯を炊いたが、現在は境内にある井戸から取った水で炊いているという。また、調査時の令和4・5年時点では実施されていなかったが、かつては神前に生きた川魚（フナなど）を供えて後に吉田の沼に魚を放つ神事があった（『御荘町誌』）。

本殿祭が終わると、参列者はそのまま外に出て、拝殿右隣の高良神社前に並び、再び神事をおこなう。次第は本殿祭とほぼ同じである。

祭事終了後、拝殿前で巫女による豊栄の舞がおこなわれる。緋袴・千早姿の巫女2名が、それぞれ紅白布を付けた榊の枝を一本片手に持って、歌（録音音声）にあわせて舞う。

拝殿内では、先ほどみたまの移された神輿に担き棒を付れたり、晒布を巻くなどして渡御の準備をする。そのあと関係者が拝殿前に並んで記念写真を撮る。境内では、マツリダイコの演奏が始まる。次々と囃子手が交代しながら延々と演奏され賑わってくる中、各ジョウカイから出される牛鬼等のネリが続々と集結する。社殿前に着くと代表者が御幣で簡単なお祓いを受け（四つ太鼓は子どもの乗り子4人を肩車して神前に並び、まとめてお祓いを受けた）、榊の枝を受け取って各ネリに取り付けた後、拝殿正面の広場を取り囲むようにその周辺の所定の場所にひかえ、各地のネリがある程度そろると随時出発し、神輿なども出発する。なお、終始天狗役（白衣、天狗面）がはしゃいで周囲を盛り上げる。また行列の先頭は水の入った手桶と榊の枝と柄杓の入ったものを持って進む法被姿の人や、侍烏帽子に紺の素襖姿の人なども加わる。

各地のネリは、

八幡野：鹿・牛鬼（大・小）

貝塚：鹿・牛鬼（大・胴体はシュロ）

長崎：四ツ太鼓・御車（ウラシマ）・天狗（後述）

馬瀬：四ツ太鼓

節崎：カラシシ

上永の岡：牛鬼小

下永の岡：牛鬼大

馬場・上町・寺新町・本町・栄町の5ジョウカイは四ツ太鼓・子ども神輿・鹿があり、おねり当番といって輪番でネリをおこなう。

なお、令和5年調査時は八幡野の牛鬼（大・小）、長崎の四ツ太鼓・御車（2層の山車で、上段に浦島太郎の人形を置く）・天狗（巨大な天狗の頭部を模した山車で、目や口が動く仕掛けになっている。小学生のねりものとして約30年前に作られて加わっている）、下永の岡の牛鬼が出ていた。なお全般に牛鬼もお車も天狗も車輪を付けて曳く形式になってお

り、車輪を軸にその場で回転したり勢いよく突っ込んだりといった一連のパフォーマンスがネリということになる。

渡御の一行はまず神社西側を旧道に沿って八幡野・貝塚方面へ進んだのち国道に沿って東に戻り、再び神社前を通過して本町・上町辺りまで進んで僧都川の橋を南に渡って東に折り返した河川敷が御旅所となる。道中でお参りの方に御幣の付いた榊などを配る場合もあった。

御旅所ではやや広めの3間×3間で方形に柱を建て桁や梁を渡した簡易な建物を建て、周囲に幕を回し、正面入り口両端に榊と「八幡神社御宝前」の幟を立てたもので、マツリダイコの響く中で牛鬼などの各ねりは御旅所に着くと神前でお祓いを受け、少し練った後、その周囲を取計周りに3周回った。神輿はその建物内に納めて、そこで総代らが参列し、供物を並べて御旅所祭がおこなわれる。ここでおよそ12時過ぎ暫時休憩となり、各地区は休憩スペースを決めて昼食等をとった。13時過ぎより再開し、まずは豊栄の舞、続いて豊栄の舞を舞った巫女や袴の総代らが、お旅所の建物の四隅に梯子で登って、そこから大量の餅撒きがおこなわれ、袋を持った老若男女が大勢集いお餅を拾いあつて歓声があがる。

餅撒き終了後は再び移動の準備をして還御となる。国道に戻って栄町を通って神社まで帰ってくる。境内に入るとまず八幡野の牛鬼は勢いよく走り込んで柄境内のオハケの竹を倒す。続いて各ネリが神前でしっかりと練り、神輿も拝殿に納められて神事をおこないみたまを戻して、祭礼は終了となる。総代らの慰労がおこなわれ、主だった片付けは翌日おこなわれる。

なお、かつては旧8月15日に実施されていた。近隣の神社もそれぞれ神職のつごうで別々の日で祭日があった。『御荘町誌』（昭和45年）によれば、「明治四四年に南宇和郡祭日統一の結果、新暦で一月三日に行なう」（455頁）とあるが、別の箇所には「祭りの日には、その部落の家庭ではごちそうを準備して、他町村や他部落の親戚や親しい人を招待した。それらの出費の節約をはかるため、大正三年（一九一四）当時の郡長横山襄が、郡内各町村に呼びかけて統一し、現在の一月三日に行われるようになったのである。従って町内（旧御荘町）の各部落は、八幡神社の大祭にねりを繰り出すことになった」（551頁）ともある。

6. 参考文献

御荘町誌編集委員会 1970 『御荘町誌』

7. 調査日

令和5年11月3日ほか

（高嶋 賢二）



写真4 八幡野の牛鬼(小)



写真8 御旅所



写真5 長崎の四ツ太鼓



写真9 もちまき



写真6 長崎の天狗



写真10 オハケを倒す八幡野の牛鬼



写真7 ウラシマ(御車)

39. 保内の秋祭り

別称：三島神社神幸祭

伝承地：八幡浜市保内町宮内及び川之石地区

実施時期：10月第4土曜日とその前日

指定：無

テーマ：2・9・22

1. 地区の概要

八幡浜市保内町宮内地区及び川之石地区は、旧保内町の中心部にあり、江戸時代後期から近代以降、宮内地区は木蠟や養蚕などの農業、川之石地区は海運や商工業により発展した。昭和30年(1955)、磯津村、喜須来村とともに1町3村で合併し保内町となり、平成17年(2005)八幡浜市と合併し八幡浜市保内町の一部となっている。

2. 実施場所

三島神社(八幡浜市保内町宮内)から御旅所(同保内町川之石雨井)の間を巡行。神社境内と御旅所で神事及び練りや舞の奉納を行う。三島神社は、宝亀5年(774)大山祇神社(今治市大三島)の御分霊を勧請、1,250年余りの歴史を持ち、保内郷総鎮守として広く信仰を集めてきた。現在の氏子の範囲は、保内町宮内全域と川之石のうち楠町を除く地域である。

3. 伝承組織

三島神社総代会及び各地区保存会により実施。宮内及び川之石地区の各集落に、伝承されている山車や舞があり、その運営のための組織のあり方は地区で異なる。神幸祭全体の連絡調整のために「保内秋祭り保存会」が組織されており、実質的な運行に関しては「運行委員会」が担っている。

川之石地区：「四ツ太鼓」…雨井、「御車」…内之浦、「牛鬼」…赤網代、「御船」…本町、「唐獅子」…和田町、「御車」…琴平

宮内地区：「御車」…清水町・駄場、「五ツ鹿」…大竹

(「出し物」…集落名、宮内順に記載)

4. 由来伝承

地域の安寧を願い、五穀豊穡に感謝して行われる祭り。神幸祭の起源は明らかではないが、江戸時代中期以降には氏子による練りや舞が奉納されており、江戸時代後期から明治時代にかけて、宮内、川之石地区の発展に伴い、練りに四ツ太鼓や御車、御船などが加わり、豪華絢爛な祭りへと発展したと考えられる。祭礼

日はかつて10月23日であったが、参加人員を確保し、祭りを存続するため、平成19年(2007)から10月第4土曜日に改めた。

5. 実施内容

神幸祭前日の宵祭り、朝8時から雨井地区で御旅所の設営が始まる。設営は地区役員が行い、海を臨む広場に柱や梁を組み立て、三島神社の紋の入った白い幕で囲み、小屋を建てる。笹飾り、幟や提灯を立てる。各地区では御車(オクルマ)や御船(オフネ)と呼ばれる山車の組み立て・整備を行い、午後からそれぞれの地区内での巡行が行われる。宵祭りでは三島神社へは行かず、当日の巡行の道筋から外れている家々や馴染みの事業所を巡り、夕方、練り宿としている集会所などに戻る。赤網代地区では、19時ごろから深夜にかけて青年から壮年の5~6人が組になり地区内の家々を回ってホレヤッサと呼ばれる祭り歌を謡う。馴染みの家では座敷に上がり、酒肴の振る舞いを受ける。

当日の朝8時、雨井の御旅所を四ツ太鼓が出発、1地区の練りが通り過ぎるごとに次の地区の練りが列に加わり、道中要所で山車の曳き回しやかき上げ、舞いを披露しながら三島神社まで約3時間かけて練り歩く。

先頭は、川之石・雨井地区の四ツ太鼓で、嘉永元年(1848)に大坂方面から導入されたと伝わる。太鼓台の上に紅白の布団を4段重ね、中央に太鼓を1つ置き、周りに座る4人の乗り子が歌いながら叩く。乗り子は神が宿る神聖な存在であり、祭りが終わるまで、地面に足をつけないよう、移動は大人に抱えられて行く。かつて乗り子は10歳前後の地区内の男子のみであったが、近年は中学生や地区外の女子も含む。四ツ太鼓本体は、前後に2本ずつ突き出した棒に7人ずつ、成人28人以上で担ぐ。現在は、着脱可能な車輪を活用し、道中の大半は少人数でも曳いて移動できるように工夫している。

2番目の内之浦地区の御車は、人形屋台の一種で、山車の上段に日本武尊(ヤマトタケルノミコト)の人形を載せる。大正時代には巡行が行われていたとされ、山車の下段には、金糸で龍虎の立体刺繍が施された飾り幕を、左右と後方に回し懸ける。「チョーサジャ」

の掛け声とともに綱を引いて動かし、前方の舵棒と後方の綱で方向転換する。ホレヤッサのほか、場面に応じた数種類の祭り歌を謡いながら巡行する。

3番目は赤網代地区の牛鬼。南予地方特有の練り物で、大人が担ぐ棕櫚のものと、中学生を中心に担ぐ赤布のもの2体を運行する。大人の牛鬼は、大正14年(1925)の写像があり、それ以前から行われていたと思われる。棕櫚の牛鬼は重量600kgと言われるが、青〜壮年40人程度で道中すべてを担いで移動する。出発時は笹担ぎの子ども、宮入や御旅所の前後は大人が上に乗る。道中、先導する青年が「松前殿様」と呼ばれる祭り歌を謡い、担ぎ手が合いの手を入れ、同行する者が太鼓や拍子木を打つ。三島神社境内では、本体を高くかき上げたり、回転させたり、拝殿の軒先まで駆け込むなど激しい動きで邪を払う。子どもの牛鬼は宮入後、雨井の御旅所までの道中で宿に帰る。



写真1 三島神社への宮入り

4番目は本町地区の御船。江戸期には奉納されていたと言われ、船型の屋台を鯉の滝登りなどの刺繍幕で飾り、三島神社の神紋の幕を懸ける。中に積んだ太鼓を叩き、「チョウサ チョウサ」の掛け声をかけながら綱を曳いて進む。成年層が巡行していたが、人員の減少と次世代への伝承のため、小中学生からの参加が増えている。三島神社と御旅所のほか、道中の川之石本町の庄屋敷跡で神事と大船回し(だいせんまわし)を行う。次々と青年が入れ替わりながら、舵棒を持って御船を高速で回転させる様子は圧巻である。

5番目は和田町地区の唐獅子で、昭和初期に八幡浜市日土町梶谷岡から伝習した。青年2人による獅子に、1人の子どもの大太鼓打ちが対峙し、その間2人の小太鼓打ちがリズムを刻むように叩き続ける。三島神社と御旅所では、2頭の獅子と2人の打ち手による舞や、獅子はおらず、踊り子だけが3人で舞う一幕もある。

6番目は琴平地区の御車で、小野道風の人形を載せる。人形を保管している木箱に安政3年(1856)の銘がある。上段に蛙や柳の飾り物を付け、下段に龍や獅

子の刺繍幕を左右に懸ける。正面には獅子の彫り物、後方には上段から下段まで1枚の見返り幕を垂らす。道中ホレヤッサが付き添い家々を回りながら祭り歌を謡い、大人と子どもが「チョーサヨ」の掛け声をかけあって車を曳く。宮入と御旅所では「前じゃ」「後じゃ」の掛け声にあわせて前後に勢いよく往復して走る。

7番目は宮内・駄場地区と清水町地区による御車で、菅原道真人形を載せる。飾り付けに使う黒松は宵祭りの日に切り出すという。前立てに龍の彫り物、金糸で獅子と牡丹を刺繍した幕を下段の三方に垂らす。琴平地区と同様、ホレヤッサとともに小中学生から大人まで一体となって巡行する。

8番目は大竹地区の五ツ鹿(イツシカ)で、青年5名が、1頭の雌鹿と4頭の雄鹿の頭をつけ、胸に付けた小太鼓を叩きながら歌い、踊る。江戸時代に宇和島藩主伊達家により東北地方から伝えられ、南予各地に広まったという郷土芸能で、当地の五ツ鹿は昭和初期に伊方町大浜から伝習したものである。

11時、宮入り行事。境内で舞や謡いの奉納、曳き回しなどを行う。13時ごろ神輿へ御霊うつし。拝殿前で浦安の舞が奉納されたのち、14時ごろ神輿3基を先頭に御旅所へ出発、行列には宮内・両家地区が平家の紋の入った赤旗を持って加わる。練りのない地区は持ち回りで神輿の担ぎ手(車で曳く)となる。宮入と逆の順に、宮内・大竹地区の五ツ鹿から出発し、各地区の練りが続く。16時ごろ御旅所神事。御旅所でも同様に各地区が練りの奉納を行い、18時30分ごろ最後尾の四ツ太鼓が宿へ帰っていくと、神輿を先頭に、各地区の練りものは地区の宿へ戻り、最後に神社へ戻るのは神輿の一団のみとなる。神輿の御霊うつしを終え19時40分祭礼が終了する。

6. 参考文献

米澤利光 2005 『雨井の船の歩み』

八幡浜市誌編纂会 2018 「第2巻 自然環境編 民俗・文化編 産業経済編」『八幡浜市誌』八幡浜市

7. 調査日

令和4年(2022)10月21日、22日

(宇都宮 菜乃)

40. 魚成の実盛り

別称：実盛流し

伝承地：西予市城川町田穂・魚成・今田地区

実施時期：毎年6月最終日曜日

指定：西予市指定 テーマ：15・23

1. 地区の概要

伝承される3つの地区は、地理的には上流より田穂地区、魚成地区、今田地区となる。

田穂地区は、魚成川支流の田穂川沿いの河岸段丘上に集落と農地があり、周囲は山に囲まれている山間地域である。米や麦などのほか、江戸時代は炭や薪、明治以降は真綿、茶などを産してきた。

魚成地区は、田穂地区の東、魚成川（黒瀬川支流）沿いの河岸段丘上に集落と農地があり、周囲は山に囲まれている山間地域である。田穂地区と同様、米や麦などのほか、江戸時代は炭や薪、明治以降は真綿、茶などを産してきた。地区を流れる魚成川は集落を東流し、下流の今田地区で黒瀬川に合流する。

今田地区は、魚成地区の東、魚成川と黒瀬川が合流する辺りに集落と農地がある。やはり米や麦などのほか、江戸時代は炭や薪、明治以降は真綿、茶などを産してきた。

今田地区が江戸時代の村高が魚成村のうちであったうえ、明治22年（1889）に魚成村が成立すると田穂地区も含めて魚成村のなかに含まれたことから、ここでは全体を総称して「魚成」とし、その下のレベルを地区、さらに下のレベルを集落とした。田穂および魚成の2地区についてはそれぞれ3および5の集落からなり、各集落に区長と会計がいるほか、地区全体での総務区長もおり、それぞれ行事で一定の役割を果たしている。

2. 実施場所

田穂川沿いの田穂地区から、魚成川（田穂川が下流で中津川と合流すると魚成川となる）沿いの魚成地区（川向、中津川、蔭之地、町中、古市の5集落）を通して、黒瀬川に合流する今田地区までの地域で行われる。

3. 伝承組織

もともとは実盛りもそれに伴う楽念仏も、比較的年輩の男性たちで伝承してきた。

田穂・魚成・今田の3地区合同での実盛り保存会を平成11年（1999）6月25日結成している。メンバーは年配の男性たち計20名弱である。楽念仏を行う人が中心となるため、龍澤寺楽保存会とメンバーはほぼ重なっている。会員を増やすために定期的に募集したり声掛けをしたりしている。

ちなみに、龍澤寺楽保存会は、昭和44年（1969）8月7日に結成されており、これを契機に揃いの袴と法被、念仏笠を着用するようになった。

なお、四本旗や太鼓などを持つ人は、保存会のメンバーではなく、地区の当番制で決められており、1年以内に不幸であった家は参加できない。近年では女性が担当することもある。

4. 由来伝承

平安時代末期、武蔵国長井庄の平家方の武将、齋藤別当実盛が、源氏方の武将、木曾義仲を討つために出陣した際、加賀国篠原の合戦で敵将の1人であった信濃国の手塚太郎光盛と対峙することとなり、その際、刈り取った後の稲株に足をとられて不覚の最期を遂げた。その後、稲の害虫であるウンカが大発生して人々を困らせた。人々は、「これも運か（ウンカ）」と言って非業の死を遂げた実盛の無念が、怨霊となって害虫/ウンカに乗り移り（化身し）、稲を食い荒らすようになったと考え、実盛の怨霊を供養し、害虫を追い払うために行事を始めたといわれている。

一説に戦死した実盛が「すべてこれ運か（ウンカ）、死して稲作の守護神とならん」と誓ったことが始まりとの言い伝えもある。

なお、源平合戦の後、魚成へ逃れてきて土着した平通盛の子孫とされる平朝臣魚成豊後守通親が龍ヶ森城を居城にした頃に、この行事が始められたのではないかと、という古老もいる。

5. 実施内容（図1参照）

この行事は、田穂地区で実盛人形を製作し、地区内の寺で入魂した後、上流の水源を出発点として人々が担ぎながら川下に向かって人形を運んでいく。途中の茶堂で念仏供養を行いながら徐々に下っていく。田穂地区から魚成地区（川向、中津川、蔭之地、町中、古市の5集落）、さらには今田地区と順にリレー式に送り継がれていき、最後は黒瀬川の河原に安置し、人形が大水で流されてしまうことを期待する。

魚成（～昭和29年・魚成村）										
田穂地区		魚成地区						今田地区		
上・中・下		川向・中津川・蔭之地・町中・古市								
大池	沖の堂	ゴマジリ茶堂	サルバイ	川向の茶堂	ナルタ	元町	古市の茶堂	猿屋川	今田茶堂	杉の瀬
楽念仏	楽念仏	楽念仏※	楽念仏	楽念仏	楽念仏	楽念仏	楽念仏※	楽念仏	楽念仏	ウチアゲ※

田穂川 → 魚成川 → 黒瀬川

※モガエシあり

図1 実施内容

五穀豊穡や害虫退散、家内安全、無病息災などを祈願する行事で、毎年6月最終日曜日に行われている。ただ、かつては行事日を固定しておらず、地区全体の田植えの終わった頃を見計らって行うことになっていた。3地区の中では、田穂

第3章 詳細調査報告

地区が比較的早く田植えを終えるため、魚成地区と今田地区の状況を見ながら3地区で相談して行事日を決めていた。平成に入る頃に毎年6月最終日曜日に固定した。

行事の準備（田穂地区）

毎年田植えが終わると徐々に行事の準備に入る。具体的には、龍澤寺楽念仏（以下、単に楽念仏という）の練習と実盛人形の製作が行われる。

楽念仏は、念仏衆が、鉦と太鼓を叩き、その音に合わせてゆっくりと体でリズムをとりながら唱えるもので、念仏踊りともいわれる。楽念仏の練習は、6月に入ると月・水・金曜日の週3回（当日まで計10回ほど）、田穂、魚成、今田の3地区合同で田穂の公民館で夜8時頃から2時間ほど行う（コロナ禍のときは2年ほど中止された）。

楽念仏の唱え事は、道行き、セツをひろう、庭念佛、二ツ鉦、くずし①、なもで一へい（前）、くずし②、なもで一へい（後）、くずし③、モガエシ（門返し）の10の構成からなる。中心となるのは庭念仏とされているが、移動中は道行きを繰り返す。また、茶堂などでの供養では通常は道行きからくずし③までの9構成を行って一庭（ヒトニワ）といい、特別な場のみで道行きからモガエシまでの10構成を行って一庭とする。一庭は10～15分程度である。モガエシは無の境地になるとされる特別な念仏とされ、かつては今田地区でのウチアゲの際だけに行われていた。

使用する太鼓は、直径14寸ほどの鉦止め1張である。鉦は、直径6寸ほどのもので、蕨手文様の木製の持ち手に吊り下げられている。鉦は6口あるが、田穂地区で使用するのは5口、魚成地区と今田地区で使用するのは6口である。鉦を叩くT字の撞木は、柄は竹、上部は柳で、幅約22cm、長さ約27cmのもので、予備も含めて多数用意されている。かつてはカシラ鉦といって、鉦が楽念仏全体の指揮を執る役目をしていたが、近年では太鼓が指揮を執るようになってきている。

戦前までは集落ごとに念仏組があり、実盛送りのほか、顕手院（曹洞宗・魚成地区）や近隣の龍澤寺（曹洞宗）の施食会など年に何度も楽念仏を行う機会もあったため、ほとんどの家で自家に鉦を所有していた。しかし、戦時中に供出の対象となったこともあって各家の鉦はほとんどなくなった。そのため、戦時中の昭和16年頃には実盛送りでの楽念仏を一時的に中断したといわれている。終戦後もしばらくは少ない鉦で細々とやっており、昭和40年代になってようやく大々的に復活した。復活に際しては田穂・魚成・今田全体で龍澤寺楽保存会を組織している。

実盛送りで使用する実盛人形は、田穂地区で作ることになっている。田植えが終わる頃になると、総務区長が作り手に依頼する。作り手も厳密に定められているわけではないが、毎年決まった作り手が多い。作り手は、折に触れて材料を確保しておき、依頼を受けると5月連休明け頃から作り始め、6月初旬には完成させる。現在判明しているだけでも、現在の作り手は9代目になる。

実盛人形は、まず顔から作り始める。顔は柔らかく細工しやすい桐の木を利用する。鼻や耳などを彫り、目や口を墨書

した面長の顔である。鼻の高さにより顔が大きくなったり小さくなったりするため、鼻を作るのが特に難しいという。かつては艶を出すために顔の表面にニスを塗ったこともある。髪はシュロの皮をつける。実盛は戦場で高齢であることを隠すため白髪を染めていたといわれることから、髪を染めた具合をシュロの皮で表現しているとされる。胴体も桐の木で、4枚の板を組み合わせて細長い箱状のものを作り、これに藁を巻き付けて表面に紙を貼る。背中には人形を持つ人が持ちやすいように支え棒を付ける。人形の手と足は指の部分まで針金を芯として入れ、それに藁を巻いてから表面に紙を貼る。右手には金銀の紙で作った采配、左手には水を含ませた本物の稲苗を持たせる。かつて（平成9年以前）は針金の芯を入れていなかったため、手に采配や稲苗を持たせるには縫い糸で結び付けていた。また、足には藁で編んだ小さな草鞋を履かせる。

出来上がった実盛人形は、高さ80～90cmほどで両腕を手前に広げた格好をしている。その広げた幅は約80cmある。人形の頭には紙で作った烏帽子をかぶらせ、厚紙で作った陣羽織を着せる。背には竹に紙を張った旗指物を立てる。この旗には「山川地主 諸鬼神等 齋藤別当実盛入道大居士 悪虫退散 五穀豊穰（あるいは五穀成就）」と墨書される。田穂地区の宝泉寺（曹洞宗）の住職が書く。さらに首には紙で作ったサンヤブクロをかける。沿道の人々は実盛人形を拝すると、このサンヤブクロに賽銭や菓子などを入れる。また宝泉寺の紋である轡十字の紋がサンヤブクロに1か所をはじめ、袷に2か所、烏帽子に3か所、（紋は、かつては平家方の齋藤別当実盛に因んで揚羽蝶の紋にしていたという）。

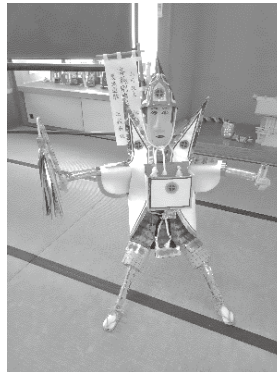


写真1 実盛人形



写真2 サンバイサマ

なお、行事終了後、実盛人形は川のほとりに安置され、やがて川の大水に流されてしまうため、現物を残すことはできない。ただ、西予市城川文書館（西予市城川町土居）と愛媛県歴史文化博物館（西予市宇和町）にそれぞれ1体ずつ保存・展示されている実盛人形があることから、作り手はこれを参考にして製作することもある。また、過去の写真などを参考にすることも多い。

なお、田植えが終わると、実盛送りに先立って、豊作を祈願するオサンバイサマ（サンバイモウシともいう）が行われる。サンバイサマとは田の神のことをいう。田穂地区では、毎年6月21日に総務区長が地区の戸数に応じたビワの葉（サ

ンバイシバという)を宝泉寺に持っていき、住職に経文の一部を墨書してもらおう。魚成地区でも、河内神社で「大年大神(あるいは御年大神)」と墨書してもらおう。この葉を23日に各戸に2〜3枚ずつ配布する。これを受け取った家では、先端を割った竹(上部の笹を2〜3枝残しておくことが多い)に2〜3枚一緒に挟んで水田の隅や水口などに立て豊作を祈願する。オサンバイサマは、田植え後から実盛送りまでの間に必ず済ませなければならぬとされている。また、かつては田植えが終わると、最後に田植えをした水田の角にシバ餅などをお供えすることもあったという。

行事当日(田穂地区)

実盛送り当日は、3地区の田休みに相当する。行事は、上流に位置する田穂地区での早朝の準備から始まる。午前8時より少し前、人々が田穂集会所に集合し、午前8時頃になると衣装に着替える。基本的には紺の袴、白の法被を着る。法被には、前に「実盛送り保存会」「齋藤別当実盛」、後に「実盛」と文字が染め抜かれている。かつては特に統一した衣装はなかったが、昭和44年の竜沢寺楽保存会の設立をきっかけとして揃いの袴と法被を着用するようになり、さらに平成11年に実盛送り保存会が設立されると、旧城川町や伊予銀行の助成を受けて数を揃えたり、念仏笠(竹の子の皮を用いた張り笠)も購入したりするようになった。

集会所での着替えを終えると、車や徒歩で宝泉寺へ向かう。そして宝泉寺に着くと、各自で実盛人形に手を合わせる。実盛人形は、本堂祭壇に向かって左脇に本尊を背にするように安置されている。このとき「優しいお顔」「テーピングの指がリアル」「足が長い」などの感想を述べ合うこともある。やがて9時前になると住職による開眼供養の儀礼が行われる。オショウコンイレ(御性根入れ・御招魂入れ)と称する。40分ほどかけて住職が経を唱えてオショウコンを入れる。田穂地区の総務区長、念仏衆など20人ほどが参加し、途中で順に焼香もする。オショウコンを入れると、実盛人形は仏になるともいわれている。次いで、総務区長の挨拶の後、総務区長や念仏衆など実盛送り保存会の会員だけで酢の物やビールなどの軽食をとる。



写真3 オショウコンイレ

この間、四本旗や太鼓などを持つ人10人ほどは、境内で待機する。彼らは実盛送り保存会の会員ではなく、地区全体から毎年当番で数戸ずつ担当することになっている人々で、近

年では女性もみられる。20分ほどして軽食が終わると、実盛人形を本堂の前までだしてきて、念仏衆が境内で最初の楽念仏(道行きからくずし③まで)を一庭行う。念仏衆は、太鼓1人、鉦5人の計6人で、白の法被と紺の袴を着用し、念仏笠をかぶる。鉦を担当する念仏衆の中には、袴の腰のあたりに予備の撞木を挟んでいる人もいる。念仏笠は現在、製作できる人がおらず不足しており、近年は網代笠(薄く剥いだ竹を網代に編んだ笠)をかぶる人もみられる。

楽念仏が終わると、本堂前に安置された実盛人形を総務区長が持って、いよいよ道行きとなる。行列を組んで鉦や太鼓を打ち鳴らしながら地区内の道路や田の畦道などを歩いていく(コロナ禍では行列は組まず、実盛人形だけを軽トラで移動させていた)。行列の参加者は、総務区長も含めて計15人前後である。網代笠をかぶって白の法被を着た旗持ち4人を先頭に、実盛人形をもつ総務区長、太鼓を担ぐ人2人、太鼓を叩く念仏衆1人、鉦を叩く念仏衆5人などと続く。

4人の旗持ちの持っている旗は、四本旗(シホンバタ)という。それぞれ「南無釈迦牟尼如来送悪虫ノ霊祈 悪虫退散 組中安全 攸」「南無甘露王如来送悪虫ノ霊祈 悪虫退散 五穀豊穰 攸」「南無妙色身如来送悪虫ノ霊祈 五穀成就 風雨順時 攸」「南無多宝如来送悪虫ノ霊祈 悪虫退散 五穀豊穰 攸」と墨書された紙を長さ240cmほどの青竹に付けたものである。この旗は、かつて葬列で使っていたものと同様形状をしている。

田穂地区では、まず最上流にある大池まで道行きする。大池は、正確には面田池(おもだいいけ)といい、江戸時代に代官・兵頭三右衛門が造成したとも伝えられ、水源の1つとして田穂地区の水田を潤している。この大池/面田池を出発点として、県道野村・城川線や水田脇の道などを通りながら沖の堂(茶堂の1つ)、ゴマジリ茶堂の順に田穂川に沿って下流に道行きし、最後にサルバイという場所まで行って隣の魚成地区に実盛人形を引き渡す。なお、かつては茶堂(現地では「御堂(おどう)」とも呼ぶ)がちょうど川沿いに点々とあり、それらを繋ぐように通じる細い道や水田の畦道などを道行きしていた。

行事をもう少し具体的にみる。宝泉寺を出発した行列が面田池に到着すると、池の堤防脇に安置される地藏様に向かって右側に実盛人形を安置して休憩となる。この間、近隣の人々がやってきて実盛人形を拝し、首に下げられたサンヤブクロに、持参した菓子や紙に包んだ銭などを入れて手を合わせる。菓子は個包装された市販のもののほか、赤飯やカステラなどを紙に包んで供える人もいる。その際、前の人の入れた菓子をもらう。この菓子を帰宅して仏壇に供えてから食べると夏病みしないといわれている。中には稲苗を供える人もいる。その後、地藏様の前で楽念仏を一庭行ってから下流に向かって道行きとなる。途中1か所止まって地区の人々が拝し、やがて沖の堂に到着する。

沖の堂は、田穂地区にある三方吹き抜けの茅葺屋根の茶堂である。この沖の堂の正面に本尊を背にするように実盛人形を安置して休憩する。この間も周辺の人々が参拝に訪れる。

頃合いをみて楽念仏を一庭行ってから道行きとなる。道行きの道中、宝泉寺の下で道行きを停止して人々の参拝があり、さらにパーマ屋の前でも道行きを停止して人々の参拝を受ける。



写真4 大池での参拝の様子

その後、ゴマジリ茶堂に到着する。再び堂の正面に本尊を背にするように実盛人形を安置して休憩する。近隣の人々が参拝した後、楽念仏を一庭行う。ここでの楽念仏は、田穂地区での最後の楽念仏となるため、道行きからモガエシまでを行う。

念仏が終わると再び道行きとなり、サルバイまで行く。サルバイは、田穂地区と魚成地区の境とされている場所で、魚成地区の人々が待っている。サルバイには神々の境界争いの伝説がある。すなわち魚成の神様が野村の神様が田穂地区の領地をめぐる争いが絶えなかったことから、朝一番鶏の鳴き声を合図に各々の社を出発して出会ったところを境界にすると決め、魚成の神様は牛に乗って出発し、野村の神様は猿に乗って出発したところ、足の速かった猿の方が領地を多く得られた（≒猿が領地を奪った）ことから、両神の出会った場所をサルバイ（猿奪）というようになったという。現在は、「さるばい」と刻まれた石碑が安置されている。



写真5 サルバイでの楽念仏

サルバイに到着すると、田穂地区の人々は実盛人形をこの石碑の前に安置し、両脇に四本旗を立て、魚成地区の人々に太鼓1張、鉦6口、念仏笠を引き渡す。また、サンヤブクロの中の菓子はそのままに、賽銭だけを回収する。魚成地区の人々は楽念仏を一庭行ってからサルバイを出発する。やはり四本旗を持つ人4人を先頭に、総務区長の持つ実盛人形、太

鼓を持つ人2人、太鼓を叩く念仏衆1人、鉦を叩く念仏衆6人と続く。なお、田穂地区の人々は集会所に戻って昼食も兼ねて飲み食いとなる。

行事当日（魚成地区）

実盛人形が魚成地区に引き渡されてからも基本的な動きは同じで、下流の今田地区に引き渡すまでに、魚成地区の中の川向、中津川、陰之地、町中、古市の5つの集落のすべてを巡行していく。

まずサルバイを出発すると、ほどなくして川向公会堂前にある川向の茶堂に到着する。ここでも本尊を背にするようにして堂の正面に実盛人形を安置し、休憩・昼食となる。昼食後、楽念仏を一庭する。このときは太鼓が1張加わり、太鼓2人、鉦6人で行う。ここでは練習も兼ねて道行きからモガエシまでを行う。その後、再び太鼓1人、鉦6人での道行きとなり、ナルタ（成田）と呼ばれる場所に向かう。

ナルタは、田穂川と中津川の合流する地点にあたとされている。ナルタに着くと、路上に実盛人形を安置し、その横に四本旗を立てる。このとき四本旗を5本追加して計9本とする。また、実盛人形の背に挿す旗指物も1本追加する。これらの旗はすべて河内神社で用意される。追加された5本の四本旗にはそれぞれ「奉鎮齋藤別當實盛命五穀豊穰守護修」「為齋藤別當平実盛公上慈恩酬祈魚成五区中五穀豊穰悪虫退散」などと墨書されている。追加された旗指物には「齋藤別當平実盛大居士」と墨書されており、実盛人形の背には挿されずに手に持って道行きとなる。

ナルタで旗が追加されるのは、かつての実盛送りの様子の名残りとしてされている。すなわち、かつては中津川上流の中津川集落でも同様に実盛送りを行っており、その道行きが下流の陰之地集落まで来て、ナルタで田穂地区から下って来た道行きと落ち合っていたといわれている。その結果、中津川集落の実盛人形は衰滅し、旗指物と四本旗だけが残って田穂地区の実盛人形に加わるようになったという。

これらの四本旗や旗指物、太鼓などを持つ人は、魚成地区の5つの集落それぞれの区長と会計の計10名で当番制で毎年交代する。四本旗は、1人で1本持つ人もいれば、2本持つ人もいる。また、実盛人形は、地区全体の総務区長が持つことになっている。ナルタでも楽念仏を一庭行った後、道行きとなる。



写真6 ナルタからの道行き

次いで到着するのが元町である。ここでも実盛人形を安置して休憩した後、楽念仏を一庭し、再び道行きとなる。元町の休憩場所は、Y氏宅の前で、かつては御旅所が設置された場所ともいわれている。

次いで古市の茶堂に到着すると、再び堂の正面に本尊を背にするように実盛人形を安置して休憩となる。頃合いを見て楽念仏を一庭行う。ここでは魚成地区としての最後の楽念仏となるため、基本的には道行きからモガエシまでをすることになっている。そして、古市の茶堂を出発すると、今田地区との境に向かう。



写真7 古市の茶堂での楽念仏

やがて魚成地区と今田地区の境に到着すると、今田地区の人々が待っていて、実盛人形が引き渡される。魚成地区と今田地区との境界は猿屋川とされているが、そこから少し今田地区側に入ったところで引き渡しを行う。サンヤブクロの中の金銭だけを回収して実盛人形を安置し、四本旗9本、追加された旗指物1本、太鼓1張、鉦6口（ただし、鉦は今田地区でもある程度揃えているため、受け取って一部だけ使用する）を引き渡す。衣装や念仏笠などは引き渡さない。

行事当日（今田地区）

今田地区の人々は、諸道具を引き渡されると、その場で楽念仏を一庭行う。太鼓1人、鉦6人である。その後、道行きとなって今田茶堂に向かう。この引き渡しの際には、今田地区で用意した四本旗1本も加わるため、四本旗は計10本となる。加わった四本旗には「奉鎮齋藤別當實盛命五穀豊穰守護依」と墨書されている。

今田茶堂に到着すると、本尊を背にするようにして堂の正面に実盛人形を安置し、少し休憩をとってから楽念仏を一庭行って道行きとなる。その後は河内神社の下、記念碑の前と2か所で若干の休憩を挟みながら、ゆっくりと地区内を下流に向かって道行きしていく。この2か所の休憩では念仏は行わない。

最後に今田地区の東端にあたる杉の瀬という場所まで来ると、肱川の支流・黒瀬川（地元ではオオカワとも呼んでいる）の河原まで下りてウチアゲを行う。夕方17時頃である。ウチアゲは、川を背にするように実盛人形と四本旗・旗指物を安置し、これに向かって楽念仏を行うものである。このときの楽念仏は、行事全体の最後となるため、太鼓3人、鉦6人と

なり、道行きからくずし③まで、庭念佛からくずし③まで、庭念佛からモガエシまでの計三庭行う。そして楽念仏が終了すると、実盛人形と四本旗・旗指物を川のほとりまで持っていき、川を背にして実盛人形を安置し、その横に追加された旗指物を置き、四本旗は上部を括って円錐状にして実盛人形の上に被せるように置く。このときサンヤブクロの中身はすべて回収し、その場にいる人々に配布する。行事はこれで終了となる。



写真8 ウチアゲ

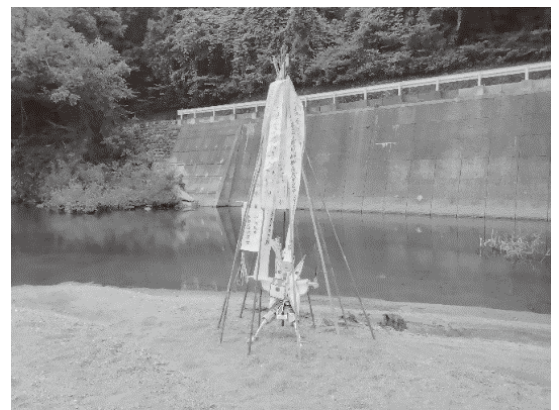


写真9 黒瀬川ほとりに安置された実盛人形

実盛人形は、その後、大水などで早く流されれば早いほど、その年は豊作になるといわれている。また、人々の厄を持っていくってくれるともいわれ、流されると厄も流れるという。行事終了後に鉦、太鼓などは、今田地区の人が田穂地区に返却する。

行事の特色と伝承状況

魚成の実盛送りは、西日本に多くみられる実盛送り／実盛流しなどと呼ばれる行事の1つである。「実盛」と称する人形を製作し、それを持って村内を巡り、最後に村境に送る形が多く、平家方の武将、齋藤別当実盛にまつわる伝説などとも相俟って、西日本に特徴的な虫送り行事の一形態と解されてきている。

各地の実盛送りのなかには、一つの集落で完結する場合のある一方で、複数の集落がリレー式に実盛を引き継いで送る事例も少なからずみられる。その最もよく知られ、かつ規模の大きいものが、山口県のサバヤ送り（2009年山口県指定無形民俗文化財、2023年記録作成等の措置を講ずべき無形の民

俗文化財) であろう。内陸の長門市東深川の神社から下関市豊北町栗野の海岸までを数週間かけてリレー式で実盛を送っていく。

同じような行事は、かつて愛媛県内でもみられたようであるが、現在ほとんどが衰滅している。例えば、宇和島市津島町でも、戦前まで増穂、岩松、畑地、須之川と約1週間かけて実盛をリレー式で送っていたという。魚成の実盛送りは、現在も行われているリレー式による実盛送りとして注目される。しかもトラック等による簡易的な送りではなく、スタートからゴールまで7km以上もの道のりを3つの地区がリレーしながらほぼ1日かけて丁寧に送っている点も貴重である。戦時中、一時衰退したともいわれているが、戦後、保存会を結成し、それを契機に3地区合同で衣装や道具も揃え、練習なども定期的に行うようになっており、伝承状況は比較的良好といえる。ただ、若者の参加が少ないことも事実であり、後継者育成等への継続的取り組みは必須であろう。

魚成の実盛送りの注目すべき点をいくつかあげてみると、まず水神との関わりがある。この行事では、水源として下流の水田を潤している池を出発点とし、下流に向けて水田の中などを巡行する。稲作では、田植え後、害虫の発生が危惧されるだけでなく、十分な水で水田を潤す必要がある。そう考えると、害虫を送る虫送りの要素だけでなく、用水がしっかりと流域の水田に行き渡ることを願っているとみることのできるのではないだろうか。つまり、虫送り一辺倒ではなく、水神との関わりも考慮しておく必要があるように思われる。加えて、実盛の「サ」は、田の神と解することもでき、そうであれば田植え後に田の神を送る行事としての意味もあるといえよう。

次に、サンヤブクロを介した供物のやり取りがある。人々は実盛人形に会おうとサンヤブクロに供物を入れる。この行為からは、各自・各家の災厄を実盛に持ち去ってもらおうという姿勢を読み取ることができる。そしてその際同時に1度実盛の手に渡った供物を再度貰い受ける。これは逆に御利益に預かろうとする姿勢とみることができる。つまり、災厄を取り除いて福を授けるという性格を実盛人形にみることができる。災厄と福を取り換える力が実盛人形には認められているのである。ここで取り換えられる福は、夏病みしないという福であり、稲作と無関係である点も注意すべきで、この行事に稲作以外の面も考慮する必要を示していよう。

その点でさらに注目すべきは、現在は行われていないものの、同じ地域で戦後の昭和25年(1950)頃まで、実盛送りとは別に「虫送り」と呼ぶ行事を行っていたことである。毎年7月、子どもたちも含めた村中の人々が松明を手にし、夜に上流から下流まで練り歩くもので、そのルートは実盛送りとはほぼ同じであったという。この事実は、実盛送りを虫送りからいったん切り離して考えてみる必要性を示唆する。そこで改めてこの行事での実盛人形の扱いをみると、背中に挿した旗指物には「大居士」という戒名が墨書される点、宝泉寺でのオシヨウコンイレを経て行事が始まる点、茶堂などの信仰施設で楽念仏による供養が逐次なされる点、さらに楽念仏の

文言に害虫を送る要素が全くみられない点などが注意される。いずれも害虫退治よりは、不慮の死を遂げた者の祟りを恐れ、これを鎮魂することに主眼が注がれているのである。ここに御霊としての実盛の姿がみえてくる。

こうした稲作と関わりが薄い実盛の性格や姿を確認したうえで、改めてこの行事をみると、虫送りの要素は四本旗に「悪虫退散」と墨書される程度である。あくまで推測に過ぎないが、基本となるのは田の神送りと御霊信仰であり、田の神と関わりが深い稲の生育が人々の暮らし・生存に大きく影響したことから、ある時期に害虫退治としての実盛送りが加わった可能性もある。いっぽうで御霊ゆえにしっかりと供養・鎮送しなければならぬのであり、供養・鎮送される御霊だからこそ、人々の災厄を除去し、人々に福を授ける力を持つのではないだろうか。

いずれにしても、この行事は、虫送りとして一元的に捉えるべきではなく、多元的に捉える必要があり、それによって実盛送りの成り立ちや本質にも迫ることができるかもしれない重要な行事といえよう。

6. 参考文献

城川町 1976 『城川町誌』

角川日本地名事典編纂委員会 1981 『角川日本地名事典・愛媛県』 角川書店

大木敬久 2023 「魚成の実盛送り」 『つなぐ ふるさと宇和島/南予』 23号

7. 調査日

令和5年6月24・25日

(石垣 悟)

41. 五反田の柱祭り

別称：無

伝承地：八幡浜市五反田

実施時期：8月14日

指定：愛媛県指定

テーマ：19・23

1. 地区の概要

八幡浜市の南部、市街地の郊外に位置する集落で、人口1,904人、世帯数794戸である（令和4年現在）。戦国時代には摂津氏が居城を構えた元城があり、江戸時代に五反田川沿いに集落が発達し、五反田縞など繊維産業で栄えた歴史がある。

2. 実施場所

盆の火投げ行事は、王子の森スタジアムを会場として行われる。修験者の金剛院を祀る金剛院神社は、スタジアムから約1kmの鯨谷に位置する。

3. 伝承組織

五反田柱祭り保存会

4. 由来伝承

戦国時代に五反田の修験者・金剛院円海法印は九州長崎にて修行中だったが、元城が敵に攻められて、風雲急なるを知り、急遽帰郷し、夜に松明をつけて元城に入城する時、城兵に敵と間違えられて射殺された。その後、五反田に悪疫の大流行があって村人は苦しみ、敵と間違えられて射殺され悲惨な最期を遂げられた金剛院の祟りであると喧伝されるようになり、神官の発意により始まったとされる。



写真1 柱祭りの柱

5. 実施内容



写真2 ガラに火を付ける

四国では唯一の盆の火投げ行事である。五反田柱祭りは毎年8月14日の夜に開催される。

五反田川の河原に高さ20m余りの柱を立て、柱の先に漏斗型に編んだ麻木の籠と笹飾りが取り付けられる。五反田の13区から各3名、合計39名の青年達によって、長さ1mほどの縄に結んだ「ガラ」（「タイマツ」とも呼ぶ）を籠めがけて放り投げる。籠の中に火のついたガラが入り燃え上がるまで続けられる。14日に入らない場合



は、ガラが入るまで何日も行われる。昭和50年からは場所を五反田河原から王子森公園グラウンド（現在、王子の森スタジアム）に移動して行なっている。

写真3 ガラを回して投げ上げる

柱祭りで用いられる火は金剛院を祀る金剛院神社で採火され、祭り終了後には籠にガラを投げ入れた者が報告祭として神社にガラを納めることになっている。



写真4 柱祭りの様子

6. 参考文献

伊住恵徳 1975 『五反田むら物語』 神山地区公民館
 大本敬久 2012 「盆の火投げ行事の分布—全国柱祭り・柱松資料集成—」 『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』 17号 愛媛県歴史文化博物館

7. 調査日

令和4年8月14日

(大本 敬久)

42. 高市の鬼の金剛^{たかいち おに こんごう}

別称：無

伝承地：伊予郡砥部町高市谷

実施時期：1月中旬頃（令和5年は1月16日）

指定：無

テーマ：15・18・24

1. 地区の概要

高市地区は砥部町の南部にあって内子町との町境の山間地区である。藩政時代は高市村であり、林業や鉱業などで栄えていた。谷、山谷、切迫地区などからなる「六組」と称する集落は高市の入口部にあたる地域で、昭和30年代は26戸あったが、令和5年は6戸9人と著しく減少している。

2. 実施場所

砥部町高市谷 高市谷集会所・町道

3. 伝承組織

高市六組自治会

参加者 山谷4人、切迫2人、谷4人

4. 由来伝承

鬼の金剛は、地区外から来る鬼をなかに入らせないために、正月16日の念仏の口あけの日に、大草履などを下げた注連縄を集落のはずれの道と川に渡して張り、念仏を唱える年中行事の1つである。

5. 実施内容

1月16日、高市六組（山谷・切迫・谷・野地(半分)）の南端の町道(往還道)に、大きな足半草鞋・藁スボ弁当・シャモジ・16膳箸を吊り下げた縄を張り渡し集会所でいざり念仏を皆で唱和した。

10:00 女性4人は集会所で昼食に出す料理の準備を始める。男性5人は集会所東で鬼の金剛作りを始める。

1人は大草履・藁スボ弁当を準備、2人は縄を準備、1人は16膳の箸作り、最後の1人は吊す準備をする。

11:00 吊りものが完成し、縄（馬簾はつかない）に吊し始める。川側より16膳箸（28cm竹製、32本）、シャモジ（46cm木製、これまでのものを使う）、藁スボ弁当（70cm）、お札（「大般若寶牘」）、大きな足半草鞋（長さ50cm）である。

11:30 高市谷集会所前の町道を跨ぐ形で鬼の金剛の縄を渡す（約10m）。10数年前に町道南の県道ができる以前は、集落入口の少し下の「谷の橋」のしものところに、町道と高市川を跨ぐ形で縄を張っていた。

12:00 野外に据えた大釜で釜揚げうどんを食べる。

13:00 集会所でいざり念仏が始まる。男女2組に分かれ正座し、太鼓・鉦を打ち鳴らしながら、「ナンマ

イダー、ナンマイダー、ナンマイダンブツ、ナンマイダー」を男女交互に唱和する。かつては各組18遍ずつ36遍を3回繰り返していたが今年は適当なところでやめる。（皆が座って唱えるので「いざり」といっている）

13:30 唱和を終え、組長が総津福禅寺の「大般若寶牘」のお札を1枚ずつ各戸に配布（以前は集会所で「奉唱念佛一百万遍専祈五穀豊饒病災悉除攸」のお札を磨っていた）して行事を終了する。

6. 参考文献

徳田留吉著・太田由美子編 2008 『村の記憶—留吉さん九二歳が綴る物語—』創風社

太田由美子・十亀幸雄 2022 「愛媛県広田村の鬼の金剛—総津久保組例を中心にして—」『遺跡』54

7. 調査日

令和5年1月16日

（十亀 幸雄）



写真1 高市谷の鬼の金剛（2023.1.16撮影）
左より16膳箸、シャモジ、藁スボ弁当、お札、大草履



写真2 いざり念仏（2023.1.16撮影）
左男性3人、右女性4人、真ん中に鉦と太鼓の男性2人

43. オハンニャ・ゾウリヅクリ

別称：ゾウリヅクリの日を以前はネンブツハジメと呼んでいた 伝承地：伊方町亀浦

実施時期：オハンニャ旧暦1月8日、ゾウリヅクリ旧暦1月16日（令和5年は1月29日、2月5日）

指定：無 テーマ：15・18・24

1. 地区の概要

亀浦は佐田岬半島東部に位置する伊方町の瀬戸内海側の集落。令和5年1月末現在で40世帯62人。地元では「子安観音」として親しまれている南北朝時代の木造聖観音像が祀られている。かつては茅浦と称していたが、文政3年（1820）6月に亀浦と改称したことが宇和島藩の『記録書抜』で確認できる。

2. 実施場所

集会所、老人憩いの家、農協集果場、草履の設置場所

3. 伝承組織

亀浦地区の人々。ジュウニングミと呼ばれる地縁組織で6組（現在は5組）に分かれていた。この行事は各戸から有志が集まる。平成10年（1998）に亀浦地区内の70歳以下の男性社会人・婦人会員・老人クラブ会員・公民館主事などからなる「亀浦伝承行事保存会」が結成されている。

4. 由来伝承

後述するように、ゾウリを置く場所が亀浦の中に2か所あり、そこに毎年交互にゾウリが置かれているが、この2か所をひとまたぎで歩いていく大きな人がいたとか、ひとまたぎにヤマイ（悪病や盗人など）が通り過ぎると伝えられた。

5. 実施内容

令和5年の場合、行事は大きく二つあって、まずオハンニャの機会に僧侶にトーバの文言を書いてもらったり、地区内に立てるお札をもらったりする。その後ゾウリヅクリとして藁草履を作って設置する。

オハンニャ

伊方町内で1～2月の時期は各地で大般若経の行事が行われるが、亀浦についても旦那寺である無量寿山法通寺（真言宗・伊方町中浦）の住職を招いて実施することになる。前日の1月28日（旧1月7日）が隣の伊方越地区でオハンニャがおこなわれており、伊方越地区の人々が法通寺から運んできた大般若経の経箱二つ（各50巻、あわせて100巻分）を事前に亀浦に運んでおく。

1月29日（旧1月8日）総代らが法通寺の住職を送迎して、集会所2階の部屋で準備する。まず正面に3幅の掛け軸を掛ける（中央に釈迦十六善神像、左右には6軀ずつ描いた十二天像）。その手前に机を置いて、オリョウグ、経典、燭台（一対）、線香立て、火舎・六器・高坏・華瓶、如意、お札、お盆に盛ったお米などが並べられ、正面に住職の座る座布団、その両脇に大般若経が並べられる。

午前10時から地区の人々が集まって、オハンニャが始まる。住職が経典の折本を一巻ずつ転読していく。その間にお盆に盛った米を下げて、シキミの葉で少しづつお米をすくっては小さな紙に包んで各戸に配る分を作る。

転読が一区切りつくと、数人ずつ住職の周囲にあつまって背中を丸めて伏せ、住職に般若心経を唱えながら経本を転読させてその風を一人一人あててもらい、さらに経本で背中を3回ずつ叩いてもらう。そ

のほか、全戸に配布するお札（さきほどの紙に包んだお米と一緒に各戸へ配る）と、地区内に立てるお札（後述）をもらう。

また、大草履といっしょに立てるトーバとして、枝葉が付いたままのモチタブの木の枝約2メートル程度のを準備し、幹を削って面取りしたものを作っておき、この面に住職に文言を墨書してもらう。令和5年の場合は「(梵字) キヤ・カ・ラ・バ・ア・キリーク・サ・サク 奉唱念仏壹百万遍者为天下泰平浦中安穩家内安全諸人快樂風順時作物成熟如意祈攸也」と認められた。これでひとまずオハンニャは終了し、住職を法通寺へお送りするとともに、大般若経の経箱もお寺へ返す。



写真1 オハンニャの様子



写真2 和尚がモチタブの木に文言を書く

ゾウリヅクリ（ネンブツハジメ）

この日は朝8時にまず集会所横にある老人憩いの家（かつての観音堂）に集合してネンブツを唱えたあと、全員で藁の置いてある農協選果場に移動し、そこで草履作りを始める。藁は葉やハカマの部分を削ぐなどの下ごしらえをする人がいる一方で、それらを編んで縄を作りながら草履を形作っていく人など、それぞれで分担して作っていく。昨年まで置いていた古い草履はこの時出る藁屑などといっしょに燃やして処分する。かつてはすべて藁縄で製作したと思われるが、近年は

第3章 愛媛県の祭り・行事

草履の内側の芯は細い塩ビパイプを組み合わせた型を作っておき、そこにために編んだ縄を編みこんで作られていった。長い縄を一度に作って編むのは大変なので、少しずつ縄を作っては編みこんで形成していった。

一方ペントーと呼ばれる藁すぼとしめ縄も作られた。ペントーは枝に引っ掛ける縄部分を左編みにするといい、注連縄は右編みで垂らす藁を1本―3本―5本と奇数に作った。全部出来上がったのは12時前で、そこからできた草履などを老人憩いの家に持って行く。草履は厄年の人が背中に背負って運ぶ。

老人憩いの家では、中の祭壇のある部屋に入って草履等を前に置いて、再び全員でネンブツを唱える。光明真言や南無大師遍照金剛なども唱えるが、太鼓と鉦の音に合わせて、大きく二手に分かかれ、「な―んま―いだーぶつ、な―んま―いだーぶつ、な―んま―いだー、ぶつ」を1セットに交互に唱え合うような形でネンブツが唱えられる。それが終わるとペントーの中に祭壇に供えてあったオリョウグを入れていく。オリョウグとは小型のお膳のようなもので、小型の台に箸と椀が五つ並び、飯・しいたけ・干瓢・豆・漬物等調理されたひととおりの供物が並ぶが、それらを藁すぼの中に納める。

また、オハニヤの時にももらったお札を細い竹の割れ目に挟んだものを地区内の10ヶ所に立てる。立てる場所は①海崎、②カリマタ、③Sさん倉庫下、④ムネナル、⑤平畑、⑥浜、⑦コゴタ川、⑧空川、⑨中井川、⑩ソウズ川で、多くは川や井戸などいずれも水の出るところだという。

そうして準備が整うと、鉦（片手に持てる小さい鉦と撞木）・太鼓（太鼓胴の鑢に紐を通し、その紐に竹を挿して二人で担いで運びながら打つ）、ペントー、塔婆、お札、藁草履（厄年の人が担ぐ）、清酒とイリコなどを各々が持って、鉦と太鼓を鳴らしてネンブツを唱えながら昔からの道に沿って列になって進み、草履を設置する場所まで運ぶ。亀浦では草履は東側の金毘羅神社付近の道端と、西側の客神社付近の道端の2か所に設置場所があり、毎年交互に設置している。調査時の令和5年は西側の設置場所までを行列で進んだ。

設置場所に着くと、塔婆を立てて草履を掛け、ペントーを吊るして、注連縄を渡した。設置し終わると、草履に清酒を振りかけ、参加者全員でイリコを食べて清酒を飲む。以上で行事が終了し、解散となった。

6. 参考文献

高嶋賢二 2003 「村境の大草履の現在―愛媛県西宇和郡伊方町の事例から―」『民具集積』第8号 四国民具研究会

7. 調査日

令和5年

(高嶋 賢二)



写真3 草履つくりの様子



写真4 ネンブツを唱える



写真5 草履を背負いネンブツを唱えながら進む



写真6 草履を設置し清酒をかける

44. 喜多浦八幡神社の弓放し

別称：弓放ち、弓祈祷、初祈祷

伝承地：今治市伯方町北浦

実施時期：2月11日（旧暦1月11日。昭和36年より現行）

指定：今治市指定 テーマ：6・25

1. 地区の概要

今治市伯方町は、芸予諸島のほぼ真ん中に位置する伯方島にあり、平成11年（1999）の瀬戸内しまなみ海道の全通により陸地部と橋での行き来が可能となった。北浦地区は伯方島の北東部に位置し、475戸1,046人（令和2年国勢調査）の集落である。

2. 実施場所

今治市伯方町北浦 喜多浦八幡大神神社の境内

3. 伝承組織

北浦地区の16地区を3つのグループに分け、そのうちの一つのグループが3年に1回トウグミをつとめる。トウグミは弓放しのほかに春市、秋祭り等、地域のお祭りを取り仕切る。トウグミのリーダーがトウガシラであり、トウガシラは互選あるいは立候補で決まる。当日に取り仕切るのはトウガシラと世話役のヒョウケンジ。射手は、原則としてはトウグミ、それもトウガシラをつとめている集落から6人選出する。

射手は中学生が中心で、かつては男子だけであったが現在は男女は問わない。トウグミだけでは人数が揃わない場合はほかのグループの中で探す。高校生や小学校高学年が務めることもある。

4. 由来伝承

神社によると、天明の大飢饉（1783～1788）の後、五穀豊穡、無病息災の願いを込めて始まったと言われている。

5. 実施内容

正月ごろより射手の選抜を始める。選抜された6人は例年2月1日より今治市伯方農村環境改善センターに集まり、当日まで毎夜午後7時から9時の2時間、神事の所作や弓の引き方の練習を行う。昭和30年頃は、射手自身が山から切ってきた竹で弓矢を製作することもあり、学校から帰った射手はトウヤの家へ行き、練習をしたとのことである。

令和4年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、射手による行事は執り行われることはなく、縮小して実施された。

2月5日に的作りとコモ作りを行った。トウグミが稲作農家より藁を購入し、毎年コモは新調している。行事前日の10日朝には幕を張り、境内の掃除を行う。

祭礼当日は、神社の境内に幅108cm、長さ203cmのムシロが2枚、縦長に敷かれ、的場（まどぼ）が設けられる。弓放ちではその年の恵方であるアキホに向けて矢を射る。令和4年度のアキホは南南東であった。的場の大きさは変わらないが、的の方角が毎年変わるため、アキホの方向によっては逆光となる年があり、射手を悩ませるといふ。的は門松を立て、コモを吊るしコモの後ろに畳を置く。鬼の目、魔（逆さに吊る）の的があり、コモの間に地域の人が祝儀袋を差し込んでいく。祝儀袋を射てもらおうと厄逃れになるとされ、祝儀袋に名前が書かれており、昔は干支と年齢も書いたとのことである。



写真1 コモに祝儀袋を差し込む

当日午前10時より宮司、神社総代、地区代表、トウグミの者など黒い正装の列席者20名とともに社殿にて神事が開始。午前10時30分に神事が終了し、境内の的場に移動して宮司が神事を行ったのち、弓で矢を2回放つ。



写真2 弓を放つ宮司

次に古希や還暦を迎えた者が「悪霊退散」などと言いながら矢を放つ。その後厄年の者や希望者が順に矢を放ち、弓放しは終了した。



写真3 弓を放つ33歳の厄年の女性

例年の神事は以下の通り。

午前10時に社務所に集まり、射手は白装束に烏帽子姿へ、ヒョウケンジは白足袋をはいて羽織袴へと着替える。『愛媛の弓祭』によれば昭和35年(1960)頃は祭り当日の早朝に射手は潮垢離を行ったとあるが、昭和15年生まれの方によれば、「弓放しの前に風呂に入ってきたかもしれない。」という話であり、現在では特に禁忌等はない。

午前11時30分ごろになると神社総代、惣代場(自治会役員)各地区組長も集まり、射手とともにトウヤサイを行う。トウヤサイでは射手の紹介を行い、午前12時頃終了した後、直会を行う。食事の献立は特に決まりはなく、近年では仕出し弁当をとっている。昭和30~40年頃のトウヤサイはトウガシラの家で行っていた。『愛媛の弓祭』によれば、かつては食事をとることを「カカモイ」と呼び、トウヤが酒や食事の負担をしていたが、昭和35年からは村民の寄付金でまかなうようになったとあり、現在では氏子より集められた神社費によって賄っている。「カカモイ」という言葉も今は使われていない。

食事が終了し、午前12時45分に社務所の前に集合し、宮司を先頭に列となり徒歩で階段を上り社殿へ向かう。昭和30年頃は、トウガシラの家でご祈祷をした後、行列になって神社へ向かったという。

午後1時過ぎから社殿では弓と射手を清める神事を行う。射手が自分たちの持っている弓矢を宮司に渡しお清めをしてもらう。終了後、午後1時半過ぎから、宮司を先頭に射手は社殿を出て的場へ入る。トウガシラが観衆への的場神事の説明を行ったのち、開始の弁を述べ、6人の射手の紹介を行う。次に矢代振り(ヤダイフリ・ヤダイブリ)といて矢を射る順番を決める。射手のリーダーが的場の前方に据えてある的の前まで

進み、6人の射手から1本ずつ託された矢、6本を後ろ手に持ち、的を背にする。その矢を1本ずつ選び前に出し、「前の一番、〇〇〇〇となさる」「後ろの一番、□□□□となさる」と大きな声で述べて、前の組と後ろの組の順番を決める。

射手は、組の中で自分がどの場所から射るか、その時になるまでわからないため、どの場所からも射ることのできるよう意識して練習を行う。

前の一番が進み出て宮司に弓矢を渡す。神前に供えて祝詞を奏上した後、宮司が2本の矢を射る。その間射手は、椅子に座って待つ。椅子の後ろに矢と弓を設置する台がある。4名のヒョウケンジは2班に分かれてお神酒を注ぐ。(肴は干した鯛である。)

神事は前半と後半があり、前の組三人が位置につき、同時に矢をつがえると、的に向かって右から順番に一本ずつ矢を射る。前の一番が所作をすると、それに合わせて二番、三番が動いていく。次に後ろの一番、二番、三番、そしてまた前の組、後ろの組の順番で射手は前半に計2本の矢を射る。的までの距離は10m程度。ヒョウケンジは的にささった矢を引き抜いて、組の椅子の後ろに設けられた台へ置く。矢は射手によって色分けされている。

後半は、後ろの一番が前に出て、宮司に弓矢を渡し、前半同様に矢を2本射る。ヒョウケンジはお神酒を注ぐが後半の肴は生の大根である。後半は後ろの一番から順に矢を射る。射手が矢を射った後は、古希、還暦、42の厄年の者の順にそれぞれ2本の矢を射る。

行事の最後には、ヒョウケンジが3本ずつ6本の矢を四方に放つ。その矢を受け取ったらその年は五穀豊穰、無病息災ということで、参加者は喜んで取りに行く。

6. 参考文献

- 森正史編 1967 『愛媛の弓祭』 愛媛大学農学部附属農業高等学校郷土研究部
愛媛県教育委員会 1975 『ふるさと年中行事調査報告書』

7. 調査日

令和5年1月17日・2月11日

(松井 寿)

45. たのもさん

別称：おたのもさん、田の実節句

伝承地：西条市旦之上

実施時期：旧暦の八朔（8月1日）の行事だが実際は7月～10月にかけて開催 指定：無 テーマ：20・26

1. 地区の概要

西条市は愛媛県の東部に位置し、南は石鎚山、北は瀬戸内海に面しており、平成16年に旧西条市、東予市、丹原町、小松町が合併した。庄内地区（旧東予市）は西条市の北西端にあたり、836世帯、1,752人（令和5年8月時点、庄内公民館だより）の農村地帯である。

2. 実施場所

西条市、とくに周桑郡（旧東予市、旧丹原町、旧小松町）において昭和30～50年頃までは豊作を祈る行事として各農家で行われていたが、現在は保育園や学校、公民館の行事として行われている。庄内公民館では令和2、3年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止したが、令和4年度より再開した。

3. 伝承組織

地域の老人クラブの有志を講師に招き、公民館が中心となり高齢者と児童との交流事業となっている。

4. 由来伝承

東予の八朔行事は、「たのもさん」や「田の実節句」と呼ばれ、米粉で作った人形をお供えし、豊作の祈願、加えて台風の時期なので風害除けの祈願を行う。稲の豊作を祈願する作頼みの意味の「たのみ」の性格が強い。

5. 実施内容

午前8時30分から地域の高齢者7名が公民館調理室に集まり人形の準備を開始。材料となる米粉に水を入れてこね、赤、緑、黄色の色粉を混ぜて更にこねる。分けて丸く平たく成形し、ゆでた後サラダ油をつけてさらに練る。そうすると肌理が細かくきれいな団子になる。ゆでてから色粉を入れると混ざりにくいとのことであった。白と合わせて4色の団子を人数分に小分けにして袋に入れ、午前10時55分に準備は終了。



写真1 たのもさんを作る様子

午後1時25分に庄内小学校の3年生13人が公民館に到着し、公民館長から八朔やたのもさんについて説明を受ける。米の豊作を願うたのもさんは、昔は各家で八朔の前の日にたのもさんを作り、作った人形はお盆に並べ、床の間に飾っていたこと、翌日に人形をあぶって食べたこと等の話を聞いた。4つのテーブルに分かれた児童は5人の高齢者から指導を受け、たのも人形を製作した。「つまみだのもさん」や「おどりこ」と呼ばれる人形は、団子を細長くひも状にして、白とほかの色を混ぜ、人形の頭と手の部分をつまみながら作り、足下を安定させる。大きさは6～7cmほどで、昔は各家でつまみだのもさんを糸でつなげて吊したり、お盆の周りにぐるりと並べて、中央にはみかんや鯛、亀などを作り床の間に飾ったとのことであった。

児童はつまようじやはさみも使いながら、動物や雪だるま、ゲームのキャラクターやお寿司など様々な人形をつくり、翌日にあぶって食べるよう声掛けされ、入れ物に入れて持ち帰った。午後2時40分に公民館での行事は終了した。



写真2 たのもさん

6. 参考文献

愛媛県史編さん委員会 1984 『愛媛県史 民俗編下』
 大本敬久 2006 「八朔の歴史と民俗一付・愛媛の八朔習俗」 『四国民俗』 39号

7. 調査日

令和5年9月27日

(松井 寿)

46. 土手内の亥の子

別称：オイノコサン

伝承地：松山市北条地区土手内 指定：無 テーマ：27

実施時期：毎年11月最初の亥の日（時期は定かではないが、かつては毎年旧暦10月の亥の日といわれている）

1. 地区の概要

土手内集落は、松山市の北東端に位置する集落で、瀬戸内海・斎灘に面している。集落西部に土手内漁港を有し、人々は漁港近くの字恵美子えびすに集住する。現在は松山市街に通勤する者も多いが、かつては農業のほか、斎灘での漁業に従事する家の多い半農半漁の集落であった。漁業では、イカナゴやイワシなどを網で獲ったほか、タイやサワラのしばり網漁なども盛んに行われてきた。

戸数は、明治11年（1878）に74戸、大正3年（1914）に87戸で、その後若干の増減はあるものの戦後も90戸前後で推移しており、これを15戸前後からなる6つの組に分けている。オイノコサンでは、この6つの組とは関係なく、集落を大きく北と南に分けて子どもたちが2組に分かれて約45戸ずつをまわっている。

2. 実施場所

土手内集落の各家の庭先など

3. 伝承組織

保存会のような組織は特にないが、愛護班（子供会）が中心となり大人も協力して実施している。

4. 由来伝承

亥の子の起源は、中国にあるとされる。中国で陰暦10月亥の日の亥の刻（午後9～11時頃）に行われていた「玄猪」という餅を食べて無病息災を祈る行事が、平安時代に宮中の儀式として日本に受容され、やがて民間にも浸透していったものとされている。民間では、この時期は秋の収穫の季節にあたることから、米の収穫後に役目を終えた田の神が田から家に帰ってくるのを祝い収穫祭として、新米で搗いた餅を神前に供えるなどした。通常、旧暦10月中に亥の日は2～3回あり、丁寧な農家では一番亥の子のみならず、二番亥の子や三番亥の子でも餅を搗いて供えた。

ただし、土手内集落では上記のような由来伝承は特に語られてはいない。

5. 実施内容

この行事は、子どもたちが集落内の家々をまわりながら、縄を取り付けた大きな石を地面に打ち突けて家内安全や五穀豊穡などを祈願する。また、これに先立って1年以内に子どもの生まれた家などをヤド（宿）として祭壇を設え、子どもの誕生を祝いつつ、無事の成長を祈願する点にも特色がある。

亥の子は、旧暦10月の主に初亥の日（一番亥の子）に行われる行事である。西日本で盛んな年中行事とされており、なかでも愛媛県は現在もなお行事が盛んに行われている地域である。愛媛県の亥の子をみると、ほとんどは集落の子どもたちが主体となって行っている。その様相は大きく2つに分けられる。1つは、最年長の大将を中心に各人がワラスポを手

に家々の庭先や土間で地面を叩いて行う「藁亥の子」ともいうべき行事である。もう1つは、最年長の大将の指示のもとゴウリン石などと呼ぶ球状の石に鉄輪をはめ、これに10数本の綱を結び付け、この綱を数人の子どもたちと一緒に持って地面を突く「石亥の子」とでも呼ぶべき行事である。両者の県内の分布をみみると、藁亥の子は、周桑郡以東の地域一帯（宇摩郡、新居郡）と松山市鷹子、温泉郡（東部）重信町・川内町、上浮穴郡小田町にみられ、石亥の子は松山市街地から北条、越智郡と島嶼部、周桑郡以東の地域一帯、さらには伊予郡、喜多郡、宇和郡と広く分布する。ただ、これはおおよその分布であり、両者の混在する地域（特に松山平野から上浮穴郡・喜多郡）も少なくない。いずれにしても亥の子自体は愛媛県内ほぼ全域に伝承されている。

北条地区の亥の子と土手内集落 今回取り上げる「土手内のオイノコサン」は、石亥の子の一例である。土手内集落を含む松山市の旧北条市域では、現在も14カ所の集落で亥の子が行われている。この地域の亥の子は、集落内で1年以内に子ども（古くは男の子のみ）の生まれた家を宿とし、子どもたちがこの宿を基点に行事を行う点に大きな特色がある。類似の特色は、幕末頃に松山あたりから伝わったといわれる今治市大三島の亥の子などにもみられるという。子どもの誕生を祝い、その成長を祈願しながら家々をまわる点からは、子どもの誕生を集落の人々に広く認知してもらおう意味のあったらしいことも読み取れる。本稿では現地調査を行ったいくつかの集落のうち、特に土手内集落で行われている亥の子について報告する。

土手内集落では亥の子は、「オイノコサン」とも呼ばれている。行事の由来について特に言い伝えなどはみられない。古くは毎年旧暦10月の亥の日に行われていたと伝えられているが、少なくとも終戦時にはすでに毎年新暦11月の亥の日に行われていた。現在も毎年11月の最初の亥の日に行われるのが通例となっている。

オイノコサンでは、地域の繁栄や家内安全、五穀豊穡などを祈願するとともに、子どもの誕生を祝い、無事の成長を祈願しているとされる。加えて、オイノコサンは火の神ともいわれおり、この日を境に炬燵に火を入れるともされている。なお、この日に特にはいけないとされるような禁忌はない。

前日の祭壇の設え オイノコサンの準備は、11月最初の亥の日の前日夕方に行われる。午後5時頃、学校を終えた子どもたちが集まってきて祭壇の製作を始める。祭壇は、かつては前年の行事以降1年の間に男の子の生まれた家に作られた。この家はヤド（宿）と称される。しかし現在、家屋や敷地に十分なスペースのない場合もあり、祭壇は土手内公民館に作ら

れることも多い。ヤドと公民館のどちらに祭壇を作るかは、当該家の希望によって決まる。また、ヤドになれる家は男の子の生まれた家を基本としているが、現在は希望すれば女の子の生まれた家でもヤドになることができる。

毎年たくさんの子どもが生まれた昭和40年代頃までは、1年以内に男の子の生まれたすべての家がヤドとなって祭壇が作られた。そのため生まれた順に11月最初の亥の日(一番亥の子)、次の亥の日(二番亥の子)、さらに次の亥の日(三番亥の子)と11月中に3度、オイノコサンを行うこともあった。生まれた男の子の特に多い年は、同日に複数の家がヤドとなって祭壇を作り、朝、昼、晩と日に3度オイノコサンを行ったことまでであったという。そうしたときは、子どもたちは学校も休んでオイノコサンを行い、これを楽しみにしていたともいう。

しかし、昭和50年代に入ると子どもが徐々に減少しはじめ、現在は一番亥の子の日だけオイノコサンを行うようになっていく。加えて、近年では集落内で1年以内に子どもの生まれない年もあり、そうした時は集落の出身者などの伝手を頼って何らかの縁のある子どもを探し、その子どもと縁のある在住者の家をヤドとしてオイノコサンを行っている。

祭壇の製作は、基本的には子どもたちが中心となって行うことになっている。現在は中学3年生を筆頭に小学1年生までの男女で行う。この子どもたちは愛護班(子供会)に所属しており、実際の製作には子どもたちの親も参加している。また、就学前の幼児が親と一緒に参加することもある。

かつては、小学3年生から中学3年生までの男子だけで準備から執行、片付けまでのすべての作業を行っており、大人は一切手出しをしなかった。また、女子も見に来ることはできたが祭壇や亥の子石などに触れてはいけないとされていた。しかし、昭和50年代になると子どもたちが減少しはじめ、やがて愛護班(子供会)が行事に関係するようになり、徐々に子どもたちの親も手伝うようになった。そして平成に入ってさらに子どもが減少すると、女子も参加できるようになり、この頃には愛護班以外の大人たちも積極的に手伝うようになって現在に至っている。

最年長の中学3年生は、「オモダイショウ(主大将)」、あるいは単に「オモ(主)」と呼ばれる。中学3年生全員がなり、行事全体を取り仕切る。オモダイショウに次ぐ中学2年生は、「コダイショウ(子大将)」、あるいは単に「コ(子)」と呼ばれる。コダイショウには特に決まった役目はないものの、オモダイショウの指示に従って精力的に動くことが期待される。ちなみに、このオモダイショウを頂点とする子どもたちの組織は、毎年10月に行われる北条の秋祭りで出される子どもだんじりを取り扱う単位にもなっている。

祭壇は、屋外からも見える部屋などに設えられる。祭壇の設え方をみると、まず高さ24cmほどの長机を階段状に積み上げ、その上に赤色のフェルトを敷いて画鋲で固定し、4段のひな壇を製作する。最上段は高さ150cmほどになる。最上段には、中央に日本酒の一升瓶を供える。これには「寿」と墨書された熨斗をつける。一升瓶の左右両脇に棧俵を1枚

ずつ敷き、その上に亥の子石を祀る。従って、祀られる亥の子石は2つである。2つの亥の子石は、直径が約8寸(24cm)・高さ約7寸(21cm)のものと、直径約8寸(24cm)・高さ約5寸(15cm)のものである。2つともかつては亥の子突きに使われていたが、現在は祭壇に祀られるだけになっている。それぞれの亥の子石には縄を結びつけるための鉄環が20環と21環ついており、かつては20名ほどで突いていたことがわかる。この亥の子石は、普段は土手内公民館の裏手の倉庫に保管されており、当日きれいに磨いてから祭壇に祀られる。この亥の子石を倉庫から運んでくるときは、地面を引きずったり、踏んだり、蹴ったり、腰を掛けたりしてはいけないとされている。そして最上段の左右両端には、筒状に丸めた和紙を挿した首徳利も供える。



写真1 亥の子

上から二段目は、中央に和紙を敷いた三方に載せ、これに二段重ねの大きな丸餅を供える。この丸餅は、直径15~20cmほどの一升餅である。三方の前には、生まれた子どもの氏名を記した紙をつける。この丸餅の左右両脇には山積みにした柿を載せた三方を供え、さらに左右両端には山積みにした林檎を載せた三方を供える。これらの柿や林檎は、タオルでつるつるに磨きあげてから供える。

上から三段目は、中央に二段重ねの小さな丸餅をたくさん載せた盆を供える。この丸餅は直径約6cmで、土手内の戸数分を目安に用意される。この丸餅を載せた盆の左には山積みにした柿を載せた三方、右には山積みにした林檎を載せた三方をそれぞれ供え、さらに左右両端には縁者などから贈られた果物などがあれば供えられる。これらの柿や林檎も、タオルできれいに磨きあげてから供える。

最下段は、中央に蜜柑をたくさん載せた盆を供え、その左右両脇にたくさんの菓子を載せた盆を供える。蜜柑は、小さな丸餅と同様に集落の戸数分を目安に用意される。

これら供えられた三方や盆の手前には生まれた子どもの氏名や「土手内子供会」と記された紙がつけられる。現在これらの供物はすべて愛護班が用意しているが、かつてはオモダイショウの指示で子どもたちが手分けして用意していた。

屋外に向けて設えられた祭壇の手前上部には赤い本幕が張られる。この本幕は、かつてヤドを務めた家から奉納されたもので、当該家の紋が入っている。幕の上部の乳に竹竿を通し、竹竿を上から吊す。また、この竹竿には赤色の綿糸も結びつけ、本幕の前につくかの飾りを吊り下げる。吊り下げられる飾りは3種類ある。まず中央に尾頭付きの鯛を2尾

第3章 詳細調査報告

それぞれ吊り下げる。この鯛は、「ゴサイ(御菜)」と呼ばれ、できるだけ鱈がピンと張ったものがよいとされる。鯛の左右両脇には五円玉を1枚ずつ吊り下げる。これは古くは穴の開いた古銭であったという。さらに左右両端には葉の付いた柿を1つずつ吊り下げる。



写真2 祭壇

屋外の、祭壇に向かって右手には「イノコバタ(亥の子旗)」と呼ばれる旗も立てる。イノコバタは、子どもの生まれた家で1枚製作して奉納したもので、前年までに奉納されたイノコバタといっしょに立てられる。イノコバタの大きさは、縦約185cm×横約36cmで、赤地が多いが、白地や黄色地、近年では水色地や黄緑地のものもある。いずれの色のイノコバタも上部に黒の横線が2本入り、その下には黒の家紋が入り、さらにその下に、右に「奉納年(和暦) 亥猪吉旦」、中央に生まれた子どもの氏名を大きく、左に「生年月日(和暦) 生」を縦書き・黒字で記す。現在、このイノコバタは、横にして高さ50cmほどに固定したアルミ製の梯子に差し込むようにして立てている。梯子の段の数から立てる本数は12本が限界で、古いイノコバタは立てられない。このアルミ製の梯子を使うようになったのは20年ほど前からで、それ以前は竹の棒を横に渡し、これにすべてのイノコバタを1本ずつ括りつけていたという。また、かつては祭壇に向かって両脇にイノコバタを立てることも多く、その際は両脇に1本ずつ笹を立てることもあったという。現在、イノコバタは、隣接する北条辻集落にある「瀬戸丸」という葬儀屋に注文して製作してもらうことが多い。気の早い家では半年前に発注することもあるが、オイノコサンの1か月前に発注しても間に合う。価格は令和4年現在で税込み1万2千円となっている。



写真3 祭壇とイノコバタ

こうして亥の子石を祀る祭壇を設けると前日の準備は終了となる。なお、昭和40年代くらいまでは、オモダイショウだけは準備が終わるとヤドの計らいで、ヤドでおにぎりなどの夕食をいただくこともあった。また、子どもたちは土手内公民館やオモダイショウの家に泊まって夜を明かすこともあった。

当日の祭壇の片付け 翌日、亥の子突きを始めるのは午後6時頃からであるが、その前に子どもたちは学校の終わった午後4時頃から祭壇、本幕、イノコバタなどを片付ける。子どもの減少した現在は大人にも手伝ってもらいながら片付けている。二段重ねの小さな丸餅と蜜柑は、集落を6つに分ける組ごとに袋に分けられる。もし丸餅が足りない場合は大きな丸餅を切って加える。やがて各組の組長がやってくる。これを受け取って組内の家々に配布する。それ以外の果物と菓子は、子どもの数に応じて均分して袋詰めされる。大きな丸餅も切り分けて子どもたちに均分される。お酒はヤドに引き取られ、オイノコサン終了後の晩に飲まれる。また、祭壇に供えられた大きな亥の子石は倉庫に戻される。本幕やイノコバタは、衣装ケースに入れて公民館の押し入れに片付ける。本幕の前に吊り下げられた飾りは、ヤドに渡される。鯛は焼いて食されるが、傷みのあるときは廃棄される。柿は渋柿であるため廃棄されることが多い。かつては柿も干柿などにして食された。

かつては、祭壇や本幕、イノコバタの片付けもすべて子どもたちだけで行った。果物と菓子はオモダイショウの差配で子どもたちに傾斜配分された。また、祭壇に供えられていた亥の子石の鉄環に縄を結び付けて亥の子突きに使用した。この縄は、子どもたちが各家で用意して持参してきた。自分で藁縄を編んでくる子どももいれば、家のロープを持参する子どももあり、持ってくると自分で亥の子石の鉄環に結び付けた。

祭壇などの撤去が完了すると、子どもたちは土手内公民館に集まって夕食を食べる。ここ数年はコロナ禍のため、いったん自家に戻って夕食を食べ、午後6時頃再び土手内公民館に集合している。

当日の亥の子突き 夕方、午後6時を過ぎると、いよいよ亥の子突きが始まる。土手内では集落を南と北に分けて家々を突いてまわるため、使用する亥の子石も2つある。現在使っている亥の子石は、どちらも直径17cm×高さ15cmと、祭壇に供えられた2つの亥の子石よりも一回り小さく、鉄環も15環だけで縄もすでに結び付けてある。この小さい亥の子石は、昭和50年代に子どもたちの減少に対応して作られたとされている。石材店に注文して製作してもらい、これに鉄工所などで鉄の輪をつけてもらったという。子どもたちは亥の子石に結び付けられた縄1～2本を手にし、協力して亥の子石を土手内公民館からヤドまで運ぶ。ヤドに着くと、庭先で2つの組がいっしょに亥の子突きを行い、その後、北と南に分かれて家々を突いてまわる。家々をまわる順番は特に決まっていない。

亥の子突きの際に歌われる亥の子唄は、基本的には数え歌風のもの1種類である。すなわち「お亥の子さんのみようには、一に俵を踏んまえて、二でにっこり笑ろうて、三で酒を造って、四つ世の中良いように、五ついつもの如くに、六つ無病息災に、七つ何事ないように、八つ屋敷を広げて、九つ小倉を建て並べ、十でと一んとおさまった、もうよかる」である。これを歌い終えると、家人から御祝儀が渡される。また、家によっては亥の子石に日本酒を掛けてくれることもある。そのときは続いて「お亥の子さんがようた、ようた、ようた・・・もうよかる」と歌って再び亥の子石を突く。この歌の長さは特に決まっておらず、御祝儀が多いときなどは「ようた」を繰り返して長くする傾向にある。土手内では亥の子唄の種類が少ないこともあり、事前に唄の練習などはほとんどしていない。家々をまわりながら何度も歌うことで見様見真似で覚えてしまうという。なお、最初にヤドで2つの組がいっしょに突くときは、まず大人の歌う伊勢音頭に合せて突き、次いで通常の亥の子唄に合わせて突くこともある。

亥の子突きでは、子どもたちが全員で手にした縄を唄に合わせて引っ張る。タイミングよく引っ張ると亥の子石は難なく持ち上がる。このとき激しく上下する亥の子石の上には、明かりとして提灯がかざされる。この提灯は、「いのこ」「土手内」と記されたもので、長さ2mほどの竹竿の先端に吊るされ、蝋燭の火が灯される。竹竿を持って提灯をかざす子どもは特に決められていない。かざした提灯に亥の子石が当たって蝋燭の明かりが消えるように、子どもたちは息を合わせて一生懸命突く。



写真4 亥の子突き

突く場所については、訪問先の家の人から指定されることも稀にあるが、基本的には玄関先や庭先の適当な場所を選んで突く。亥の子突きによって地面には穴が掘られる。この穴が深さ10cm以上にもなるような大きなものだ、福がたくさん舞込む、あるいはその家が繁盛するなどといって喜ばれる。この穴はそのままにして立ち去る。穴に入ると足が腫れるといわれるほか、穴を跨いだりしても良くないとされている。昭和50年代以降、アスファルトやコンクリートの地面が多くなってきたことから、そうした場所で突くときはタイヤを置いて、タイヤの上で亥の子石を突く。また家々をまわる際も、かつては亥の子石を引きずっていたが、現在はアスファルトが傷むため亥の子石を持ち上げてまわっている。

かつては、途中や家々をまわった後に、隣接する北条辻集落や北条集落にまで行き、互いの亥の子石をぶつけあって壊したりして喧嘩してくることもあった。なお、近隣の他集落にみられるような青年たちが亥の子石を盗んで隠し、子どもたちがこれを必死で探しだすような風習は土手内ではなかった。

こうして家々をまわり終えると、土手内公民館に戻ってきた公民館の脇で2つの組がいっしょに亥の子突きをする。そして再びヤドに行くと2つの組がいっしょに亥の子突きをする。その後、再び土手内公民館に戻って提灯を片付け、亥の子石も丁寧に水洗いしてから倉庫に戻す。

かつてはヤドまで戻ると、家々からいただいた祝儀や果物、菓子をオモダイショウの差配で分配した。また、亥の子石に取り付けた縄は、各自で外して持ち帰るが、持ち帰った縄を特に何かかに利用することはなかった。

ちなみに、かつてはヤドにならない家々でも毎年亥の日には餅を搗いた。この餅は、直径15~20cmほどの丸餅を二段重ねたもので、南天の葉を添えて神棚や床の間などに供えた後、家族で食べた。ただ、それを親類等に配ることは特になかった。現在祭壇に供えられる戸数分の丸餅は、この丸餅にあたる可能性が高いが、今回の調査では明確にはわからなかった。

なお、近隣の他集落には、11月の亥の子が終了した後、冬休みにオモダイショウの家などに集まって亥の子祝いと称して餅などを食す集落もあるが、土手内集落では昔から特に行われていない。

伝承状況 土手内集落では、現在、子どもの数が非常に少ないため、子どもたちだけでオイノコサンを実施できる状況にはない。そのため子どもたちの親も交えた愛護班（子供会）を中核とし、さらには集落の年輩の大人たちも支援しながら行事を実施している。時には大人たちが亥の子唄を歌ったり、縄を持って亥の子突きを手伝ったりすることもある。

オイノコサンは、特に文化財指定などは受けていない。保存会のような組織も特にない。しかし、集落の人々にとって大切な年中行事であるという意識は相当強く、子どもが減少した今日でもオイノコサンを中断するといった話は一切出ていないという。その点では、かつてに比べて担い手が大きく変わってきてはいるものの、伝承状況は比較的良好とみることもできる。

6. 参考文献

- 森正史 1962 『愛媛の民俗一年中行事篇一』 松菊堂
 角川日本地名事典編纂委員会 1981 『角川日本地名事典・愛媛県』 角川書店
 久保裕愛・久保進 2017 「亥の子が教える人間関係の民俗」
 『松山大学論集』 29巻4号

7. 調査日

令和4年11月5・6・7日

(石垣 悟)

47. 吉田町東小路の亥の子

別称：オイノコサン

実施時期：11月第2土曜日（令和4年11月12日）

伝承地：宇和島市吉田町東小路1区

指定：無 テーマ：27

1. 地区の概要

柑橘の町として有名な宇和島市吉田町は、江戸期、吉田藩三万石の陣屋町であった。東小路は、江戸期は中、上級武士の居住する地域であり、現在は吉田町の中心部の住宅街となっている。東小路の真ん中を通る本丁通りは八幡神社のお練り行事が繰り広げられる場所である。東小路1区の人口は133人（令和4年10月時点）。

2. 実施場所

東小路1区の集会所（亥の子宿）を出発点として、東小路の約70戸を一軒ずつ回る。

3. 伝承組織

亥の子連、或いは亥の子組という子ども組の組織があったが、現在は愛護会が運営している。吉田町の他地区では、小学6年生の保護者が責任者となることもある。亥の子は元々男子が行うもので、亥の子大将と呼ばれる最年長者（小学校6年生に相当）がリーダーとなって行われていたものである。この亥の子大将を経験し終えると、翌年からは若者組入りすることになる。いわば通過儀礼である。

現在は、亥の子参加者の保護者が手伝うようになっている。参加者は、小学1年生から6年生までの男女であるが、幼児も中学生も手伝うことがある。保護者の手伝いは、母親だけ、父親だけのところもあるが、東小路1区では夫婦で参加した。



写真1 亥の子宿と参加した子ども5人

また、伝承組織として吉田公民館が主催する亥の子大会（令和4年は第48回）も大きな役割を果たしている。これは、伝統である亥の子行事を存続していかうと始まったもので、各団体が集まってつき比べをしながら、上手な団体に賞を出して競うものである。近年、亥の子行事は行われなくなっていく地区もあり、令和4年（2022）では5団体に止まった。元々、亥の子の夜に各団体が互いの地区を回ってつき比べをしていたものが発展したものである。

令和4年現在、亥の子大会に参加する範囲（吉田公民館管轄範囲）では、20程度の亥の子組があることになっているが、中にはもう御札を配るだけのところもあり、さらにコロナ感染症のために見合わせたところもあり、実際に亥の子をついたところは、これより少ないと思われる。実施の有無は今回の調査ではできなかった。

4. 由来伝承

亥の子行事は、旧暦10月の亥の日に行われたものである。亥の子石に紐をつけたもので、各戸の門前で地面をついて回る。無病息災、子孫繁栄の祈願、今年の収穫への感謝、悪霊封じ込めの目的があるとされる。吉田町では、藩政時代から盛んで、競い合って行われていたと伝わる。

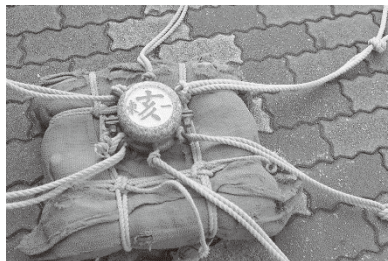


写真2 東一と刻まれた亥の子石

旧暦10月に亥の日が2回あれば2回、3回あれば3回行う地域もあったが、旧吉田町（吉田、奥南、喜佐

方、立間、玉津が昭和30年に合併して成立）においては、最初の亥の日にだけ行うことが主流であった。現在は、11月第2土曜日に日を決めて行うことが多い。また、11月の最初の亥の日に行う地区もあるが、絶対に守らなければならないいきまりでは無いと意識されている。土曜日に行うようになったのは、当時、学校で

午前中授業があり、午後から準備、夕方から亥の子について回り、夜は亥の子宿に宿泊、翌日は公民館主催の亥の子大会に参加という流れがあったからである。東小路1区では、宿泊を行ったのは現在30歳代の人たちまでである。亥の子宿は、個人の家で行う時代もあったが、集会所ができてからは、どこもそこを宿として、個人の家で宿があるのは令和4年では一つの地区だけである。

亥の子は男子が行うものであるとされたが、昭和40年代中頃には女子も参加するようになった。また、亥の子は夜つくものであったが現在は、午前中に終わらすところが多い。

亥の子組に新入りした際に、色のついた木綿の布に名前を書いて、亥の子宿に吊す風習があるが（写真1）、これは作らねばならないものではなく任意である。亥の子参加者全員の名を吊すところもある。

5. 実施内容

東小路1区の流れを中心に報告する。前日、集会所において、竹を伐り、裏白の葉を集める等準備を行う。亥の子をつく子どもは5人（児童4人、幼児1人、家庭数は4）である。4家庭の父母と兄弟の中学生2人も参加した。愛護班関係者も手伝い、12日当日の総勢15名となった。

午前8時過ぎより亥の子棚の飾り付け、幟立てが始まる。亥の子棚の最上段には、えびす様、大黒様の像が置かれる。お供えものは、亥の子餅、果物、野菜、鯛2匹、酒、飲み物である。大根が中心に供えてあるが、亥の子のつき納めに大根を傍らに供えてつく。いわれは伝わっていないが、大根が作物を代表し、来年への作祈禱として行われるものであろう。飾りは、裏白が用いられ、亥の子石（写真2）にも付けられる。

服装は、東小路1区の場合は、法被の上に、色とりどりのたすきをつける。法被を着る亥の子組は少数派である。亥の子大将はつけるたすきの数が多い。

午前9時過ぎ出発。道行きは、笛と小さな和太鼓で調子を取りながら歩く。それぞれの家の前で、亥の子を約1分程度つく。つく際には、タタミを敷く、これは、畳の切れ端を麻布の袋で包んだクッションで、これを吉田で最初に考案したのは東小路1区ではないかとされる。道路舗装が進んだ為、直接地面をたたけなくなったのである。昔は、土をたたいてへこんだ穴は、踏んではならないとされた。穴が深いほど喜ばれた。

亥の子歌は、現在は5曲あるが、その内1曲を子どもが選んで歌う。太鼓が歌に合わせて鳴らされる。迎

える家は、多くが玄関を開け、家の人が待つ。各家には、御札、みかん、せんべいが配られ、家庭からはお花（現金の祝儀）を貰う。元は亥の子餅として、特別に搗かれたものを配っていたが、東小路1区ではせんべいに代わった。お花は、近年、不要であるとされるが、慣習的にいただけることが多い。

約2時間で70軒ほどを回って回り、午前11時過ぎには、集会所へ戻り、つき納めをした（写真3）。東小路1区では少人数であるので夜の亥の子大会は参加しなかった。食事をして解散となったが、昔は、食事はご馳走と呼ばれる豪華なもので、亥の子宿でカレーや赤飯を作ったりしていたが、現在は弁当に代わった。これはどこも同じである。



写真3 地区各戸の玄関前でつく

第48回亥の子大会は、12日午後6時より吉田中央公民館横の空き地で行われた。参加は、御殿内1区、鶴間、西小路、桜丁、元町の5組で小学生までの子ども52名であった。6時40分に終了した。本来の土の地面で思い切りつくことができ、子どもたちが満足できるものであった。この大会が夕刻行われることで、夜回りの亥の子は無くなった。昔は、夜回りの亥の子があつて、翌日亥の子大会であった。

6. 参考文献

- 愛媛県生涯学習センター 2003 『えひめ、その食とくらし』
 関西国際大学児童文化研究会 2017 『亥の子絵本にしたい物語』

7. 調査日

令和4年11月12日

(宮本 春樹)

48. 巳正月（^みの正月^{しょうがつ}）

別称：巳午、辰巳 伝承地：愛媛県全域
 実施時期：12月巳の日 指定：無

テーマ：28

1. 地区の概要

12月の巳の日に死者のための正月を行うことから広く「巳正月」とか「^みの正月」と呼ばれる。愛媛県内でも中予地方や南予地方では12月の巳の日と午の日にかけて行うことから「巳午（ミンマ、ミウマ）」と呼ばれ、東予地方では辰の日と巳の日にかけて行われるため「辰巳（タツミ）」と呼ばれるように行事日に地域差が見られる。

2. 実施場所

愛媛県全域で行われている。

3. 伝承組織

その年に死者の出た新仏の家で行う。伝承の団体、組織は見られない。参列者は家族、親族が中心である。近所の者や地域、地縁の者が参列することは稀である。

4. 由来伝承

由来伝承が明確ではない地域が多いが、東予地方の一部では、戦国時代に師走の巳の日に、戦で多くの者が戦死して正月を迎えることができなかつたため、これを憐れんで供養をするようになったとか、武将たちの戦勝祈願として、生きて祝うことができないかもしれない正月を一定早く祝ったとか、豊臣秀吉の朝鮮出兵の帰途、戦死した兵士を弔うために餅をついたなど様々な伝承があるが、一定しない。内子町では、戦国時代、異郷の地で討ち死にした土佐の兵に大きな楽しみの一つであった正月を生前のように迎えさせてやりたいという願いから、土佐軍の行事として始まったものが定着したという説があるが定かではない。

5. 実施内容

「巳正月（ミショウガツ）」は「^みの正月」ともいわれ、12月の巳の日に新亡者を出した家が新仏のために行なう正月行事に似た儀礼のことで、四国独特の民俗行事である。行事内容は、地区や家々によって異なるものの、愛媛県内での一般的な内容としては、自宅に簡単な祭壇を設け、位牌を祀り、餅、注連飾り、菓子、果物などを供える。そして家族、親族が墓参し、墓前に柿などの木枝を2本立て、注連縄を張り、餅、蜜柑や干柿などを供える。注連縄は正月とは逆鉤いものを使う。墓前にて、死者の身の近い者が餅を焼いて、それ

を後手に持ち、包丁や鎌で切るなどして、墓参者に配って食べるという儀礼内容である。

呼称は、愛媛県内全般で巳正月（ミショウガツ）、中予地方、南予地方では巳午（ミウマ・ミンマ）、東予地方、特に西条市以東では辰巳（タツミ）、西条市や久万高原町では坎日（カンニチ）など様々である。

巳午の実施日時であるが、愛媛県内全体を見渡すと、中予・南予では、

巳の日から午の日にかけて行い、巳の日の夜に近親者が墓参し、午の日の明け方（カラスの鳴かないうちに）までに行うというのが一般的なスケジュールである。東予地方では、辰巳（タツミ）ともいうが、辰と巳の日に行うところが多い。また、近年では、12月巳の日に近い週末に行う家も増えてきている。松山地方では現在「巳の日の午の刻」ということで、巳の日の昼12時前後に行うところが多い。12月には2回から3回の巳の日があるが、どの巳の日でも構わないと言われる。

注連飾りの足は実際の正月とは異なる本数としなければいけないという伝承があるところが多い。西予市宇和町では、正面から見て足は一・五・三とするが家によっては偶数にするところもある。正月の注連縄に飾るものとして山草、橙が一般的であるが、巳正月飾りでは、ウラジロは逆面にして、橙は使わずに温州蜜柑を使うところが多い。墓前の注連飾りを張るのに用いられる木であるが、松で



写真1 巳午の墓前の飾り（砥部町）



写真2 巳午での墓前の注連飾り（松山市）

はなく柿や栗、竹笹が使われることがある。上島町では午の日に、お墓の左右に杭を打ち、一本の竹を渡す。竹にはお供

えされた毬をつるして飾る。お墓の花立には高野槇や松を立て、注連縄で結ぶ。注連縄は垂れが右から四・二・五本になるように高野槇に縛る。



写真3 後ろ手に餅を持つ (西予市宇和町)

東温市では、午の刻(昼の12時)に家族、親族で墓参する。墓には線香、餅、注連飾り、草履、包丁、藁、供物を持っていく。草履は竹に差し、墓石の後ろに立てる。注連飾りは墓石の前に飾り、皆で墓を拜んだ後、藁で餅を焼き、包丁で切り分けて、さらに包丁で刺して、肩越しに参列者に渡す。墓参が終わると自宅に帰り、新仏の祭壇の前で皆で食事をする。

松山市沖の二神島では辰の日の夜に行う。親類や隣近所が集まって餅を撒き、撒いた餅をすぐに焼いて食べる。夜の0時を過ぎたころに墓参する。このとき他の家の人たちとすれ違っても挨拶は交わさないことになっている。お墓に行く途中で一升餅を包丁の先で切り取り、肩越しに参加者に渡す。

松前町では最近では親族が集まりやすい週末の日中に行うことも多い。祭壇に餅と注連飾りを飾って、菩提寺の住職に巳午法要を執り行ってもらい、その後、墓地にて読経の後、親族のみで注連飾りを藁で燃やし、包丁で刺した重ね餅をあぶり、そのまま喪主が後ろ手で肩越しに刺した餅を親族が手でちぎって食べる。

砥部町(旧広田村)では墓飾りは、墓前に二本の竹を立て、藁の足を五・五・三本ずつ左右に垂らし、正月飾りとは逆に、右廻りの注連縄の中央にウラジロの表を見せて飾る。また椿の杖にわらじを付けたものを墓の裏側に添える。午の日の昼頃に行われる墓前での作法は、藁に火をつけ、当日に搗いた餅をあぶる。その餅を包丁に刺して後ろの人に肩越しに渡す。

内子町では、巳の日に一夜浸しにした一升餅について平餅にする。墓の四方に柿と栗の木を立てる。逆廻りの注連飾り

を墓石に巻き、イヌシダを飾る。行き帰りに人に会っても話してはいけない。カラスが鳴かないうちに帰る。



写真4 包丁に刺して餅を焼く (松前町)



写真5 餅を包丁に刺して肩越しに渡す (松前町)

宇和島市蔭淵では12月の巳の日に餅をつき、墓へ一重ね持って行く。墓の前に、柿と松の木をさし、藁を焚いて餅をあぶる。集まった親戚には下の方の餅を、その他の人には上の方を切って配る。巳午餅を食べると、夏痩せしないという。

この巳正月を行うことによって忌明けとなり、新たな正月を通常どおり迎えることができる。正月関連の死者祭祀の側面もある点は、注目されるべき行事と言える。

6. 参考文献

大本敬久 2011「死者の正月—巳正月の現代的変容と墓の設え—」『民具マンスリー』44-7、神奈川大学日本常民文化研究所

7. 調査日

令和3年12月、令和4年12月

(大本 敬久)

49. 岩屋寺のお水供養

別称：岩屋市

伝承地：久万高原町七鳥

実施時期：4月21日

指定：無

テーマ：29

1. 地区の概要

久万高原町七鳥にある四国八十八箇所霊場第四十五番札所の岩屋寺は、真言宗豊山派に属する標高700mの山岳霊場である。現在も四国霊場を巡拝するために全国からお遍路さんが数多く訪れる。

2. 実施場所

岩屋寺の境内にある穴禅定（お水供養所）で行われる。本堂の真下に20m程の洞窟に先祖供養のために地藏菩薩像・弘法大師像が祀られ、地藏菩薩像の下から水が湧いている。

3. 伝承組織

四国八十八箇所霊場第四十五番札所海岸山岩屋寺

4. 由来伝承

岩屋寺の寺伝では、弘仁6年（815）に弘法大師空海がこの地に入山し、鎌倉時代中期に一遍上人が参籠・修行し、その様子は「一遍聖絵」にも描かれており、中世以前から霊場、修行の場として人々の信仰を集めた。現在、寺域は、国の名勝、県立自然公園に指定され、大師堂は国の重要文化財に指定されている。

5. 実施内容

岩屋寺では、旧暦3月21日（現在は月遅れの4月21日）が「弘法大師縁日」となっており、「お大師さんの縁日」とし



写真1 お水供養

て、遍路以外にも久万高原町内外から多くの参詣者が訪れる。この日は「岩屋市」と呼ばれ、かつては寺の登り口に多くの露店が並んでいた。

単に行楽、レジャーだけではなく、この日は穴禅定（お水供養所）で、新仏の供養のための「お水供養」（「お水祭り」ともいう）に訪れる者が多い。令和4年の場合、7時過ぎから続々と訪れ、まずは寺務所で経木塔婆を購入し、供養する者の戒名や家名、住所を記入し、蝋燭に火を灯して地藏菩薩像の前に納めて、地藏菩薩前で湧出している手水を掬って、経木塔婆に注ぐ。そして手水や地藏菩薩に賽銭を供え、般若心經

等を唱える。その後に、不動明王を祀る本堂、弘法大師を祀る大師堂を参拝する。



写真2 本堂での法会

お水供養に訪れる者は、松山市や久万高原町内の者が多い。訪れた久万高原町在住の方にうかがうと、昨年、母が亡くなった。家に死者が出た時には新仏供養として必ず4月21日に来る。これはお遍路さんとして巡拝するために訪れて供養するのではなく、岩屋寺に比較的近い地域での死者供養の儀礼であり、近郷の霊山としての性格が見て取れる。岩屋寺には檀家はなく、訪れる者もそれぞれの地域の寺の檀家でもある。

穴禅定での水供養はそれぞれで行い、法会等は見られないが、11時から本堂で「弘法大師正御影供法要」が行われ、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、堂内にはあらかじめ申し出のあった新仏の家の者と信者のみが入って参列した。この日は、おにぎり等のお接待や、餅撒きも行われ、落語の公演も行われた。

なお、松山地方では、第五十一番石手寺の裏山に設けられた新四国「お山四国」にて、現在でも旧暦3月21日前後には新仏供養のためにその家族がお山四国を巡拝する者があり、四国八十八ヶ所霊場がお遍路さんの信仰だけではなく、地域の霊山として信仰され、その年中行事が今に継承されている点が興味深い。

6. 参考文献

なし

7. 調査日

令和4年4月21日

（大本 敬久）

50. ^{おおしま} ^{しましこく} ^{いち} 大島の島四国へんろ市

別称：大島准四国八十八ヶ所霊場、島四国 伝承地：今治市宮窪町・吉海町 指定：無 テーマ：29
実施時期：4月第3土曜日を初日とする3日間（平成25年までは旧暦3月19日～21日の3日間）

1. 地区の概要

今治市大島は、芸予諸島に属する面積 41.89 km²の島である。他の大島と区分するため、伊予大島や越智大島と呼ばれることがある。島の北東側が越智郡宮窪町、南西側が同郡吉海町であったが、平成16年（2004）1月16日の市町村合併により今治市となった。

国勢調査による令和2年の人口は旧宮窪町が2,209人（958世帯）、旧吉海町が3,172人（1,600世帯）、合計5,381人（2,558世帯）である。

2. 実施場所

大島内の各札所（正札所90ヶ所（39番、45番に同番あり）、番外3ヶ所）。

3. 伝承組織

伊予大島准四国霊場会。島四国心のふるさと会。住職在住の寺は4ヶ寺、その他札所の管理は、地区での共同管理や、個人での管理など、様々である。

4. 由来伝承

文化4年（1807）に医師毛利玄得、津倉村庄屋池田重太、修験者金剛院玄空によって開創された、島内で完結するミニチュア版の四国八十八箇所霊場。開創当初については「新四国ニ附一条之事」（高龍寺蔵）に詳しく記されている。開創後は多くの人が参拝したが、それを危惧した今治藩により、翌5年に三人は罰せられた。そのため、一時期廃止となったが、参詣者があとを絶たず、同7年に許されている。さらにその後、仁和寺より「准四国」と公に称することを許された。

5. 実施内容

令和5年3月28日、伊予大島准四国霊場会の総会に各札所の代表者が集まり、今年度の対応等について確認が行われた。令和5年は同2年の新型コロナウイルスによる中止以降、4年ぶりの通常開催となる。札所により日は異なるが、当日までにお供物やお接待の準備、周辺環境整備（清掃、草刈）が行われ、お堂に幟や幕が立てられた（札所により、参加人数やスケジュール、準備等は異なる）。

へんろ市の3日間は、原則7時から17時まで札所の戸が開かれることになっており、各札所にてお接待（お茶やお菓子、手作りの品等）や納経帳の対応が行われる。3日間同じ人が担当するところもあれば、日ごとに交代するところなど、札所を管理する人数によ

っても異なる。また、複数個所まとめた対応をしたり、無人でお接待・納経印のみ置いておいたりするなどの工夫をしているところもある。

お遍路さんは、一般的に下田水港に近い第44番札所十楽庵が起点となり、第43番札所まで巡拝する。かつては歩き遍路が主流で、島内の札所を2泊3日で巡っていたが、平成11年（1999）のしまなみ海道開通以降、車での巡拝が主流となっている。結願したお遍路さんは、住職在住の寺に申請すれば、結願証が発行される。

また、かつてはお遍路さんに無料で宿として家を提供する「善根宿」の文化があったが、しまなみ海道開通により、島内で宿泊する必要性がなくなったことや、少子高齢化による受入側の減少などにより、現在は行われていない。

6. 参考文献

大本敬久 2022 「四国遍路に見る歓待の地域文化―写し霊場（島四国）と善根宿―」愛媛県歴史文化博物館編『浄土寺・浄瑠璃寺と写し霊場』

7. 調査日

令和5年4月15日～17日

（松花 菜摘・田中 謙）



写真1 第45番札所ゆるぎ山岩屋寺への道中



写真2 67番紫雲庵でのお接待

51. 石鎚神社のお山開き大祭

別称：お山市

伝承地：西条市西田・西条市小松町石鎚

実施時期：7月1日から10日

指定：無

テーマ：29

1. 地区の概要

石鎚神社は愛媛県東予地方の西条市に位置する。日本七霊山のひとつとされ、西日本最高峰の石鎚山（標高1,982m）を神体とする神社である。西条市小松町石鎚の石鎚山頂に頂上社、中腹（7合目）に成就社と土小屋遥拝殿、西条市西田の平野部にある本社の4社をあわせて石鎚神社と呼んでいる。

石鎚山は最高峰の天狗岳（1,982m）、弥山（1,974メートル）、南尖峰（1,982m）の一連の山の総称であり、山頂からは地元の西条、小松を始めとする東予地方だけではなく、中予地方の松山平野や遠く中国地方まで見渡することができる。信仰圏も四国、中国地方、九州地方など広範囲にわたっている。

2. 実施場所

「お山開き」は毎年7月1日から7月10日に行われ、その間の登拝者は全国各地より数万人を数える。石鎚神社の御神像は三体（「仁」「智」「勇」）あり、6月30日早朝に、本社で出御祭を行ったあと、三基の神輿で渡御し、石鎚山の山麓の各集落で御旅所祭を行いながら、成就社へ向かう。30日の夜には成就社本殿に御神像が祀られ、翌7月1日午前7時、信徒の背中に背負われて、「仁」「智」「勇」の順に頂上社へと登っていき、10日間のお山開き大祭（お山市）が始まる。通常には本社において祀られている御神像が頂上社へ移動し、祀られている間を「お山開き」の期間としている。

3. 伝承組織

石鎚神社を主体に伝承されているが、石鎚山の信仰組織として江戸時代中期以降、各地に石鎚山を信仰する石鎚講（お山講）があり、大正4（1915）年に「崇敬組合」や「遙拝所」が設置、再編成され、従来の地域ごとの講は崇敬組合に統合され、現在に到っている。崇敬組合は、西条周桑、今治越智、東予、中予、南予、高知、安芸、備後、山口、福岡、大分に分かれ、中国、四国、九州地方に信者が多い。

4. 由来伝承

石鎚山は、飛鳥時代役の行者（役小角）によって開山され、『日本霊異記』、『三教指帰』によると奈良時代に寂仙、天台宗の光定、真言宗の弘法大師空海が修行した地であり、古代から伊予国をはじめ四国、瀬戸内地方の信仰の山として知られていた。江戸時代には常住社（現在の成就社）の別当を四国八十八ヶ所第六十番札所の横峰寺、第六十四番札所の前神寺が務め、地元西条、小松だけではなく瀬戸内海沿岸各地に石鎚講が組織され、多くの登拝者が訪れるようになった。明治維新の神仏混淆の禁止によって別当寺が廃止となり、明治時代初期に石鎚神社が定められ、現在に到っている。

5. 実施内容

石鎚山や石鎚神社へ登拝することをお山参りと言い、お山開きの期間には御山衣（おやまごろも）という白衣を着て登拝する者が多い。御山衣の背中には丸に石の字や三体の御神像が染め抜かれている。頭には鉢巻き（青、赤、黄色）、会符を背負ったり、紐で縛って腰に据えたりする。会符は、17階級にわかれた先達が持ち、石鎚神社の氏子（信者）の証明ともなっている。階級には副取締、取締、副大取締、大取締、副大会長、大会長、副監長、監長、副大監長、大監長、特別大監長、特選部長、名誉大監長、名誉部長、元老、元老顧問、元老大顧問がある。現在、約9万名の先達会符が発行されており、会符には先達番号、住所、氏名が記入され、石鎚神社の先達台帳に登録されている。



お山開きが始まる前日の6月30日には、7時30分に御神像が本社を出御して神輿に乗せられて、各地区を渡御しながら、御旅所祭が行われる。神輿を担ぐの

は崇敬組合の信者ではなく地元の西田と大保木を中心とする氏子の青年団である。本社を出御したのち、野々市、氷見、小松の旧道を通りながら、車やトラックには乗せずに担いで移動する。三基の神輿が進む先の道路の上には氏子や信者が一列に座って、その頭上を神輿が通過していく。御旅所祭は、小松の周桑商工会前、氷見の尾土居集会所、黒瀬の一の鳥居、大保木の極楽寺前、千々野の大元神社、関門の旧今宮登山道、下谷のロープウェー下谷駅で行われ、それぞれの集落の住民や信者が参列する。そして石鎚山ロープウェーに乗せられて山を登り、そこから駆け上がって午後3時30分に御神像三体が成就社に到着する。成就社拝殿に神輿が入る際には、周囲で信者たちが大きな団扇で扇ぎながら、神輿が勇ましく担いで走り込み、また息を上げて拝殿の中に入って、神職に御神像が渡され、祀られる。19時から御神像の拝載神事が行われ、成就に宿泊する信者たちが参列し、信者の背中に御神像を合わせる。

お山開きの開始日となる7月1日には、6時30分に成就社で御神像の出御祭が行われ、愛媛県外からの約



50人を含む計約120人が参列し、7時に成就社から頂上社へ向け、三体の御神像が信者に背負われて、15分毎に出御する。この7月1日朝の成就社からは、地元の氏子青年団から渡されて、崇敬組合が主体になって奉仕することになっている。令和4年は、大分県、愛媛県中予、愛媛県東予の崇敬組合の信者によって御神像が背負われて、頂上まで移動した。登拝者が道中の上り下りで行き逢うと「お上りさん」、「お下りさん」と言ってお互いに挨拶をする慣例となっている。

9時には鎖に到着する。頂上までに3ヶ所の鎖の行場があり、下から「一の鎖」(33m)、「二の鎖」(65m)、「三の鎖」(68m)と続き、「三の鎖」を登ると頂上社に到着する。御神像を背負った信者らが「ナンマイダンボ」「ワッショイ」と声を出しながら、鎖を登っていき山頂を目指す。

午前9時30分には御神像が頂上社に到着しはじめ、最後、三番神像が10時20分に到着して、頂上社でお山開き大祭初日祭が行われる。なお、7月1日は女性の登拝が禁止されており、2日から女性も登拝が可能となっている。7月5日の10時から、お山開き大祭中日祭、7月10日の10時にお山開き大祭終了祭が行

われる。10日の11時30分には、頂上社にて御神像出御祭が行われ、成就社へ向け御神像が出御してお山を降りる。令和4年には、西条、周桑、備後(広島県)のそれぞれの崇敬組合の信者が三体の御神像を背負い、山を降りた。13時には成就社で神迎え行事が例年は賑やかに行われ、和太鼓や篠笛等の奉納演奏があるが、令和4年には新型コロナウイルス感染拡大対策のため縮小されていた。14時過ぎに御神像三体が成就社に到着して祀られ、10日間のお山開きが終了する。その後、翌11日に本社まで御神像が還御する。11日には7時に御神像が成就社を出御し、本社に向かう。道中では、神輿の通る道に氏子、信者が一列に座って、その上を神輿が通過する。そして竹笹を持ち帰って縁起物とする。

12時30分に本社境内に到着し、本殿還宮後に御神像拝戴神事が行われ、多く



の氏子、信者で賑わい、信者の背中に御神像を合わせていく。これで石鎚神社の夏季大祭の全てが終了となる。

なお、江戸時代に石鎚山の別当寺であった四国八十八ヶ所霊場第六十四番札所の石鎚山金色院前神寺(西条市洲之内)でもお山開きの行事が行われている。6月30日に境内で7時から柴灯大護摩供が行われ、蔵王権現が櫃で担がれて、7合目付近の奥前神寺に蔵王権現を遷す。これをお山開きとし、7月11日に奥前神寺を出て、前神寺まで戻ってくる。なお、兎の山地区のI家が「お下り道中奉行」として、代々先導役を務めることになっている。

6. 参考文献

- 西海賢二 1984 『石鎚山と修験道』 名著出版
 森正史 1995 『山と信仰 石鎚山』 佼成出版社
 西海賢二 1997 『石鎚山と瀬戸内の宗教文化』 岩田書院

7. 調査日

令和4年6月30日、7月1日、11日

(大本 敬久)

52. ^{たかやま いしづちこう}高山の石鎚講

別称：権現講

伝承地：大洲市高山

実施時期：7月第一日曜日

指定：無

テーマ：29

1. 地区の概要

石鎚講（権現講とも言う）が行われる高山は、肱川の中流域にある大洲盆地の西にそびえる標高約 528m の高山の山腹（標高約 290m）に位置する集落である。集落は、東、西の2区に分かれ、現在 33 世帯 53 人が居住している。集落がすべて南面に位置しており富士山、神南山、大洲盆地全体を見渡すことができる。

2. 実施場所

石鎚講は、高山西区のつりせん岳に位置する石鎚神社で行われるが、地元では通称「カンダハマ」又は「カンダサマ」と称している。

雨天の場合は、石鎚神社麓にある西区集会所で行われる。

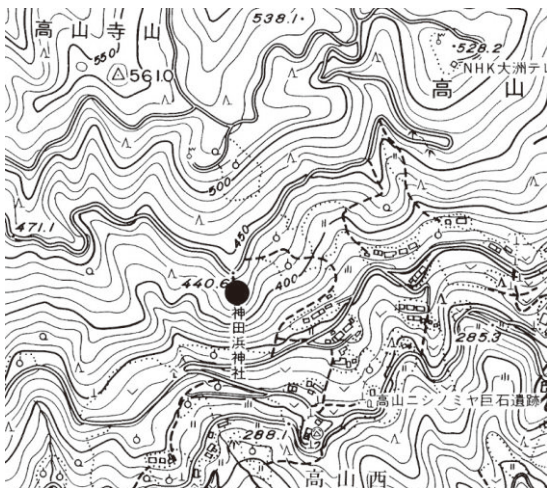


図1 神田浜神社位置図（大洲市都市計画図部分）

3. 伝承組織

高山東、西区住民によって伝承されてきたが、近年は住民の高齢化によって西区の有志数名によって実施されている。

4. 由来伝承

石鎚山からの権現の勧請については不明であるが、現存する史料から明治22年（1889）には高山において実施されていたことがわかる。

高山の石鎚講は、当初東区、西区別々に行われており、西区は現在のカンダハマで実施していたが、東区は三嶋神社境内において石鎚講で使用される石鎚神社の掛軸を参拝する程度であったと伝えられる。その後、西区と東区が合流し、現在の石鎚講となった。

また、神事のあとには参加者によるお山踊りが奉納された。踊りは、両手に黄色と青色の御幣を持ち、腰に注連縄を巻いて、太鼓を中心に反時計回りにまわりながら踊る。

5. 実施内容

【準備】

8時30分

西区集会所に集合し、注連縄や四方に立てる竹を切る準備を行う。コロナ禍以前は前日に実施していたが、現在は当日の朝に行っている。

作る注連縄は、神前に供える分のみであるが、昔はお山踊りを踊る人が腰に巻く注連縄も併せて作っていた。

8時50分

石鎚講に係る会計や神事の補助など行う「ヤド」（宿元）と称する幹事が到着後、集会所内に安置されている御神像、掛軸、太鼓などの道具類を軽トラに積み込み、実施場所である石鎚神社、通称「カンダハマ」へ出発する。

9時8分

「カンダハマ」到着後、境内内外において草刈りや枯葉などの掃除を行い、お供え物の準備を行う。当日は男性10名で、うち1名中学生が参加している。

9時45分

境内にブルーシート、その上にゴザを敷き、注連縄、御幣を作る。作った注連縄、榊、お供え物は、鳥居のほか境内や長持岩付近などに祀られた天照大御神、石鎚大神、神田大明神、朝日大権現（一番長持岩に近い）、大海津見命、篠山大神（長持岩の下）、千手観音（長持岩の間）など6か所の祠に供えて回る。この時、注連縄は輪にした注連縄をかける。

また、竹に5色（緑、赤、黄色、縞々など）の紙垂を挟み、上部を金色のテープで止めて御幣を作る。この御幣は、お山踊りの際に一人二本、手に持って踊っていたが、現在はお山踊りが行われなため厄除けとして持ち帰り、家の中や玄関へ掛ける。

祭壇には、一番上に御神体、真ん中と下の段にはお供え物や榊を置く。お供え物は、6つの丸盆に「りんご、トマト、ナス、バナナ、きゅうり、ピーマン、いりこ、わかめ」を載せ、海のものど山のを七つ供える。そのほか米、酒、鯛一尾、榊を祭壇に載せ、祭壇脇に石鎚山を描いた掛軸を飾る。

【神事】

10時45分

神事開始 式次第は「ヤド」が読み上げ、先達が神事を執り行う。神事の内容は、

- ①二礼二拍手一拝
- ②塩水
先達が参列者に水をかける

③修祓

④祓詞

⑤祭主御扉開

すでに御神像を出しているので行わない。

⑥祭主祝詞奏上

⑦祝詞奏上

「掛けまくも畏き天照大御神始(をはじ)め石(いし)鎚(づち)の大神(おおかみ)、神田大明神、朝日大権現、大海津(おおあまつ)見(みの)命(みこと)、篠山大神、千手観音諸諸の大神等(たち)の御前に高山の西東野民人多く集ひ今日の善き日に大神等を祝い拝(おろが)み奉りて恐(かしこ)み恐(み)白(まを)さく大神等の廣き厚き御恵を辱(かたじけな)み奉り高き尊き神教(みをしへ)のまにまに大神等を仰ぎ奉り直き正しき真心もちて誠の道に違ふことなく負ひ持つ業(わざ)に励ましめ給ひ家門高く身(み)健(すこやか)に世のため人のため盡さしめ給ひと恐(み)恐(み)も白(まう)す」

⑧祭主玉串奉典

⑨参列者玉串奉典

先達より参列者一人ひとりに玉串を手渡し祭壇に備えるが、「ヤド」から順番に行う。

⑩二礼二拍手一拝

10時56分

神事終了

【ハイタイ】

10時58分

先達が祭壇より約30cm、約20kgの御神像を持ち、参列者の肩に像を撫でて、無病息災を祈願する「ハイタイ」を行う。「ハイタイ」は、先達が参列者1人1人に「もりたまえ、きよめたまえ、いしづちのおおかみ」と唱えながら肩を撫で、「エイ！」の掛け声をかける。参列者全員の「ハイタイ」が終了すると、御神像を祭壇に戻す。



写真1

11時4分

二礼二拍手一拝を行い、「ハイタイ」終了。お供え物を撤収し、西区集会所へ戻る。

11時40分

西区集会所では、「カンダハマ」の神事に参列できなかった人へ「ハイタイ」が行われる。ここでは先達ではなく「ヤド」が先達になって行う。

11時47分

すべての行事が終了する。終了後、各世帯に紅白のお餅と三枚のお札を配る。三枚のお札は、集会所にある版木で作成し、そのうち篠山神社のお札は泥棒除けになるとのことから、持ち帰ると玄関に貼り、それ以外は神棚に祀る。そのほか、祭壇に並べた8種類のお供え物、お菓子やおつまみ、ペットボトル飲料などを配分して持ち帰る。

6. 参考文献

森正史 1995 『山と信仰 石鎚山』

大洲市誌編纂会 1996 『増補改訂版 大洲市誌 上巻』

7. 調査日

令和4年7月9日

(白石 尚寛)

53. 目黒の盆行事

別称：チャガカン

伝承地：松野町目黒地区

実施時期：8月1日～30日

指定：無

テーマ：19・33

1. 地区の概要

目黒地区は、松野町に属し、地理的に山間に独立した地域であり、稲作、柚子栽培を中心とした農山村である。過疎化が進行し、現在の戸数は150戸、人口は268人である（令和5年7月31日時点）。

2. 実施場所

建徳寺を中心として各戸

3. 伝承組織

「チャガカン」と通称で呼ばれる念仏踊りが盆の行事に毎回行われるのが特徴となっている。念仏を行う人を「楽弾き」といい、10名程度の保存組織がある。かつては子どもが担当していたと伝わるが、中断を経て、現在は経験者や希望者で行われる。

4. 由来伝承

目黒においては、盆時期だけでなく、春や夏の作祈禱においても念仏が行われる。現在は、念仏の伝承組織が、地区の年中行事を担っていると言えよう。また、盆において精霊船を作る風習が残っているが、今後続くかどうかは心許ない状況である。その理由として、昔は当たり前にあった麦わらや稲わらが身近に無くなったことも挙げられる。

5. 実施内容

念仏は、「イレハ」、「本庭」、「イリハ」と呼ばれる3曲がある。本来は、それぞれに役割があったと思われるが、現在は由来が伝わっていない。イレハは、始めに行う念仏で、イリハは、終わりに行う念仏と考えられる。1庭（1踊り）は、約5分程度である。

楽頭1人で扇子を持って念仏を唱え唄う。途中に踊る所作がある。太鼓は2台、2人ずつ4人が打つ。打ちながら踊る所作が入る。飛び跳ねるような大きな動きは無い。鉦叩きは5人で、叩くだけで所作は入らない。

8月1日 施餓会 8:00～15:00 建徳寺

寺から数10m離れた位置で、辻念仏として、本庭を1庭行う。これは、古仏（祖先の霊）を迎えるものである。本堂まで、イレハを叩きながら帰り、本堂に着くと、本堂前で本庭を3庭行う。これは念仏はじめて、迎えた古仏に対してささげる。

続いて、武左衛門（百姓一揆で処刑された義民）と目黒城主（戦国期）のために、本庭2回、イリハ1回をささげる。続いて、檀家全ての祖霊に対して、本庭14庭、イリハ1回を行う。最後に、終わりのお礼念仏としてイリハを1庭行い、午前の古仏供養を終える。



写真1 辻念仏（令和5年8月1日）

午後から、新仏供養を行う。辻念仏（本庭1庭）を同じ場所で行い、イレハを叩きつつ本堂前に至る。まず、念仏はじめとして本庭を1庭行う。これから、新仏供養に入るが、もし新仏の中に生前、念仏を行っていた人がいれば、その人の為に本庭を1回行う。続いて、新仏1人に対して1回ずつ本庭を行う。その後、住職が棚経を行い、関係者が盆棚で焼香を行う。最後にお礼念仏としてイリハを1庭して終える。

この時、本堂には新仏の位牌を飾って供養し、1人に1本の供養旗が用意される。新仏の親族はその供養旗を位牌と共に持って帰り、位牌は盆棚に、供養旗は家の外に立てる。供養旗は、1本の笹竹に一反の白木綿を垂らしたものである。また、「南無阿弥陀仏 唵 摩 訶 唵 吽 吽 吽」が書かれた紙が付けられた竹を渡され、盆の間墓に立てておく。

8月10日 谷上様 15:00～16:00 建徳寺

谷上様は、観音の石仏で、元は目黒城の山中に安置されていた。いつしか寺に移され、谷上様の念仏は寺で行うようになった。谷上様は田の神様で、五穀豊穡の祈禱として念仏が行われる。本庭1庭、イリハ1庭、最後に本庭3庭が行われる。

8月14日 水引地藏様 水子地藏様 15:00～16:00 建徳寺

水引地藏は、建徳寺に古くから伝わる秘仏である。この地藏仏に対する念仏は、水不足にならぬように祈禱するものである。谷上様と同様に念仏を行う。目黒地区がひどい旱魃になると、水引地藏を黒助淵という場所に移し奉り、雨乞い念仏を行ったと伝わる。また、水子地藏に本庭3回を行い、生まれてくることが出来なかった子どもの供養の念仏を行う。

8月16日 諸仏様への念仏 8:00~9:00 建徳寺

この日は目黒にまつられている諸仏全てに念仏を行う日である。観音様、薬師様、弘法大師、地藏峠の地藏、尾花地藏に対して、本庭5庭を行う。続いて愛宕様（火難除け）、若山地蔵、黒助淵地藏、ダイボ下地藏、一の瀬地藏、梁瀬地藏に対して本庭5庭を行う。これらの5地藏は、水路に祀られており、水不足にならぬように祈禱するものである。

8月30日 トボシアゲ 15:00~16:00 建徳寺

本庭を1庭行ってトボシアゲ（盆の終わり）とする。その後、住職が法要を行い、最後に盆の間使用した灯笼等を境内でお焚き上げする。

新仏の初盆

新仏は8月1日に、供養旗を立てる。また、昔通りに盆棚もおいて迎える家もある。写真2、3は令和3

年に初盆を迎えたS家である。S家は精霊船も自作して供えた。昔は、初盆を迎える家では必ず作ったものである。盆棚は、建徳寺では、芭蕉の葉を敷き、米と小さく刻んだ茄子を供えるが、現在、各家庭では思い思いのものをお供えする。写真5がS家の自作した精霊船で、その上に、市販の灯笼を灯している。精霊船は8月12日に制作した。8月13日、迎え火を焚く。トボシアゲは、各家庭が銘々日を決めて行う。S家では、16日に行った。昔は川に流したが、自宅前の河畔で焼き、トボシアゲとした。

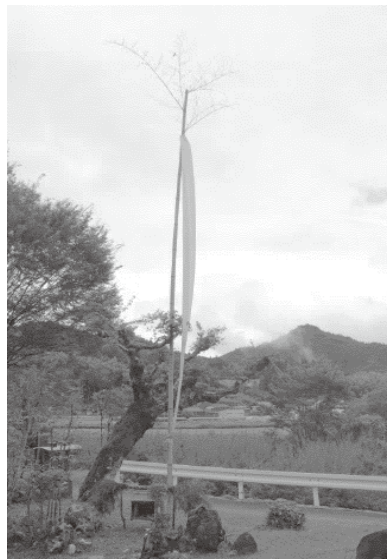


写真2 供養旗



写真3 盆棚



写真4 S家の盆棚



写真5 精霊船と盆棚を川へ運ぶ

6. 参考文献

渡辺満 1982 『ふるさと目黒』

松野町教育委員会 2021 『松野町文化的景観調査報告書—目黒の農山村景観—』

7. 調査日

令和4年8月10日~令和5年8月1日

(宮本 春樹・亀澤 一平)



写真6 住職も参加してトボシアゲ

のむらちようそうがわ せったい
54. 野村町惣川の接待

別称：無

伝承地：西予市野村町惣川寺組

実施時期：8月21日

指定：無 テーマ：8・34

1. 地区の概要

西予市東北部に位置する惣川地区は、北は大洲市に、南は高知県に、東は久万高原町などに接する。V字谷の舟戸川兩岸の河成段丘面にある各集落では、主に椎茸・繭・栗や葉タバコなどの山畑農業が展開してきた。

道路整備以前、西予市東部山間地では、人と物が峠越えの旧街道を通じて盛んに行き来していた。現在、惣川地区に残る47箇所のお堂（茶堂とも）は、かつて盛んだった住民の交流・交易や信仰の証である。お堂での念仏供養・風祭りやお接待の諸行事は、現在は、寺組のほか小松など限られた地区だけに残る。惣川地区の人口は365人（令和5年8月時点）。

2. 実施場所

惣川天神地区の寺組にある寺下お大師堂は、昭和60年（1985）に焼失するまでは茅葺きであったが、翌61年に再建のお堂は、2間四方の木造瓦葺きの建物である。正面と左右の軒庇は、昭和63年～平成元年に増築された。



写真1 寺下のお大師堂

堂内正面奥に、木造坐像の弘法大師像（幅41.5cm・奥行33.8cm・高42.2cm 焼失を免れた）が、安置されている。

お堂の前庭に、正徳3年（1713）建立の石碑（写真2 高86cm 最大幅48cm）が建つ。正面碑文は「南無大師遍照金剛 奉納四国辺路世安全 正徳三年巳三月吉日 主喜左衛門」。この石碑から、江戸時代中期の惣川地区にも遍路が来訪していたことが考えられる。

3. 伝承組織

寺下お大師堂での接待等の行事は、現在、寺組（令和2年4月に寺上・寺下両組は合併。令和4年12月現在、25世



写真2 境内の石碑

帯48人の組（部落）行事で、念仏台帳や太鼓・鉦などを寺組部落長が管理している。行事の実施要領は、毎年7月25日開催の寺組常会で決定される。

4. 由来伝承

お堂での接待の由来は不詳。寺組の念仏踊りに使う鉦の銘に「文化十癸酉年二月吉祥日 相川寺組源六 西村和泉守作」とある。この文化10年（1813）作の鉦が、接待や念仏に関する諸行事の由来を考える上で、有力な手掛かりとなる。

5. 実施内容

現在、寺組では、8月21日のお大師様の縁日（供養日）の行事だけが残っているが、部落に残る記録（『昭和十一年三月廿一日 大師堂接待係堂番帳 寺上下組中』等）によると、4月・8月（昭和35年までは旧暦3月・7月）の21日には、ほぼ10名の「茶沸当番」・「大師堂接待係堂番」などと呼ばれる当番が、お茶（番茶）や赤飯などの接待に当たった。

人口減少した現在は、7月25日の寺組常会において8月21日の行事の実施が決まると、部落長が中心となってその準備に当たる。8月21日の朝、各戸が2合のうるち米を出し合い、あずき5合（寺組の女性が寄付）や市販の食材を寄付金等部落費でそろえる。

寺組の女性数人（草刈りに出られない人や寺組部落長の家族など）が7時半ころから寺組の集会所で、お大師様の霊供や接待用の食べ物を作る。赤飯（約4升）やきゅうり・タコ・昆布の酢漬、野菜の煮物、たくあんなどである。



写真3 接待の様子(草刈りを終えた住民がお堂の木陰で赤飯などを食べている。)

男性16人が、8時から11時にかけて、お堂の周りや組内の道路等の草刈りを行う。刈りと並行して10時20分ごろから、お堂で、興禅寺住職・組役員や草刈りに参加できない人が、お大師様に般若心経をあげて焼香する供養読経を営む。

11時過ぎに草刈りが終わると、草刈りに参加した人やお堂に参った人は、お堂の縁側や庭の木陰に腰をおろして、お茶や赤飯、酢の物(昆布・きゅうり・タコ)、たくあんなどをいただく。赤飯は一本箸で食べるものといわれるが、現在は、一本箸を使う者はいない。お大師様が1本の杖を頼りに厳しい修行をした苦勞に思いを馳せて生まれた言い慣わしといわれる。現在の接待は、この昼食時のお茶や食べ物の提供をいう。



写真4 接待用の食べ物

以前は、惣川の他の地区(天神・稲谷など)からお参りに来た人や行商人なども接待の対象であった。

13時20分ごろから、接待を受けた寺組の人たち(男性)が、お堂の前庭で念仏踊りによる供養を3時過ぎまで行う。

踊りは、昭和63年(1988)の「寺組部落 念仏台帳」を基にして、次のように行われる。

道行

寺下 大師様	二十一辺	九門返し
寺上 大師様	三辺	三門返し
遍路供養	一辺	三門返し

道行 九門返し

道行は、念仏の準備や締めとして、太鼓役二人と鉦役六人が交互に音頭を唱えながら打ち鳴らす。「二十一辺」とは「クズシ」を21回繰り返すこと。クズシの初めに、太鼓と鉦の役が交互に音頭の出だしを変えて唱えながら打ち鳴らしたあと、音頭無しで鼓・鉦を打ち鳴らして、1回分のクズシが終わる。

九門返しとは、音頭無しの太鼓・鉦の打ち鳴らしである三門返しを3回繰り返すことである。

ただし、寺下のお大師に捧げるクズシ21回は、近年午前中の草刈りのため、11回に短縮された。したがって、実際は、次のように進行した。

5回→休憩→3回→休憩→3回・九門返し(くもんがえし)→休憩→3回・三門返し(以上大師供養)→1回(遍路供養)

なお、太鼓・鉦・音頭の詳細に表示した資料が作成されて、部落に保存されている。



写真5 念仏踊り(「道行」の場面)

念仏踊りのあと16時ごろから、寺組集会所(数年前まではお堂の前庭)で直会が行なわれる。草刈り・お接待・念仏踊りの反省点や今後のことが話し合われる。

6. 参考文献

- 愛媛大学農学部附属農業高等学校郷土研究部 1964 『惣川の民俗-東宇和郡野村町-』(部報あゆみ第5集)
- 惣川公民館 2011 『惣川の文化財-お堂・石仏・祠編-』
- 野村公民館惣川支館 1965 『惣川誌』
- 文化庁文化財保護部 1989 『茶堂の習俗 I 高知県・愛媛県』(無形の民俗文化財記録第31集)
- 山口大学教養部民俗学研究室内「惣川の民俗を知る会」1989『西四国山地 惣川民俗誌 年中行事篇』

7. 調査日

令和4年8月8日、21日

(佐々木 正興・大本 敬久・松井 寿)

55. 鹿島の櫓練り

別称：無

伝承地：松山市北条辻、土手内

実施時期：春5月3日、秋10月第2月曜

指定：愛媛県指定 テーマ：35

1. 地区の概要

松山市北条辻の鹿島区と同市土手内の三穂区は400mほど沖にある鹿島にほど近く、通称では鹿島区は「辻浜」、三穂区は「土手浜」と呼ばれ、浜という名前前から連想されるよう、かつては漁業に従事する人が多かった地域である。地区内の路地は細く、新しく屋敷を構える土地に限られることなどもあり、高齢化が進み後継者不足が悩みのひとつとなっている。北条地区の人口は7,719人（令和5年8月時点）。

2. 実施場所

松山市北条辻の北条内港と400m沖にある鹿島との間の海上にて行われる。

3. 伝承組織

鹿島区と三穂区の両地区で組織している鹿島櫓練保存会（昭和40年4月発足）によって運営されている。令和4年時点での会員の内訳は鹿島区26名、三穂区25名、両区出身者18名、鹿青会（鹿島神社の氏子の会）22名、その他22名の合計113名。

4. 由来伝承

櫓練りの起源ははっきりしないが、治承年間（1177～81年）頃の河野水軍の戦勝祈願や凱旋した際の祝勝奉賛に由来するのではないかと伝えられている。織田信長軍と石山本願寺の戦いである石山合戦において活躍した、鹿島城主河野通定、通秀親子によって松山市中西内に建てられた定秀寺（のち松山市神田町へ移転）の住職がこのお祭りに招かれることがかつては通例となっていたようで鹿島城主河野氏との関係を窺わせる。

5. 実施内容

櫓練りは鹿島神社の春と秋の例祭に、神輿の海上渡御の際に行われるもので、春は5月3日（平成14年までは4月15日）に、秋は10月第2月曜日（平成12年までは10月12日）に行われる。

江戸時代末頃から鹿島神社の秋の祭礼に櫓練りを奉納し始めたといわれ、昭和25年頃から春にも櫓練りを行うようになった。

伝馬船2隻を横につなぎ合わせたものを「櫓伝馬」と呼び、この船上で櫓練り踊りを披露しながら神輿を

乗せた御船2隻を先導し、海上を渡御する。この4隻が櫓練りの船団となるが、現在はエンジンを付けた引き船が櫓伝馬の前で櫓練りの船団を引く役目を務める。

曜日の並びで準備の日は変化するが、祭り前の日曜日を使って主な準備をする。令和4年春の場合は4月24日（日）には神輿の舁き棒などの取り付けや、棧橋の歩板掛け、御船おろしなどを、5月1日（日）には笹取り、取った笹への旗付けを行った。

5月3日、お祭り当日の午前9時から櫓伝馬の飾り付けを開始。2隻をつなぎ合わせ、両方の船に長さ5mほどの支柱を立て、前後にロープを付け日の丸と鹿島神社の矢車紋の旗を取り付ける。この支柱に準備しておいた日の丸の旗をたくさん（800枚程度）付けた笹（高さ7.5mほど、昔は9m）を取り付け、また5張の提灯を吊った竹を上下に取り付け合計10張を飾る。提灯の下側にも竹を渡し半鐘を吊る。



写真1 櫓伝馬へ提灯を取り付け



写真2 櫓伝馬へ笹を取り付け

4隅に紅白にした1mほどの棒を立て、竹を渡し、鹿島神社の神紋の入った幕を前と左右の三方向を取り囲む形で取り付ける。その他、太鼓や酒樽などを取り付け、それぞれの船に櫓を1本、櫂を3、4本乗せる。現在は引き船があるので、櫓は方向の修正などの舵取り用、櫂は船べりから横に出して使用するが、櫂の練習などはなく飾りとして使用している。10時30分頃準備完了。

13時、櫂練りの船団が鹿島へ向けて北条港を出発。13時30分から鹿島神社で祭典があり、宮出し。令和4年はコロナ禍のため神輿よりサイズの小さい庚申車に御霊を移して行ったが、令和5年は従来通り本神輿で行った。

宮出しした神輿を御船に乗せ、櫂練りの開始となる。鹿島を出発し、鹿島と陸地部側の間の海上を左回りに3度回り、北条内港へ入る。内港を何度か回り、陸上に上がることなく、港を出て鹿島へ戻り宮入となる。

櫂練り中の櫂伝馬の舳先側にはボンデンを持った青い法被姿の小学生4年前後の子ども、艫側には剣櫂を持った着物姿の青年が乗り、半鐘と太鼓のリズムに合わせて踊る。

ホーオーエンヤ ホーランエー
ヨイヤサノサッサ ヨイヨイトセ
ヨイトマカヨイトセ

という櫂練り歌を歌いながら踊ると踊りを間違えないで済むと言われている。

神輿を載せた御船では船べりの両側からはみ出した神輿のかき棒に足を掛け、船の両側から揺らしながら進む。



写真3 宮出しへ鹿島に向かう櫂伝馬

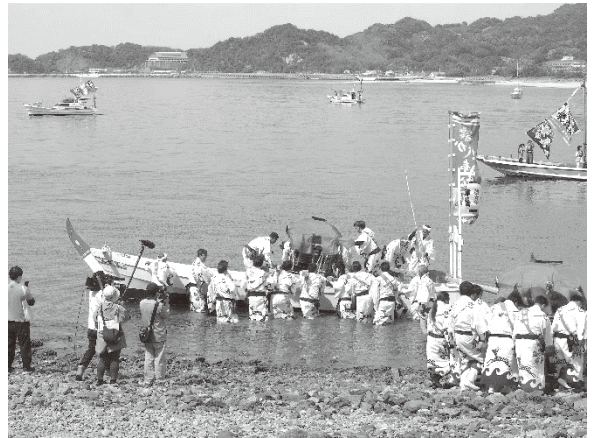


写真4 宮出し後、御船へ神輿を載せる



写真5 櫂伝馬と御船

秋の場合は、神輿は先に鹿島から対岸の鹿島神社御旅所へ移動する。祭り当日の朝の宮出しの後、北条校区各地区を渡御し、夕方明星川にて神輿みそぎが行われる。その後、御船に乗せ、櫂練り開始となる。港内を回ったあと、鹿島へ向かい宮入となる。春と比べると櫂練りの時間は短い。

6. 参考文献

愛媛県生涯学習センター 1999 『愛媛の祭り（平成11年度地域文化調査報告書）』

7. 調査日

令和4年5月3日、令和5年5月3日

(竹島 大祐)

おおさきりゅうじんじゃ
56. 大崎龍神社のオカゲン

別称：管弦祭、お火舩祭（おかびげんさい）

伝承地：西条市河原津

実施時期：旧暦6月11日・12日

指定：無

テーマ：35

1. 地区の概要

西条市河原津は、江戸時代前期には河原津村として成立していた集落で、明治22年に西側の楠村とともに楠河村となっている。集落は、周桑平野の最北端に位置し、浜堤上に海岸線に沿って家屋が展開している。なお、河原津漁港は西条市内唯一の指定漁港である。

2. 実施場所

現在、河原津集落内に鎮座する大崎龍神社の故郷が御旅所となっており、祭礼は、大崎龍神社で宮出しの後、河原津漁港から海上渡御を行って御旅所に渡る。御旅所で神事を行ったのち再び海上渡御を行って河原津に戻り、集落内を巡幸した後に宮入する。

3. 伝承組織

祭礼の執行は河原津集落全体で行われるが、会場準備・神輿の運行・片付けは現在11組に分かれている河原津地区のうち南組3組、中組3組、北組3組の9組が順に担当している（その年の当番の組を「当組」と呼ぶ）。神輿の海上渡御は、元は大崎龍神社前の浜から御旅所の間で行われ、多くの御供船が随行していたが、昭和42年（1967）に大規模な干拓が行われ、沖合550mあまり先まで埋め立てられてしまったため、神輿の海上渡御のみに簡素化されていた。御供船の随行は40年以上途絶えていたが、平成24年（2012）に地元有志によって御供船の随行が再開され、保存継承のため大崎龍神社おかげん保存会が設立されている。

4. 由来伝承

大崎龍神社は元々大崎ヶ鼻で祀られ、約340年前に現地に移ったと伝えられており、大正14年（1925）まで両社とも公認の神社であったので、祭礼では両社を行き来する神輿の海上渡御が行われていた。神社前の浜が大規模に干拓されたため、それまで行われていた組毎に御供船を出すような大規模な海上渡御は簡素化され、今日に至っている。かつては船で鉦太鼓が囃されたので管弦祭とも、お火舩祭とも呼ばれていた。

5. 実施内容

コロナ禍のため神輿の運行が中止された令和2年（2020）以前は、旧暦6月11日・12日に2日間行われ、神輿は御旅所で1泊して翌日本社に戻る日程であったが、3年休止ののち令和5年に1日のみの運行で再開された。

祭礼が近づくと、当組の人々が白木の神輿を洗い、前日には大崎龍神社前広場の笹竹の結界作りなどの会場準備が行われ、御旅所の準備も行われる。河原津漁港ではサワラ漁の漁船に幟・大漁旗・笹竹・提灯等で



写真1 御召船（左）と御供船（右）

御召船と御供船の飾りつけが行われる。

祭礼当日午前9時に大崎龍神社に神社総代と各組代表（当組代表は「当元」と呼ばれる。）等の地区役員が拝殿に登って神事が行われて祭礼が始まる。10時に舁夫によって神輿の宮出しが行われ、約700mあまり先の河原津漁港まで神輿が早かれる。午前10時半過ぎに河原津漁港で御召船に神輿が移され、神職や地区役員等が乗って大崎ヶ鼻の御旅所に向けて神輿の海上渡御が始まる。御召船には同じように飾った御供船に地区の人々が乗って随行する。

海上渡御は河原津漁港を出た後、御召船・御供船が河原津集落南端の沖合まで南に進んだあと左に旋回して集落北端の沖合まで進み、左回りに3周する（長径約2km、短径約1.5kmの楕円形状、延べ約15km、所要1時間余）。御召船・御供船の舳先にはブンカイチョウと呼ばれる航行責任者が立ち、片手に高張提灯を持って舵の方向を操舵者に指示する。海上渡御の間、御

召船では太鼓が叩かれ、宮司が大祓詞を奏し御幣を振る。御召船・御供船は集落沖合を周回した後、大崎ヶ鼻北の砂浜に舳先から乗り上げ、舁夫によって神輿が陸揚げされる。

上陸後、神輿は大崎ヶ鼻尾根の標高約30mにある御旅所まで担ぎ上げられ、神事の準備が整った後、12時半頃から御旅所神事が行われる。



写真2 海上渡御をする御召船

神事後、神輿は浜に下ろされるが、舁夫たちによって波打ち際から勢い良く海に投げ入れられ海水に何度も浸されて、みそぎが行われる（かつては往路の海上渡御前にもみそぎが行われていた）。地区の人々には、この神様が荒々しく扱われるほうが喜ばれると信じられている。その後に御召船に担ぎあげられ、13時頃から復路の海上渡御が行われる。



写真3 神輿のみそぎ

復路の海上渡御は、往路と同じように河原津集落南端の沖合まで進んだあと左に旋回して集落の北端沖合まで左回りに3周する（所要約1時間）。周回を終え河原津漁港に入る前に、最北端の北三組が浜で迎えのお焚上げ（松葉2袋余を焚く）を行うと、御召船はそれに応じて浜に立てられた組の幟に近づいて正対し、

北三組に向けて宮司が御幣を振る。その後に御召船・御供船は河原津漁港に入る。

漁港で陸揚げされた神輿は、漁港に隣接する漁業組合に舁きこまれ、神事が行われる。その後、河原津集落に戻り、集落の最も北に位置する北三組から南に向けて各組を順に巡幸する。各組では、神輿の巡幸を迎えるためにそれぞれ松葉のお焚上げが行われ、集まった住民が参列して神事が催される。

南一組まで神輿が巡幸された後、21時頃に大崎龍神社に戻り、宮入り神事が行われて祭礼が終了する。

なお、2日間日程では、神社での祭礼が12時、宮出しが13時から行われ村内全域を巡幸した後、18時から海上渡御が行われていた。20時半頃に大崎ヶ鼻の御旅所で神事が行われ、宮司と当組の数人が神輿を守って泊まり込んだ。翌日、18時頃から迎えの御召船で海上渡御が行われ、集落に戻った後に各組を巡幸し、22時頃に宮入が行われていた（かつては夜半を過ぎてからの宮入であった）。

6. 参考文献

- 星加宗一 1952 「大崎龍神社『おくわげん祭』を見る」
『小松史談』第11号 小松史談会
東予市誌編さん委員会編 1987 『東予市誌』東予市
森正康 2018 『街角のフォークロア』愛媛県文化振興財団

7. 調査日

令和4年7月9日、令和5年7月21・22日

(日和佐 宣正)

57. 興居島の管絃祭

別称：十七夜

伝承地：松山市泊町

実施時期：旧暦6月17日

指定：無

テーマ：35

1. 地区の概要

興居島は松山市高浜港の西約2kmにある。泊地区は人口360人(令和2年：国勢調査)で小富士山(282m)の麓に位置している。島内には歴史ある神社・仏閣もあり、4月の島四国(四国八十八箇所霊場の写し霊場)では多くの人を訪れる。年間を通じた体験イベント、釣りや散策など魅力は尽きない。

2. 実施場所

松山市泊町の巖島神社境内及び蛭子神社

3. 伝承組織

松山市泊地区氏子

4. 由来伝承

天正8年(1580)9月15日、当時の明澤城主石崎四郎三郎が広島島の巖島の神を勧請し巖島神社を創建した。管絃祭はこれにより始まったとされ、毎年旧暦の6月17日に行われる。「海上安全と氏子安穩」を願う伝統の祭りである。

5. 実施内容

祭り当日の午後、拝殿においてお祓いが済むと巫女が鈴と扇を持ち「巫女舞」が行われる。続いて神輿に御霊を遷して神社を出発する。途中で氏子・見物人らが神輿の下をくぐって家内安全や無病息災を祈願する。海岸まで行くと神輿を御座船に乗せ海上を行き来した後、お旅所となっている近くにある蛭子神社で「奉納の舞」を行い、再び巖島神社に帰る。

かつては2隻の伝馬船を組んだ御管絃船に神輿を乗せ、管絃楽を奏でながら漕ぎ伝馬船が曳いていた。また、海岸線に飾られた提灯の明かりが夜空に映え、幻想的な雰囲気を演出していた。

6. 参考文献

興居島中学校 1985 『ふるさと興居島』

田中正人・編 2019 『興居島の面影』

宮脇通赫 1894 『伊予温故録』

7. 調査日

令和4年7月15日(旧暦6月17日)

(豊田 渉)



図1 興居島の位置図(国土地理院地図より作成)



写真1 御管絃祭船



写真2 管絃祭の様子